

横尾遺跡 11

—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2017

大分市教育委員会

序 文

本報告書は、大分市横尾地区において平成3年度から行われている横尾土地区画整理事業に伴う調査のうち第154・155・156次発掘調査の成果を収録したものです。

横尾遺跡は、大分川と大野川の下流域に挟まれた鶴崎台地上に位置しています。25年間の調査成果により、旧石器時代から明治時代までの遺跡が発見され、現代に至るまで長い間、多くの人々が暮らす地域であることがわかっています。

今回報告いたします第154次から第156次調査では、弥生時代後期から平安時代までの遺跡が見つかりました。

第154次調査では、古墳時代のカマドをもつ方形竪穴建物跡、第155次調査では土器の素材となる粘土を採掘した土坑が数多く発見されました。また、第156次調査においては、これまで検出できた弥生時代後期の円形竪穴建物跡を2棟確認しています。

本書におきましては、当地区の区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書としては最後となるため、これまでの調査成果を見直し、遺構が多く見られる9世紀代に重点を置き、その当時の横尾遺跡の様相をまとめ、総括としました。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究のみならず、広く市民の皆様にふれることができ、郷土の歴史学習に幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りました横尾地区の皆様ならびに関係者各位に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成29年3月10日

大分市教育委員会

教育長 三浦 享二

例 言

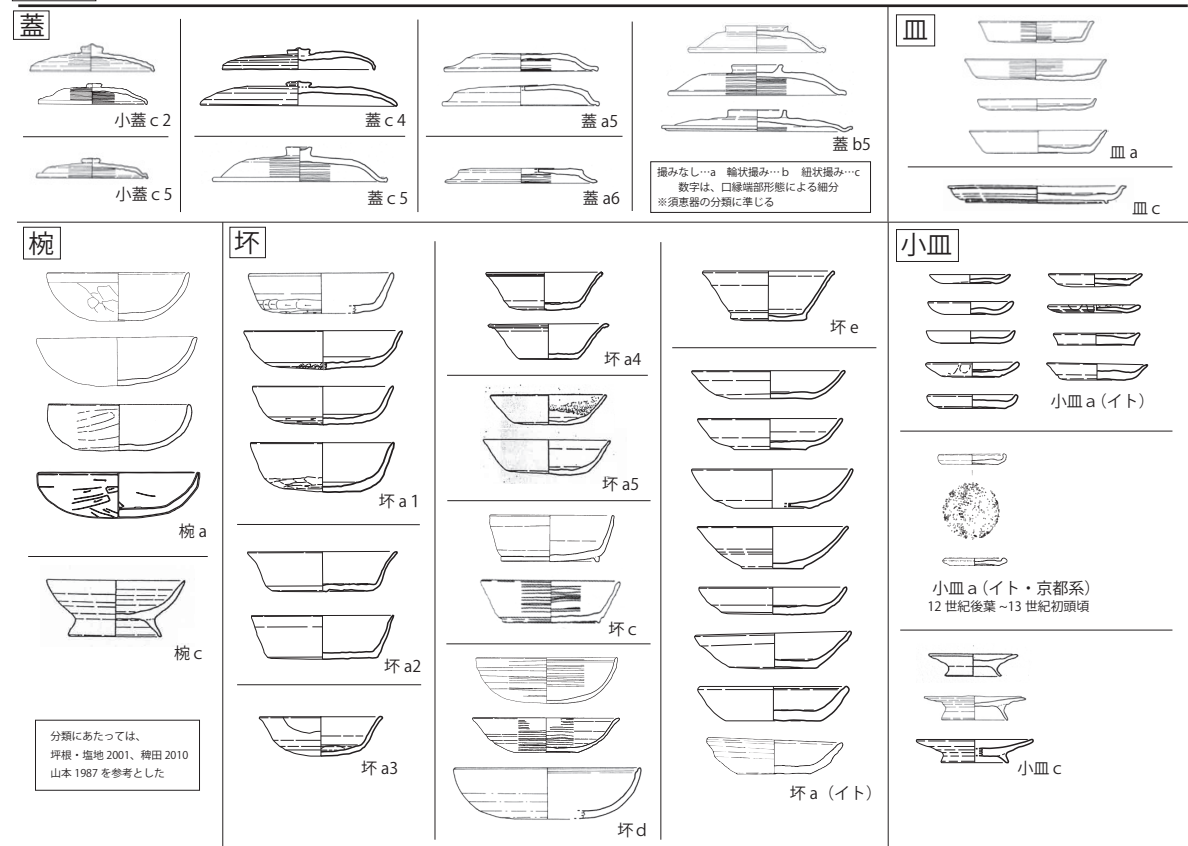
- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市大字横尾において、大分市横尾土地区画整理事業に伴い、平成 27・28 年度に調査を実施した横尾遺跡第 154・155 次および第 156 次調査地点の成果を記録した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査における遺跡の掘削および調査記録作成業務、遺物の 1 次整理 (接合・注記) については、大分市教育委員会文化財課 (調査担当：池邊千太郎・小野綾夏) の委託を受け、第 154・155 次調査を株式会社プロレリック (業務責任者：村上孝司)、第 156 次調査を株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：松浦智) がおこなった。
- 3 遺構の実測・写真撮影は、第 154・155 次調査を株式会社プロレリック (業務責任者：同上)、第 156 次調査を株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：同上) がおこなった。調査区の航空写真撮影は、第 154・155 次調査は株式会社プロレリックの依頼を受け株式会社ふじたが、第 156 次調査は株式会社九州文化財総合研究所の依頼を受け東亜航空技研株式会社がおこなった。
- 4 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図は、株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：永井美香) が大分市教育委員会文化財課の委託を受けおこなった。
- 5 遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図は、第 154・155 次調査を株式会社プロレリック (業務責任者：同上)、第 156 次調査を株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：松浦智) がおこなった。
総括図版の作成・製図作業は小野綾夏 (大分市教育委員会文化財課) がおこなった。
- 6 遺物写真撮影は、株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：永井美香) がデジタル写真撮影をおこなった。
- 7 発掘調査で収集した土壌の科学分析については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、環境考古研究会 (業務責任者：金原正子) がおこなった。なお、第Ⅳ章の分析結果については第Ⅰ～Ⅲ章および第Ⅴ章とは別図版番号とし、目次に記載はしていない。
- 8 本書の執筆は、以下のとおりである。
第Ⅰ章 小野 綾夏 (大分市教育委員会文化財課)
第Ⅱ章 永井 美香 (株式会社九州文化財総合研究所)
第Ⅲ章 第 154 次・155 次調査 永井 美香 (株式会社九州文化財総合研究所)
第 156 次調査 留野 優兵 (大分市教育委員会文化財課)
第Ⅳ章 金原 正子 (環境考古研究会)
第Ⅴ章 永井 美香 (株式会社九州文化財総合研究所)
- 9 本書の編集は、大分市教育委員会と株式会社九州文化財総合研究所 (業務責任者：永井美香) の双方の企画の下、株式会社九州文化財総合研究所がおこなった。
- 10 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター (大分市大字田原 337 番地の 5) に収蔵・保管している。
- 11 報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』にもとづき実施している。

凡 例

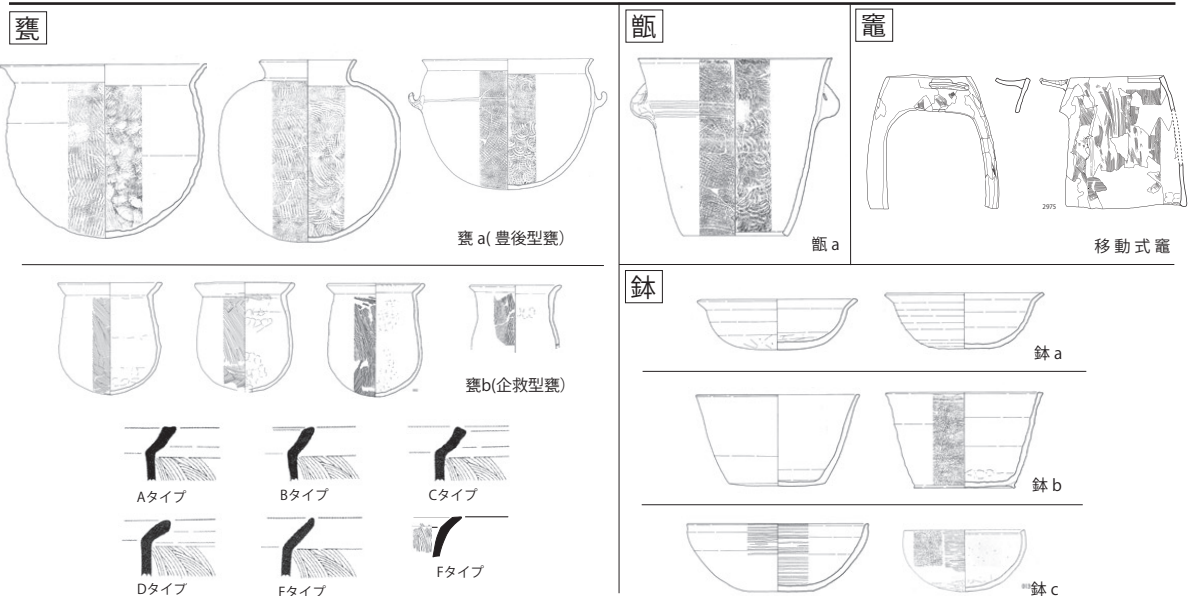
- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 SD：溝状遺構 SP：ピット・柱穴 SX：性格不明遺構
- 2 本誌に用いた方位はすべて座標北 (G.N.) である。座標は、旧日本測地系の平面直角座標 2 系 (北緯 33° 0′、東経 131° 0′) の X・Y 座標を基点として標記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記入している。また、標記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル (m) で、遺物の法量はセンチメートル (cm) で表記している。
- 5 遺物の法量の内、器高と口径、底径、高台径は以下のとおりに計測している。
器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
口径：上記の状態で口縁端部外縁の最大径
底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
高台径：高台端部外縁の最大径
- 6 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
①遺物断面が黒塗りのもの…須恵器・陶器
②遺物断面が灰色のもの…瓦質土器・瓦器・瓦
③遺物の断面の内側が灰色…黒色土器 A 類
④遺物平面の稜線と調整の変換点…実線
⑤調整が同じでその単位がわかるもの…長破線
⑥釉と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの…一点破線
- 7 本書に用いた出土土器の分類および年代観は次のページに掲げる分類資料図 -1、分類資料図 -2 に示す標識資料との比較による。
なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図 -2 にある参考文献一覧表のとおりで。

土師器分類 (8 世紀～ 13 世紀までの土師器)



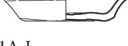




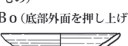
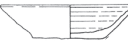



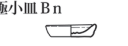















供膳具 ミガキ a2 がある場合は各分類のあとに (ミガキ) を加える ex: 皿 a (ミガキ)










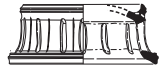
煮炊具・貯蔵具



土師器分類（14 世紀～ 16 世紀の土師器）

【A系統】 （「中世在地系土器」）	【B系統】 （工具を利用した調整を施す逆「ハ」字に開くもの）	【C系統】 （「京都系土師器」）	
坏 A    小皿 A I  小皿 A II  	坏 B n（底部内面の工具痕をナデ消すもの）  坏 B o（底部外面を押し上げるもの）  I  II  III  IV  小皿 B n  極小皿 B n  耳皿 B n  	皿 C     小皿 C  椀 C 	a 類  口縁部に向かって肥厚する b 類  口縁部外面は短く外反する 口縁部内面は平坦又は内湾部を有し 先端部が突起する c 類  口縁部が大きく外反する d 類  口縁部が鋭角的で、外面押さえ部 との境が明瞭である e 類  b 類と c 類の折衷で、口縁部が短く 外反する f 類  体部から大きく外反する 1：器壁 5mm 前後 2：器壁 6～7mm 3：器壁 8mm 前後 皿 C については、河野（2002）を参考に、 口縁部形状と器壁の厚みを加味して分類する。[ex 皿 C（a 3）] 河野史郎 2002 「出土土師器・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年」 『大友府内 4』大分市教育委員会

その他の土器分類

■ 黒色土器		■ 瓦器（在地）	■ 須恵器
蓋（A 類）  椀 a 	 椀 c（A 類）  椀 c（B 類）	小皿 c   椀 c 	硯（圈足硯） 

分類資料図 - 2

<分類にあたっての参考文献>

[土師器]

坪根伸也 1995 「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡Ⅱ』大分市教育委員会
 坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
 坪根伸也 2010 「古代の土師器について」『下郡遺跡群Ⅷ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 100 集
 山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性 九州・南西諸島」『共同研究] 中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第 71 集
 山本信夫 1987 「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』
 林潤也・中西武尚・今田しのぶ 2001 「豊後における都城系土師器について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

[瓦質土器] [土師質土器] [中世須恵器]

田中裕介 1996 「6」土師質小皿『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（5）大分県教育委員会
 山本哲也 2009 「豊前・豊後における瓦質土器の初期様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
 河野史郎 2002 「出土土師器・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年」『大友府内 4』大分市教育委員会
 森田稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

[近世陶磁器]

九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10 周年記念

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 各地区の遺構と遺物	9
(1) 横尾遺跡第154次調査	9
(2) 横尾遺跡第155次調査	19
(3) 横尾遺跡第156次調査	29
第Ⅳ章 自然科学分析	33
第Ⅴ章 総括	42
第1節 横尾遺跡の古代の様相	42

写真図版
報告書抄録

図版目次

第1図 横尾遺跡調査範囲図 (1/6,000)	3	第17図 第155次調査区土層模式図	19
第2図 横尾遺跡位置図 (1/4,000,000)	4	第18図 第155次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)...	20
第3図 横尾遺跡周辺地質図	5	第19図 SB020 遺構実測図 (1/60)	21
第4図 周辺遺跡位置図 (1/30,000)	7	第20図 SK006・SK007 遺構実測図 (1/60)	22
第5図 第154・155・156次調査範囲図 (1/25,000)	8	第21図 SK008・SK009・SK010・SK011 遺構実測図 (1/60)...	23
第6図 第154次調査区土層模式図	9	第22図 SK012・SK013・SK014・SK015 遺構実測図 (1/60)...	24
第7図 第154次調査区遺構配置図 (1/300)	10	第23図 SK016・SK017 遺構実測図 (1/60)	25
第8図 第154次調査区全体遺構図 (1/300)	11	第24図 SK023 遺構実測図 (1/60)	25
第9図 SB020 遺構実測図 (1/60)	12	第25図 SK025・SK027・SK028 遺構実測図 (1/60)	26
第10図 SB030 遺構実測図 (1/60)	13	第26図 第155次調査区出土遺物実測図 (1/1・1/4)	27
第11図 SI005 遺構実測図 (1/60)	14	第27図 第156次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)...	29
第12図 SI010 遺構実測図 (1/60)	15	第28図 SX015 遺構実測図 (1/80・1/20)	30
第13図 SI010 カマド遺構実測図 (1/30)	16	第29図 SX020 遺構実測図 (1/80・1/20)	31
第14図 SD025・SD035 遺構実測図 (1/300・1/60)	16	第30図 鶴崎台地上に位置する官衙関連遺跡	43
第15図 SD015 遺構実測図 (1/300・1/60)	17	第31図 横尾遺跡出土の官衙遺跡通有遺物 (1/6)	45
第16図 第154次調査区出土遺物実測図 (1/4)	18		

表目次

第1表	横尾遺跡報告書掲載地点一覧表	2	第4表	第154次調査区遺構番号一覧表	49
第2表	第154次調査区出土遺物観察表	48	第5表	第155次調査区遺構番号一覧表①	49
第3表	第155次調査区出土遺物観察表	48	第6表	第155次調査区遺構番号一覧表②	50

写真図版目次

写真図版1

- 1 第154次 調査区遠景(西より)
- 2 第154次 調査区全景(上が北)

写真図版2

- 1 第155次 調査区遠景(南より)
- 2 第155次 調査区全景(上が西)

写真図版3

- 1 第156次 調査区遠景(南西より)
- 2 第156次 調査区全景(上が南)

写真図版4

- 1 第154次 SB020 完掘状況(東より)
- 2 第154次 SB030 完掘状況(南より)
- 3 第154次 SI005 貼床検出状況(南より)
- 4 第154次 SI005 完掘状況(南より)
- 5 第154次 SI010 貼床検出状況(南より)
- 6 第154次 SI010 完掘状況(南より)
- 7 第154次 SI010 カマド焼土遺物出土状況(南より)
- 8 第154次 SI010 カマド火床面土層(東より)

写真図版5

- 1 第154次 SI010 カマド完掘状況(南より)
- 2 第154次 SD015 検出状況(西より)
- 3 第154次 SD025・SD035 完掘状況(東より)
- 4 第155次 SB020 完掘状況(北より)
- 5 第155次 SK006 遺物出土状況(西より)
- 6 第155次 SK006 完掘状況(西より)
- 7 第155次 SK007 土層(西より)
- 8 第155次 SK009 土層(北西より)

写真図版6

- 1 第155次 SK010 土層(西より)
- 2 第155次 SK011 完掘状況(東より)
- 3 第155次 SK014 完掘状況(南より)
- 4 第155次 SK016 土層(南より)
- 5 第155次 SK025 遺物出土状況(西より)
- 6 第155次 SK025・SK027・SK028 完掘状況(北より)
- 7 第156次 SX015・SX020 検出状況(東より)
- 8 第156次 SX015・SX020 完掘状況(上が西)

写真図版7

- 第16図-8/第16図-16/第16図-18
- 第16図-20/第16図-21/第16図-23
- 第16図-26/第16図-27/第16図-29
- 第16図-30/第26図-3/第26図-4
- 第26図-12内面/第26図-12外面/第26図-17
- 第26図-19/第26図-21/第26図-22

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査経過

横尾遺跡は大分県大分市大字横尾に所在する埋蔵文化財包蔵地である。本遺跡が周知される範囲のほぼ全域の土地区画整理事業が平成 2 年度に認可され、横尾土地区画整理事業として市街地の整備が進められている。その施行面積は 82.1 ヘクタールである。この横尾土地区画整理事業に伴う横尾遺跡の発掘調査は、平成 3 年度より実施されており、平成 28 年 12 月において 156 地点の調査を完了している。当該地域には古くより 5 遺跡（横尾下組遺跡・多武尾遺跡・東中尾遺跡・有田遺跡・有田古墳）が周知されていたが、平成 14 年には総称して横尾遺跡という名称に変更されている。なお、横尾遺跡のこれまでの調査地点については第 1 図に、報告書掲載回数については第 1 表に示す。

横尾遺跡では平成 12 年度に実施した第 82 次調査において、縄文時代のドングリ貯蔵穴群をはじめ、アカホヤ火山灰の下位から「水場の遺構」や姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で発見され、縄文時代早期以降の遺構が存在するという貴重な知見を得ている。その経過より平成 17 年度には、整理事業計画の変更も認可され、自然と歴史など地域特性を生かした魅力ある住環境整備が進められ、平成 21 年 2 月 21 日には横尾貝塚が国の史跡に指定される。

本書に所収する発掘調査報告は、平成 27 年度に実施した第 154・155 次調査の 2 地点、平成 28 年度に実施した第 156 次調査の記録である。第 154・155 次調査は、平成 27 年 11 月 16 日に着手をおこない、平成 27 年 12 月 28 日に第 155 次調査区、平成 28 年 1 月 15 日に第 154 次調査区の埋め戻しが完了し調査を終了した。第 156 次調査は、平成 28 年 9 月 23 日に着手をおこない、平成 28 年 10 月 31 日に終了している。

なお、遺跡の記録資料や出土遺物等の整理作業は調査の終了後引き続きおこない、報告書の作成を平成 29 年 3 月 10 日までおこなった。

第 2 節 調査組織

＜平成 27 年度 調査体制＞

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	三浦	享二					
大分市教育委員会 教育部					埋蔵文化財担当班				
	文化財課	課長	塔鼻	光司	参事補 (ケルプ°リーダー)		池邊千太郎		
		参事	長野	清尊	事務員 (調査担当)		小野 綾夏		
			坪根	伸也	管理庶務担当班	主査 (ケルプ°リーダー)	首藤 敏行		
	特別顧問	玉永	光洋			主査	竹中 智美		
大分市歴史資料館	館長	武富	雅宣			主任	朝川 貴俊		
	副館長	安東	俊昭						
	顧問	讃岐	和夫						
大分市都市計画部まちなみ整備課					課長	内田	寿	横尾土地区画整理事務所 参事兼所長	吉田 健二
					参事	松川	正典	工務担当班 参事補 (ケルプ°リーダー)	中村 清治
庶務担当班		参事補 (ケルプ°リーダー)			三重野尚子	専門員		油布 則秀	
					主査	水田	寿憲	技 師	吉野内 謙

<平成 28 年度 調査体制・報告書刊行>

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 三浦 享二

大分市教育委員会 教育部

文化財課 課長 塔鼻 光司

参事 長野 清尊

坪根 伸也

栗田 博之

特別顧問 玉永 光洋

館長 武富 雅宣

顧問 讃岐 和夫

大分市歴史資料館

埋蔵文化財担当班

参事(グループリーダー) 池邊千太郎

主事(整理担当) 小野 綾夏

嘱託(調査担当) 福永 素久

留野 優兵

管理庶務担当班 主査(グループリーダー) 首藤 敏行

主任 大島 輝

主事 永野 雄介

事務員 中山 美穂

大分市都市計画部まちなみ整備課 課長 姫野 正浩

政策監 松川 正典

庶務担当班 参事補(グループリーダー) 三重野尚子

主査 水田 寿憲

横尾土地区画整理事務所 参事兼所長 吉田 健二

工務担当班 参事補(グループリーダー) 神野 潔

参事補 油布 則秀

主任 吉野内 謙

第 1 表 横尾遺跡報告書掲載地点一覧表

報告書名	調査地点	報告書名	調査地点	報告書名	調査地点	報告書名	調査地点
横尾貝塚 2008	82次-A区	横尾遺跡3 2010	135次	横尾遺跡7 2013	91次	横尾遺跡8 2014	58次
	82次-B区		136次		92次		73次
	82次-C区		137次		94次		80次
	82-2次		138次		95次		151次
	82-3次		139-1次		96次	横尾遺跡9 2015	10次
	86次		139-2次		96-2次		62次
	87次	横尾遺跡4 2011	69次		97次		67次
	93次		134次		98次		68次
	100次		140次		99次		70次
	103次		141次		101次		71次
横尾遺跡 2008	120次	横尾遺跡5 2012	142次		102次		72次
	122次		143-1次		104次		75次
	112-2次		143-2次		105次		76次
	113次		143-3次		106次		77次
	114次		143-4次		107次		78次
	115次		143-5次		108次		150次
	116次		143-6次		109次		152次
	117次		143-7次		110次	横尾遺跡10 2016	1次
	118次	横尾遺跡6 2013	143-8次		111次		2次
	121次		144次		112次		4次
横尾遺跡2 2009	123次		145次	横尾遺跡8 2014	県道法面立会調査		14次
	124次		146次		5次		31次
	125次		147次		16次		33次
	126次		148-1次		18次		34次
	127次		148-2次		20次		63次
	128次		148-3次		21次		64次
	129-1次	横尾遺跡7 2013	148-4次		22次		65次
	129-2次		148-5次		32次		66次
	129-3次		43次		37次		74次
	130次		46次		45次		79次
横尾遺跡3 2010	131次		83次		48次	横尾遺跡11 2017	81次
	132次		84次		49次		149次
	133-1次		88次		52次		153次
	133-2次		89次		53次		154次
	133-3次		90次		57次		155次
							156次



第1図 横尾遺跡調査範囲図 (1/6,000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

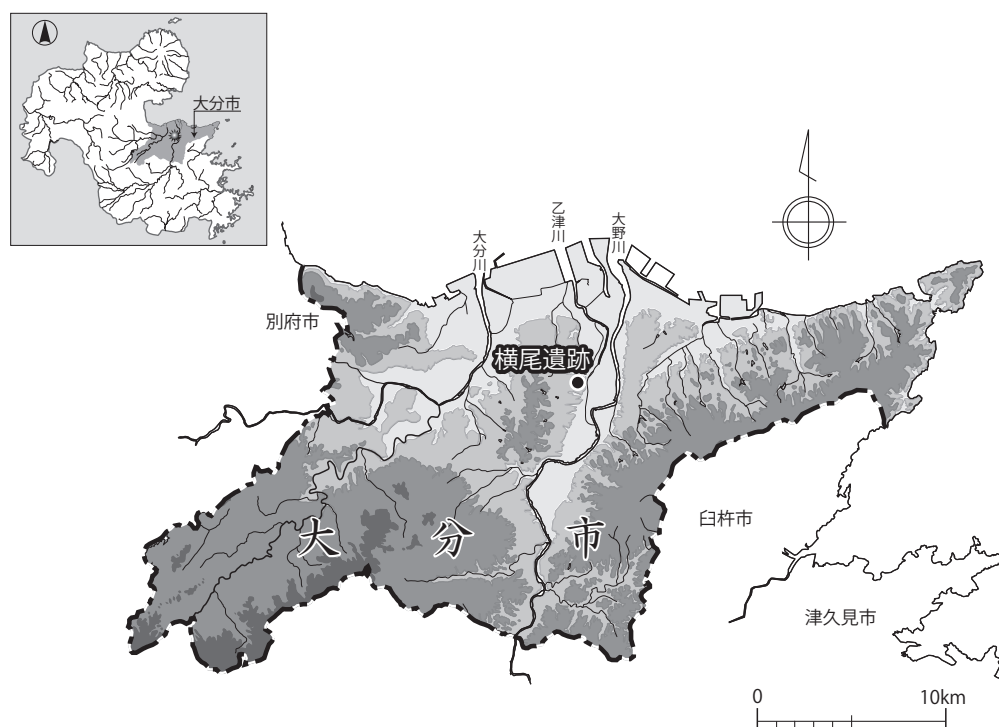
横尾遺跡は市街地より南東へ約 7.5 kmの大分市大字横尾に位置する。大分の沖積平野を形成した県内最大河川である大野川と大分川に挟まれた下流域に広がる鶴崎台地上に位置し、その東端の標高 30 m前後の台地上に遺跡が長期間にわたり展開している(第2図)。遺跡の東側に位置する大野川は、天正年間に改修がおこなわれ、乙津川が分流されるまで鶴崎台地に近接して流れていたことが指摘されており^(註1)、本遺跡は県内最大河川の下流域に形成された遺跡と位置付けることができる。また鶴崎台地は、標高 165.3mの古城山を最高位に、平坦面が広く南北方向に広がり、台地の東部には段丘地形が顕著に発達する。

第3図の地質図に記した囲みの位置が、本遺跡の形成された場所である。本地域では、中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)、中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)、低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が広く分布しており、それぞれが横尾面、城原面、松岡面に概ね対応するものと判断される^(註2)。

その中でも、遺跡が集中する場所は中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)が分布する城原面で、標高 31～39m地点に相当し、谷が北側と東側に向けて細かく開析している。弥生時代には北側の細かく開析した谷の尾根を利用して環濠が形成され、その内側の平坦面には集落が営まれた。

また、囲み部の中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)と中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)の分布の境界、つまり横尾面から城原面に地形が変換する地点から東側の城原面にかけて白色粘土層が広く分布する。

第3図の星印は地下水が段丘崖から湧出している地点である。同図の囲み部、低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が分布する地点にも地下水が伏流しており、その湧水地の場所が「古井戸(ふるいのこ)」と語り継がれ、現在に至っている。



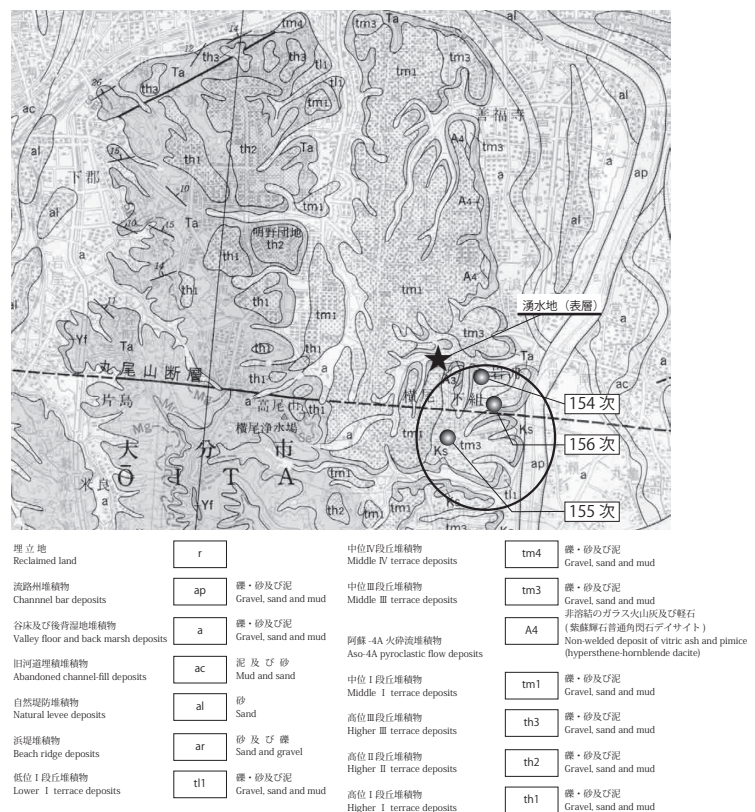
第2図 横尾遺跡位置図(1/4,000,000)

第2節 歴史的環境

横尾遺跡の所在する鶴崎台地は旧石器時代から明治時代に至るまで、重要な文化財が多く残されている。旧石器時代では、大分県スポーツ公園建設事業にともなって調査された一方平Ⅰ遺跡があげられる。旧石器時代後期の文化層中の礫群や土坑から、ナイフ形石器や削器などとともに、縦長剥片や石核、流紋岩の原石が大量に出土している。このことから原石が採取できる原産地遺跡と考えられ、石材供給の拠点遺跡として注目される^(註3)。また、鶴崎台地上に所在する多武尾遺跡や地蔵原遺跡などでも流紋岩を石材とした石器や剥片、石核などが出土しており、石材配給に関連する遺跡の展開がうかがえる。

縄文時代では横尾貝塚が知られ、本格的な発掘調査は昭和55年から昭和56年に大分県教育委員会により実施されている。この調査によって、縄文時代前期と中期の貝層が認められた。前期は汽水域に生息するヤマトシジミを主体とする貝層、中期はハマグリを主体とする貝層であり、こうした点から時間経緯にともなう自然環境の変化がうかがえる。貝層からは、縄文土器とともに石鏃・石錘・石斧などの石器や釣針・モリなどの用途が考えられる骨角製の漁労具などが出土している。さらに貝層中位とその下位に造営された土墳墓から、手足の関節を強く折り曲げた屈葬姿勢や改葬状態を示す埋葬人骨17体が確認され、貝塚周辺に墓域が形成されていたことが判明した^(註4)。平成12年度に大分市教育委員会が、貝塚の西側台地裾部を中心におこなった遺跡の範囲確認調査では、後に貝塚となる場所の北西側の谷や緩斜面地において、縄文時代早期後半に比定される重さ10kgを超える姫島産黒曜石の石核や、縄文時代早期末の編みかごに収納された姫島産黒曜石の剥片や石核、木材をコの字状に配置した水場の遺構、縄文時代後期のドングリ貯蔵穴群などが発見された。このことから縄文時代早期から断続的に居住地として利用されていたことが判明している^(註5)。横尾貝塚は、当時の居住域・貝塚・埋葬地が残り、また当時の自然環境の変化を具体的に示す遺跡であることから、平成21年2月21日に国史跡に指定されている。

弥生時代の早期から前期に該当する遺跡は、刻目突帯文土器が出土した一方平Ⅳ遺跡や尾崎遺跡があげられる^(註6)。中期から後期に入ると広範囲にわたり集落が形成されるようになる。当該期の集落遺跡としては横尾遺跡(多武尾遺跡)、地蔵原遺跡、岡原遺跡、松岡遺跡、二目川遺跡B地区などが認められる。特に後期に入ると遺跡数が増加し、集落範囲の拡大が見られる。注目されるのは、弥生時代後期後葉～末頃の環濠集落として知られる横尾遺跡(多武尾遺跡)である^(註7)。断面逆台形状の環濠の内側に防御のためと考えられる土塁の存在が指摘できる希少な遺跡であり、遺構内からは朝鮮式の小銅鐸が出土している。さらに集落の縁辺部では、当該期の方形周溝遺構ならびに土墳墓なども確認されており、集落遺跡を解明する上で重要な発見が相次いでいる^(註8)。また、猪野遺跡第6次調査では、弥生時代



吉岡敏和・星住英夫・宮崎一博 1977 「地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)」「大分地域の地質」地質研究所の一部を改変

第3図 横尾遺跡周辺地質図

後期前半に比定される中広形銅矛を埋納した遺構が確認され、祭祀にともなうものとして注目されている^(註9)。

古墳時代では、横尾遺跡内にある有田古墳群が知られている。調査の成果より古墳時代中期に比定される^(註10)。以前より円墳2基(1号墳・2号墳)と小児用の石蓋土壇墓1基が周知されていたが、平成14年度の調査により1号墳・2号墳から南東約120mの地点に、古墳時代後期に比定される周溝をもつ円墳2基(3号墳・4号墳)が確認されている。また、4号墳の南側には比高差1.5mの高まりがあり、これについても古墳であった可能性が高い。集落については、地蔵原遺跡で古墳時代前期の竪穴建物跡を検出している。また横尾遺跡の南方1km地点の毛井遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡約60基、その付近からは真萱石棺が発見されており、大野川流域の低地に当該期の集落が展開する^(註11)。

古代では、同台地上に奈良・平安時代の官衙的要素をもった遺跡が所在する。地蔵原遺跡では、掘立柱建物跡約80棟や、コの字状に区画される溝が確認され、3点の円面硯が出土している^(註12)。また猪野新土井遺跡からは、南北60m、東西45mの溝で区画された空間の中に約20棟の掘立柱建物跡が確認され、「豊」と書かれた墨書土器が出土している^(註13・14)。横尾遺跡においても9～10世紀の大型掘立柱建物跡、火葬墓の可能性が想定される方形周溝墓や木棺墓も確認され^(註15)、出土した墨書土器・刻書土器や風字硯、緑釉陶器等から、官衙に関連する施設が展開していたことが示唆される。生産遺跡としては、須恵器の焼成をおこなった松岡古窯跡群^(註16)や土師器の焼成遺構が確認された井ノ久保遺跡^(註17)、包含層や遺構からフィゴの羽口や鉄滓が多数出土した工人集落に比定される二目川遺跡などが所在する^(註18)。また横尾遺跡の西南部一帯では、9～10世紀代を中心とする粘土採掘坑群が300基以上確認されており、この周辺で継続的に土器生産がおこなわれていたことが想定される^(註19)。

中世では、横尾遺跡において戦国期に比定される方形館跡が4基確認されている^(註8・20)。その内3基は半町四方規模の方形館跡である。ここから北西へ約2.5kmの地点にある猪野中原遺跡^(註21)や猪野新土井遺跡では、大友家臣団屋敷と推定される半町四方規模の方形館跡が確認されている。この鶴崎台地一帯は中世高田庄に比定される地域であり、南北朝時代以降には大友氏の所領となった荘園にあたる。また大友氏はその所領を家臣への預置地として家臣団編成の手段に利用したとされ、これらの遺跡は大友家家臣によって構成された可能性が考えられる。

近世は、文禄二(1593)年に第22代の友吉統(義統)が、朝鮮出兵での失態を理由に豊臣秀吉により、豊後国から除国される。その後は、豊臣秀吉の直轄地(蔵入地)となった豊後国は、複数の豊臣大名により七つに分国支配されるようになる。文禄三(1594)年の記録には、当該地は横尾村となり、周辺地域の猪野、小池原、森町、宮川内、大津留、毛井、二目川などとともに、江戸時代を通じて臼杵藩領に属していた。村内には年貢米の収納施設として規模2間半×3間半の在蔵が設置された記録が残っている。ここで集められた年貢米は、臼杵城下に回送せずに、北側の森村、猪野村の日向道に向けて、家島の村にあった臼杵藩の蔵から大阪へ直送されていた^(註22)。横尾遺跡では、17世紀代の遺構については希薄であるが、18世紀以降になると法雲寺周辺では井戸跡や、近世墓群が認められるようになる。また周辺の調査地点からは、酒造に関連する遺構として、釜場跡・洗い場跡・槽場跡・導水や排水溝などの溝状遺構・掘立柱建物跡などが確認されており、各遺構の切り合い関係や出土した遺物などから、19世紀前半から中頃の段階には酒造りを開始し、近現代に至るまで生産がおこなわれていたことがわかっている^(註19)。

横尾村は、明治時代になり何度か行政単位の編成を経て、明治二十二(1889)年4月1日に施行された市制町村制により、横尾を含めた周辺6ヵ村が合併し明治村となる。昭和二十九(1954)年3月31日には明治村を含めた4ヵ所が合併し鶴崎市となった。次いで、昭和三八(1963)年3月10日大分市に編成され、現在に至る。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	横尾遺跡	弥生～近世	13	二目川遺跡	弥生	25	虫喰谷遺跡	旧石器・縄文・奈良
2	横尾貝塚	縄文	14	水分神社銅矛出地	弥生	26	松岡古窯跡群	奈良
3	有田古墳	古墳	15	新田遺跡	古墳	27	久保田遺跡	中世
4	地藏原遺跡	弥生～平安	16	井ノ久保遺跡	平安	28	上牧ノ内Ⅰ遺跡	奈良・平安
5	尾崎遺跡	弥生	17	毛井遺跡	古墳・中世・近世	29	岡原遺跡	弥生
6	北の崎遺跡	弥生	18	一方平Ⅰ遺跡	旧石器・縄文	30	松岡遺跡	弥生
7	猪野遺跡	弥生	19	一方平Ⅱ遺跡	旧石器・縄文	31	清水遺跡	弥生
8	猪野新土井遺跡	奈良～中世	20	一方平Ⅲ遺跡	旧石器・縄文・奈良	32	向原遺跡	弥生
9	猪野中原遺跡	中世	21	一方平Ⅳ遺跡	旧石器・縄文・弥生	33	真萱石棺	古墳
10	米良草遺跡	弥生	22	九池遺跡	旧石器・弥生・古墳	34	真萱遺跡	中世・近世以降
11	葛木遺跡	弥生	23	牧の内遺跡	旧石器・縄文	35	毛利空桑墓	近世
12	専想寺遺跡	中世	24	論出遺跡	縄文・弥生・古墳			

第4図 周辺遺跡位置図(1/30,000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

本書での報告対象となる調査は、大分市大字横尾において平成27・28年度に実施された横尾土地区画整理事業にともなう3地点の発掘調査である。第154次調査地点は、横尾遺跡の北側に位置し、弥生時代の環濠集落が形成された推定範囲内の西限と考えられる谷の東側に隣接する。周辺の調査では、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴建物跡や16世紀後半～17世紀初頭にかけての掘立柱建物跡、溝状遺構を確認している。

調査の結果、古墳時代中期～後期の竪穴建物跡や近世の溝状遺構2条を確認した。第155次調査地点は、横尾遺跡の西側、白色粘土層の推定範囲内に位置する。これまでの周辺調査と同様、調査区全体から多数の粘土採掘坑を確認した。第156次調査地点は、多武尾遺跡第1次調査区の西側に位置し、弥生時代後期の環濠集落内に所在している。調査の結果、弥生時代後期に比定される円形建物跡2棟を確認した。以下調査区ごとに報告する。



第2節 各地区の遺構と遺物

(1) 横尾遺跡第154次調査

1. 調査概要

調査地は大分市大字横尾字利尾に所在し、横尾遺跡の北側に位置する。調査期間は、平成27年11月16日から平成28年1月15日に実施したもので、調査面積は808㎡である。

調査の結果、古墳時代中期の竪穴建物跡、古墳時代後期のカマドをもつ竪穴建物跡、近世と考えられる溝状遺構、時期不明の掘立柱建物跡が検出できた。これまでの周辺調査では、本調査区北側の第145次調査地点の成果として、古墳時代前期～後期にかけての竪穴建物跡8棟と土坑1基を報告している。また、本調査区南側の第144次調査地点では、16世紀後半頃の方形館を構成する掘立柱建物跡や溝状遺構が確認されている。

2. 基本層序

第6図は、調査区の土層模式図である。現地表面の標高は31.40m前後である。地表面から1.0mにわたり造成土や旧耕作土が堆積する。これらを除去すると安定地盤である明黄褐色土が認められ、この上面で遺構を検出できた。検出面の標高は、約30.10m～30.40mを測る。

3. 遺構

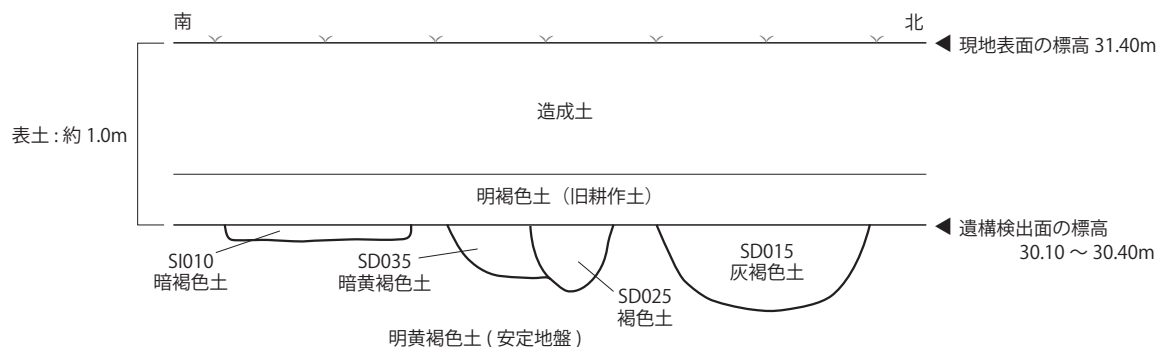
掘立柱建物跡

SB020(第9図)

調査区東側のH15～I16グリッドで検出した桁行2間、梁行1間、身舎面積11.22㎡を測る掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は、N－13°－Eの東西棟である。柱穴は径0.24～0.3mの円形を呈し、検出面からの深度は0.28～0.49mを測る。柱間は、桁行が1.65～1.75m、梁行が3.3mである。柱穴からは、弥生土器片が出土しているが、建物の明確な時期は不明である。

SB030(第10図)

調査区西側のB1～C2グリッドで検出した桁行1間、梁行1間、身舎面積11.84㎡を測る掘立柱建物跡である。建物の主軸方向は、N－25°－Eで南北棟である。柱穴は径0.23～0.56mの円形を呈し、検出面からの深度は0.36～0.44mを測る。柱穴a・cからはこぶし大の礫が出土し、柱穴c・dでは柱痕を検出している。柱間は、桁行が4.23～4.30m、梁行が2.77mである。柱穴からは、弥生土器の壺底部片が出土しているが、小破片であるため遺構の明確な時期は不明である。



第6図 第154次調査区土層模式図



第7図 第154次調査区遺構配置図 (1/300)



第 8 図 第 154 次調査区全体遺構図 (1/300)

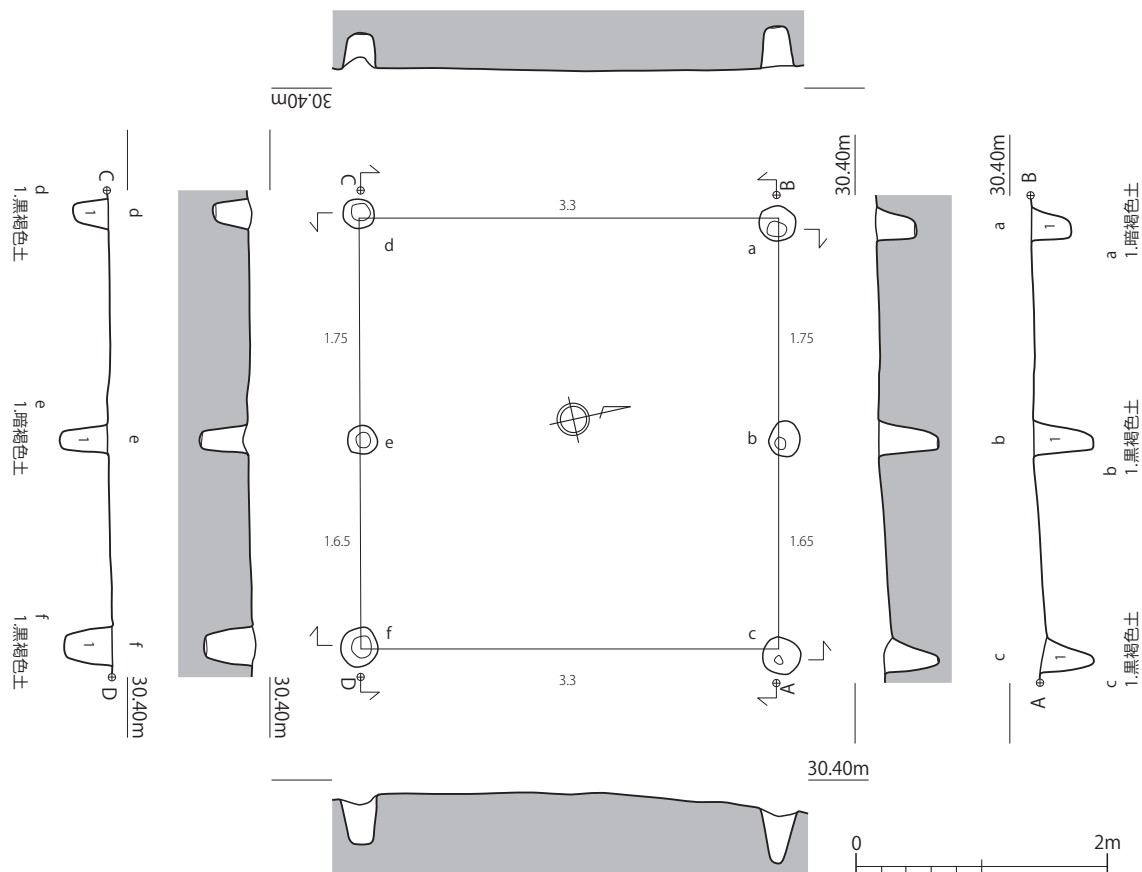
竪穴建物跡

SI005(第 11 図)

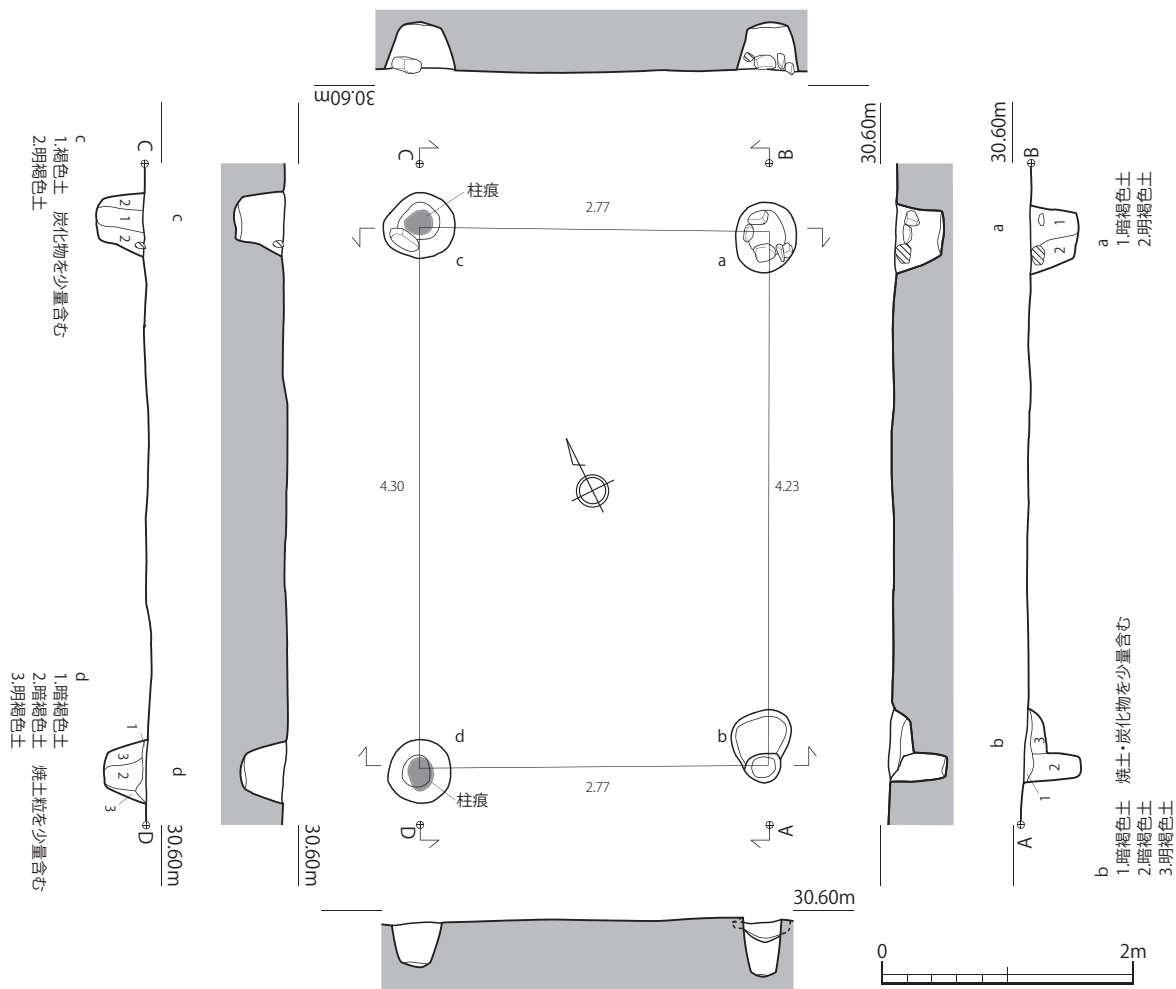
調査区北側の I8 ～ J9 グリッドで検出した竪穴建物跡で、北側半分は調査区外に延びる。平面形状は、隅丸方形である。遺構の規模は長軸 5.0 m、短軸 1.45+ α mを測る。第 4 層の遺構埋土を除くと 0.02 ～ 0.06 m厚の貼床が認められ、検出面から貼床除去後の最大深度は 0.16 mである。内部施設は、貼床上面で検出され、主柱穴 (SI005a・SI005b) ・土坑・壁溝を検出した。主柱穴は東西方向に対をなして 2 基並び、確認した柱穴の配置状況よりおそらく 4 本柱となる。主柱穴の規模は、径 0.15 ～ 0.18 m、貼床面からの深度は 0.24 ～ 0.33 mを測る。壁溝は幅 0.04 ～ 0.16 m、検出面からの深度は 0.09 ～ 0.1 mを測り、南側は部分的に切れている。貼床を除去すると東側では浅いピット群と、間仕切の溝と考えられる南北方向に並ぶ溝状の掘り込み 2 条を確認した。掘り込みの深度は 0.04 ～ 0.06 mを測る。遺構内から土師器の甕・小型丸底壺・高坏等の破片が出土しており、遺構の時期は 5 世紀代と考えられる。

SI010(第 12 図)

調査区西側の D1 ～ E1 グリッドで検出した竪穴建物跡で、西側半分は調査区外に展開する。平面形状は、隅丸方形である。遺構の規模は長軸 7.69 m、短軸 2.73+ α m、床面には 0.02 ～ 0.07 m厚の貼床が認められ、検出面からの最大深度は 0.28 mを測る。埋土は、暗褐色土の単一層である。床面の一部では、しめ固めたような硬化面が認められる。内部施設は貼床上面で検出され、主柱穴と考えられる柱穴 (SI010a・SI010e) ・土坑 (SI010sk001) ・壁溝・溝状の掘り込み・カマドを検出した。2 基の柱穴は、南北方向に対をなしている。柱穴の規模は、径 0.31 ～ 0.41 m、貼床面からの深度は 0.52 ～ 0.54 mを測る。壁溝は幅 0.12 ～ 0.28 m、検出面からの深度は 0.16 ～ 0.21 mを測る。北側の壁溝はカマドの東側まで延びている。カマドの東側から南北方向に延びる全長 1.23m の掘り込みを確認し、掘り込みの北側部分は壁溝に連結している。遺物は少量であるが、土師器の鉢・甕の破片、須恵器の坏・蓋の破片などが出土しており、遺構の埋没時期は 6 世紀末～ 7 世紀初頭と考え



第 9 図 SB020 遺構実測図 (1/60)



第 10 図 SB030 遺構実測図 (1/60)

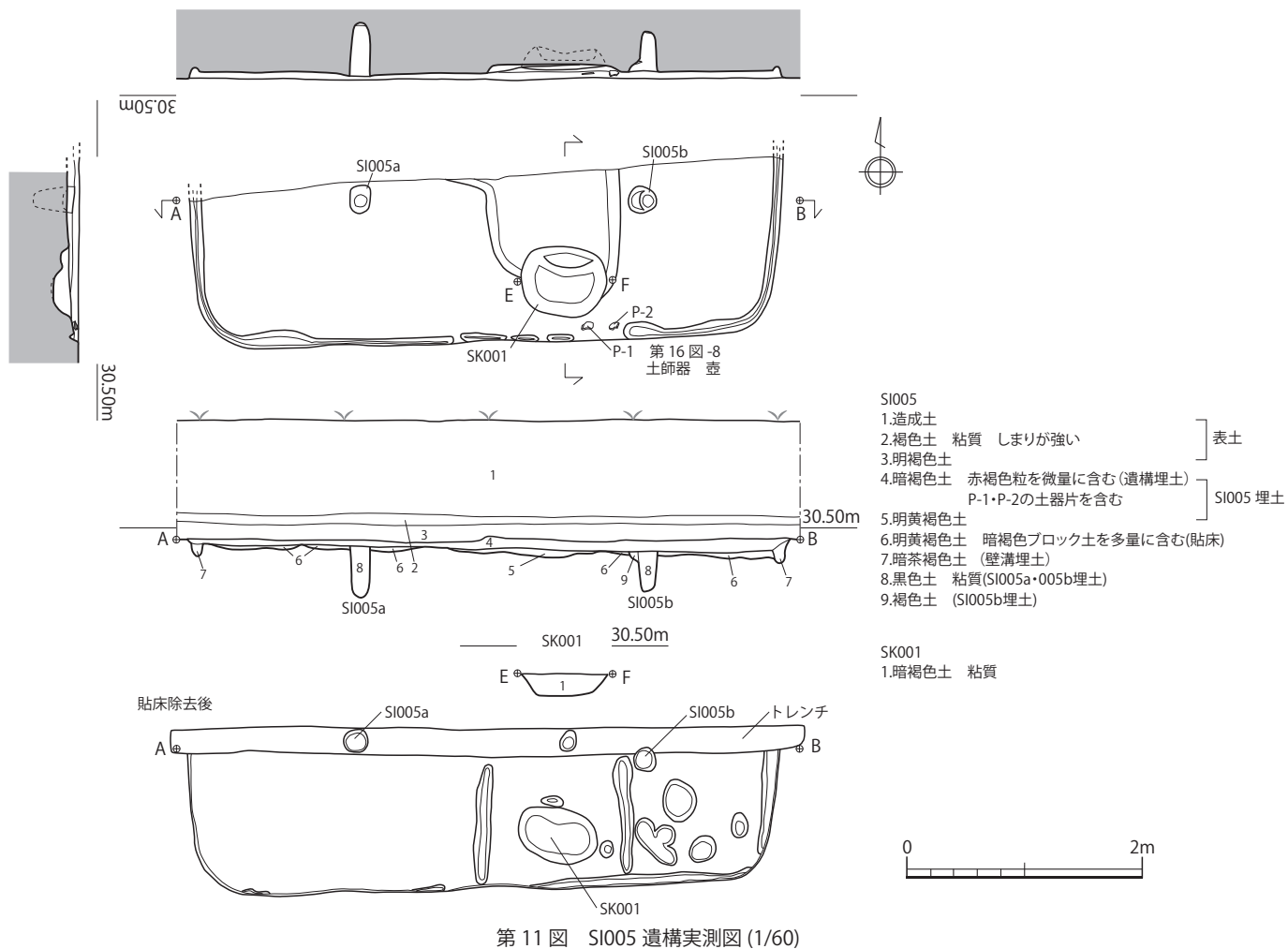
られる。横尾遺跡では、これまで古墳時代の竪穴建物跡は長軸 5.5m のものが最大であったが、今回検出したものはそれを上回る規模である。

SI010sk001(第 12 図)

SI010 貼床面上のほぼ中央付近で確認した土坑で、西側部分は調査区外に展開している。平面形状は、楕円形と想定される。遺構の規模は長軸 0.5 m、短軸 $0.21 + \alpha$ m、床面からの最大深度は 0.11 m である。埋土中から、土師器甕の破片が出土している。

SI010 カマド (第 13 図)

竪穴建物跡の北壁中央で検出したカマドである。西側部分は調査区外に展開しており、全容は確認できない。現状では長軸 1.35 m、短軸 $0.45 + \alpha$ m、床面からの最大高 0.12 m、掘り込みの最大深度は 0.08 m を測る。カマドは、煙道・燃烧部が確認できた。煙道の規模は長さ 0.25 m で、北側に向かって緩やかに傾斜している。燃烧部の火床面は、住居床面とほぼ同じ高さで検出され、被熱によって非常に強く焼きしまっている。燃烧部の焚口部分東側から袖石と想定される石が直立した状態で認められた。袖石の上半部は破損した状態である。復元すると床面からの袖石の高さは 0.25 m で、地中には 0.09 m 埋設されていた。袖石の焚口側にあたる部分には、被熱が認められる。カマドの天井部は削平されているため、構造は確認できなかった。遺構内では、焼土上面から土師器甕の破片が散在した状態で出土した。燃烧部床面からは、土師器甕または壺の胴部が据え置かれ支脚のような状態で出土している。しかし土器の表面には被熱を受けた痕跡はなく、カマド廃棄時の祭祀行為を示す遺物の可能性が考えられる。



土坑

SK001(第 11 図)

調査区北側の I9 グリッドで検出した土坑で、SI005 を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長軸 0.72 m、短軸 0.58 m、検出面からの最大深度は 0.17 m を測る。埋土は、暗褐色土の単一層である。遺構内からは、土師器碗の底部片が出土している。

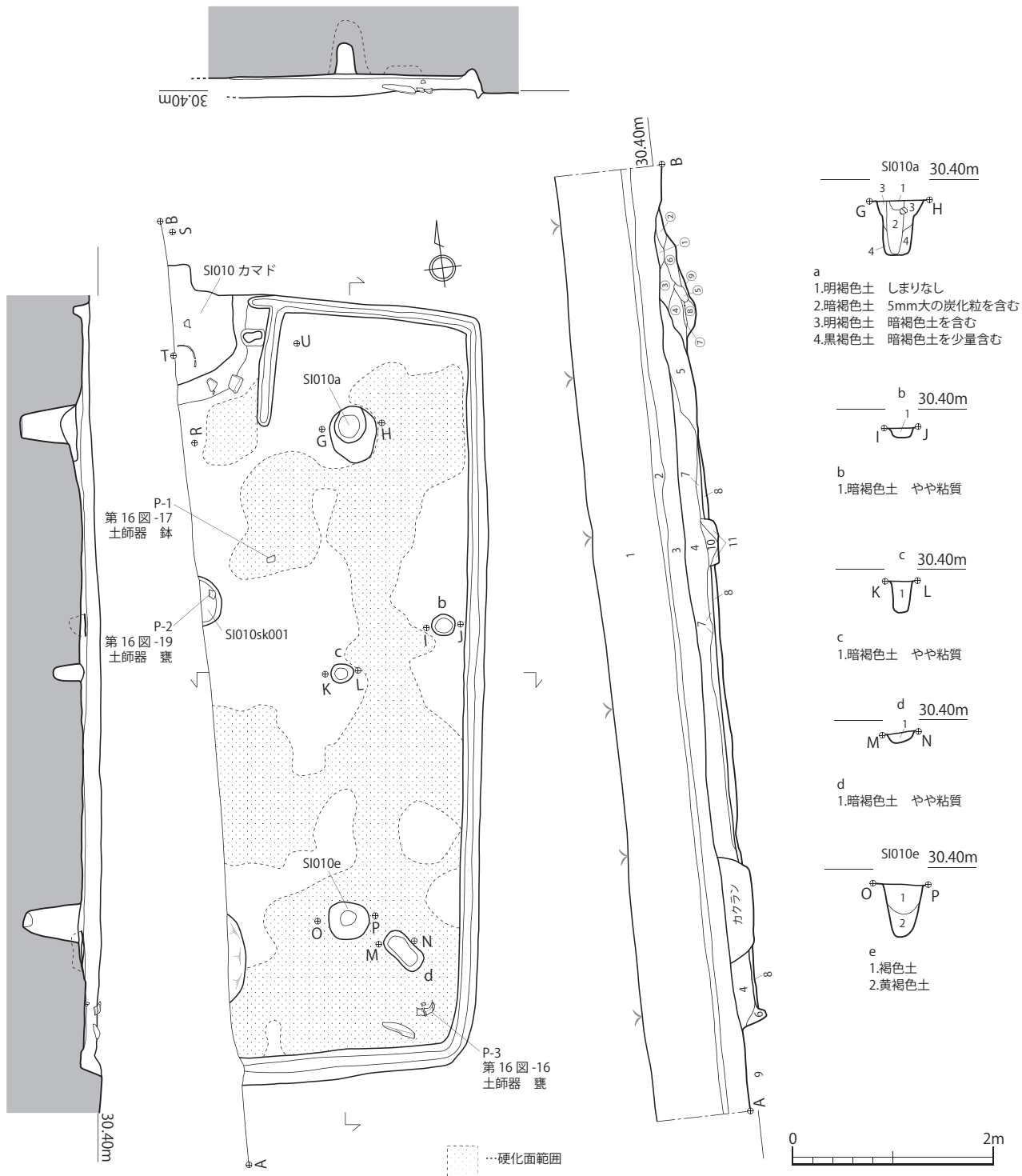
溝状遺構

SD015(第 15 図)

調査区北側の H3 ～ 10 ・ I2 ～ 6 のグリッドを東西方向に走る溝状遺構で、東西両端ともに調査区外に延びる。溝の規模は長さ 34.2+ α m、幅は 2.4 ～ 3.5 m 前後、検出面からの最大深度は 0.70 m を測り、溝の主軸方向は N - 85° - W である。断面形状は、U 字形を呈す。トレンチ③・④・⑤の土層堆積状況から、第 1 層は粘性が強く、水が滞留していたと考えられる。断面形状や土層の堆積状況からは用途を判別することはできなかった。溝内から出土した遺物は微少であるが、トレンチ②の南側の検出面で確認した近世の土師質土器の大甕、肥前産陶器碗の破片などが出土しており、19 世紀以降に埋没したと考えられる。

SD025 ・ SD035(第 14 図)

調査区北側の G1 ～ 3 ・ H1 ～ 3 のグリッドで検出した東西方向に延びる溝状遺構である。切り合い関係は SD025 が SD035 を切る。溝の規模は長さ 7.5+ α m、幅は 3.1 m 前後、検出面からの最大深度は 0.45 m を測り、溝の主軸方向は N - 81° - W である。断面形状は、逆台形を呈す。土層堆積状況は、第 6 層の暗黄褐色土 (SD035) を切り、こぶし大の礫を含む褐色土が堆積している。流水の痕跡は確認できない。遺構内からは瓦質土器の火鉢、

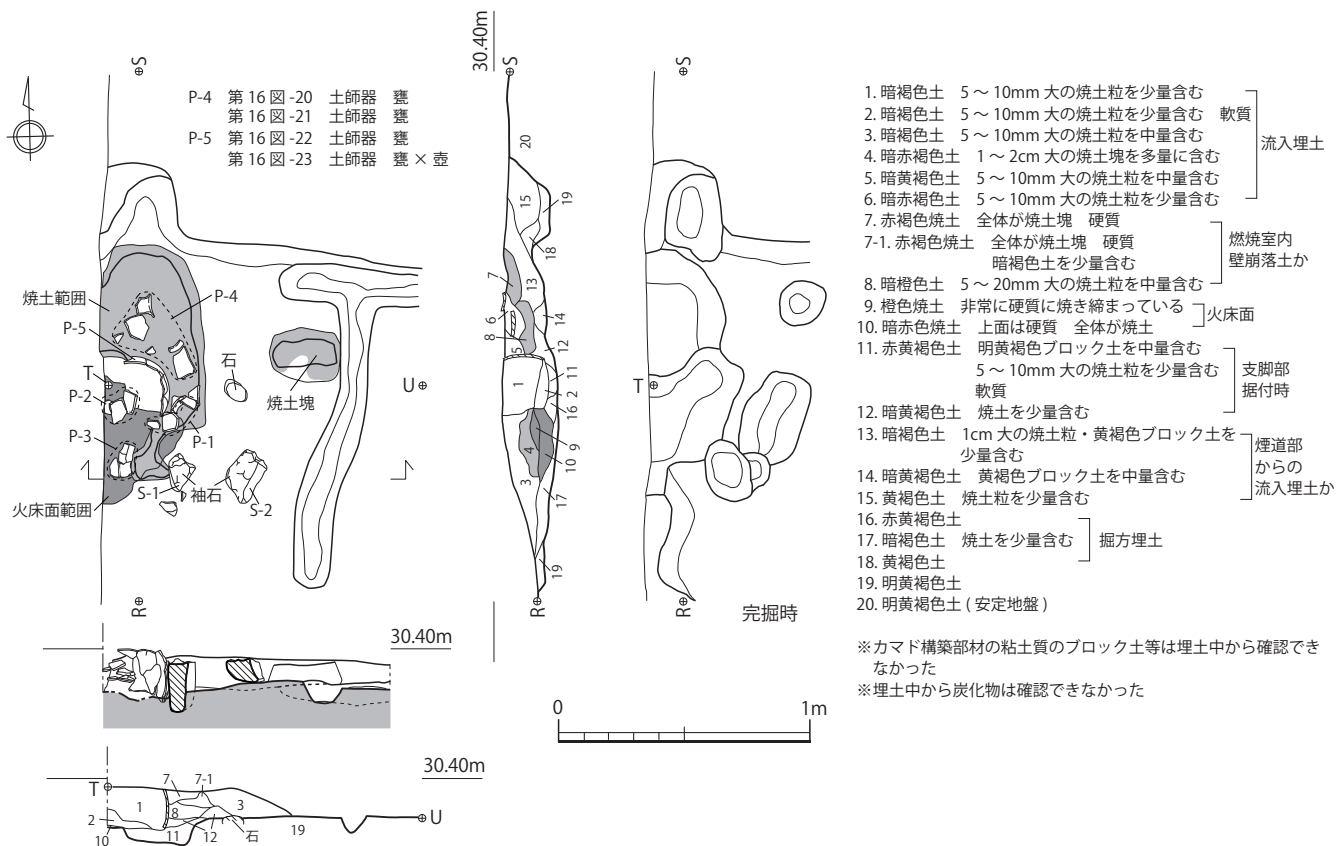


- SI010
- | | | |
|---------|---------------------|--------------------|
| 1.造成土 | | |
| 2.褐色土 | 粘質 | しまりが強い |
| 3.明褐色土 | 5mm大の赤褐色粒・炭化物を微量に含む | やや砂質 |
| 4.暗褐色土 | 1～2cm大の赤褐色粒を含む | ややしまりが強い |
| 5.暗褐色土 | 0.5～2cm大の焼土粒をやや多く含む | |
| 6.褐色土 | 1～3mm大の黄色粒を微量に含む | |
| 7.明黄褐色土 | 粘質 | しまりが強い 暗褐色土を含む(貼床) |
| 8.明黄褐色土 | (堀方埋土) | |
| 9.明黄褐色土 | (安定地盤) | |

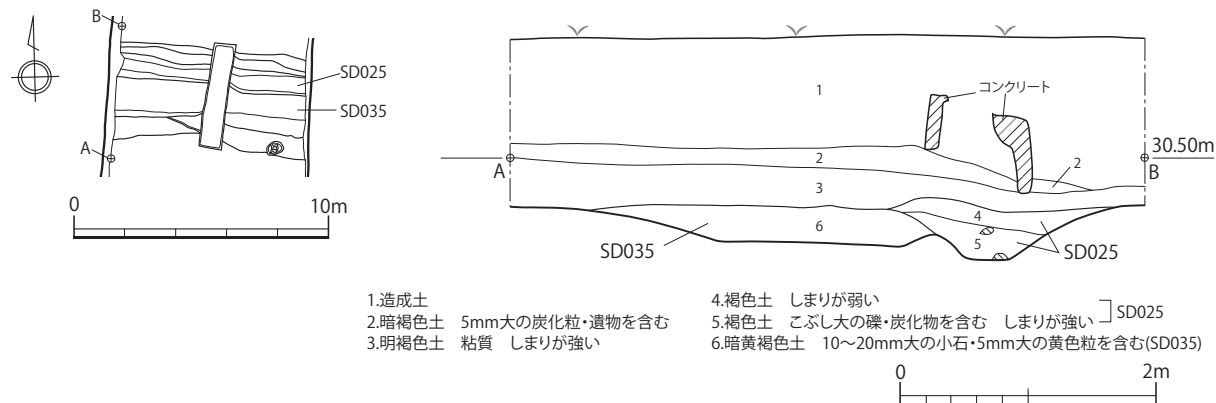
- SI010sk001
10.褐色土 しまりがやや弱い
11.明黄褐色土 炭化物を微量に含む 粘質

- 51010カマド
- ①.暗褐色土 1～5mm大の焼土粒を微量に含む
 - ②.暗黄褐色土 1～5cm大の焼土ブロック土を少量含む
 - ③.暗黄褐色土 1～2cm大の焼土ブロック土を微量に含む
 - ④.暗褐色土 0.5～2cm大の焼土ブロック土をやや多く含む
 - ⑤.暗赤褐色土 しまりがやや弱く焼土を多量に含む 支脚部の土層
 - ⑥.暗黄褐色土 全体の半分近くが橙色焼土 しまりがやや弱い
 - ⑦.橙色焼土 非常に硬くしまり素焼土器ごらの硬さ(火床面)
 - ⑧.暗褐色土 しまりがやや強く焼土を多量に含む 下面に向かうほど暗みに変わる
 - ⑨.暗黄褐色土 暗褐色土・焼土を少量含む しまりが弱い

第 12 図 SI010 遺構実測図 (1/60)



第 13 図 SI010 カマド遺構実測図 (1/30)



第 14 図 SD025・SD035 遺構実測図 (1/300・1/60)

国産陶器の碗などが出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。

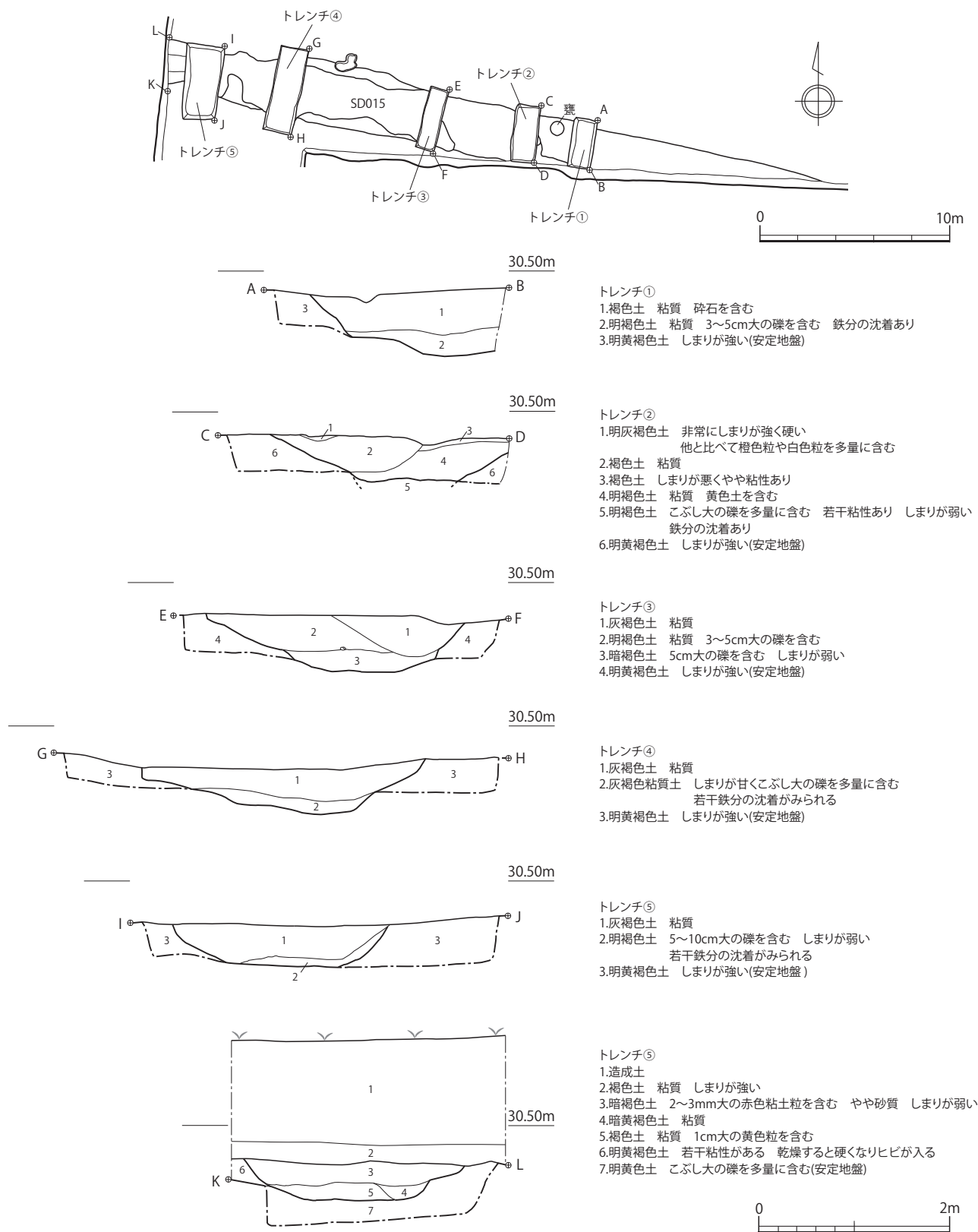
SD025 に切られている SD035 は、第 144 次調査地点で確認した方形館を形成する溝状遺構の推定北側ラインにあたる。SD035 は東西方向に走る溝 (第 144 次調査地点 SD005) と平行に検出されており、16 世紀後半の半町規模の館跡の溝の一部である可能性が考えられる。

4. 小結

今回の調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡 1 棟、古墳時代後期のカマドをもつ竪穴建物跡 1 棟、近世の溝状遺構 1 条、19 世紀以降の溝状遺構 1 条、時期不明の掘立柱建物跡 2 棟が確認されている。

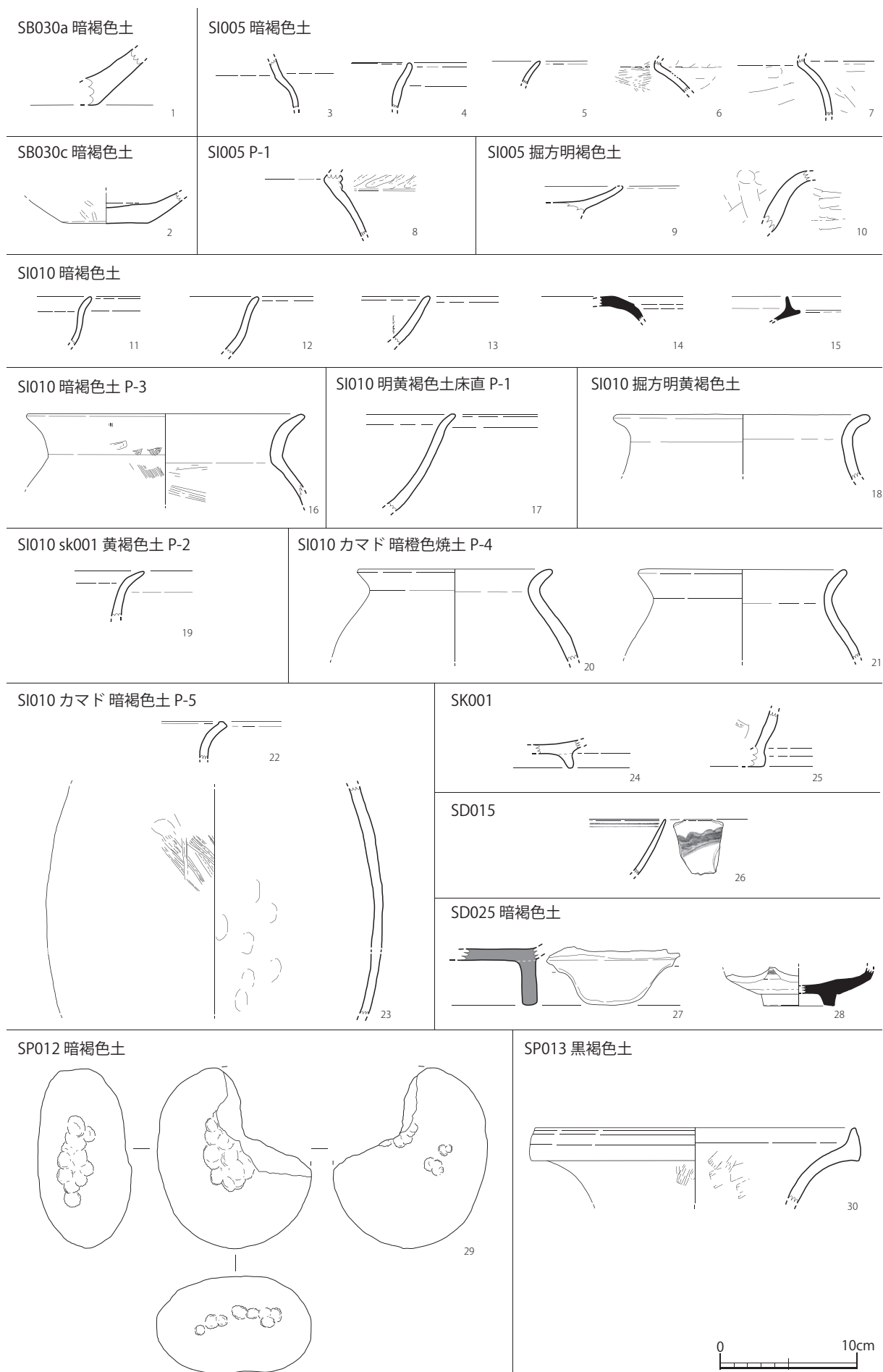
古墳時代は、調査区北側に隣接する第 145 次調査地点において古墳時代前期の竪穴建物跡 2 棟、中期の竪穴建物跡 1 棟、6 世紀後半～7 世紀後半の竪穴建物跡 5 棟が検出されている。また、調査区の南側に隣接する第 144 次調査地点においても古墳時代初頭の竪穴建物跡 1 棟を検出しており、当該地では古墳時代前期から後期までの長期間にわたり集落が形成されたことを改めて確認した。

また東西方向に延びる溝状遺構 SD035 については、調査区南側に隣接する第 144 次調査地点で確認した半町規模の方形館跡が想定される範囲に位置する。第 144 次調査地点では、東西方向に延びる溝状遺構 SD005、南



第 15 図 SD015 遺構実測図 (1/300・1/60)

北方向に延びる溝状遺構SD050が確認でき、京都系土師器皿Cや景德鎮窯系青花碗E群などが出土することから、16世紀後半頃に埋没したと考えられる。遺構の規模、土層埋土観察の状況からSD005とSD050は同一の溝状遺構でL字状に曲がる。今回検出されたSD035は方形館の北側区画が想定される地点に位置し、第144次調査地点SD005と平行であることから、半町規模の方形館を構成する溝の一部であることが想定される。



第 16 図 第 154 次調査区出土遺物実測図 (1/4)

(2) 横尾遺跡第 155 次調査

1. 調査概要

調査地は大分市大字横尾字寺ノ下に所在し、横尾遺跡の西側に位置する。調査期間は、平成 27 年 11 月 16 日から平成 27 年 12 月 28 日に実施したもので、調査面積は 279.5 m²である。

調査の結果、調査区全体から古代の粘土採掘坑と考えられる土坑、15 世紀代の性格不明土坑、10 世紀以降に比定される掘立柱建物跡を確認した。これまでの調査から調査区北側に位置する 10 ヲ所の調査地点において、古代の粘土採掘坑を 300 基以上検出し、14 世紀から 16 世紀代に比定される掘立柱建物跡群、近世の井戸跡や近世墓群が確認され、第 49 次調査地点では、近代に比定される酒造に関連する遺構が確認されている。

2. 基本層序

第 17 図は、調査区の土層模式図である。調査地点の現地表面は標高 33.57 m 前後を測る。現地表面から 0.7 m の深さで、水田層および旧耕作土、黒褐色土が堆積する。これらを除去すると黄色粘質土層が確認でき、その上面で遺構を検出した。遺構検出面の標高は、32.87 m 前後を測る。さらに深さ 0.2 m 掘り下げると、白色粘土層が 0.4 m の厚みで堆積している状況が確認できる。白色粘土層は横尾遺跡の中でも台地の西側、中位段丘崖縁に現状で南北約 200 m、東西約 130 m の範囲で帯状に広がっている。

3. 遺構

掘立柱建物跡

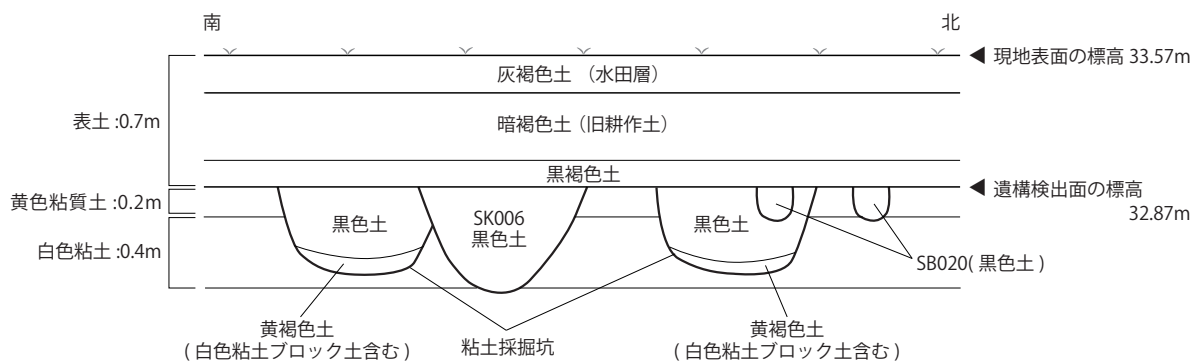
SB020(第 19 図)

調査区北側の K2・3 ～ L2・3 グリッドで検出した桁行 3 間、梁行 1 間、身舎面積 9.12 m²を測る掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、桁行の主軸方向は N - 5° - E である。柱穴は、径 0.32 ～ 0.55 m の隅丸方形もしくは円形を呈し、検出面からの深度は 0.1 ～ 0.35 m を測る。柱穴 c からは柱痕が確認できた。柱間は、桁行が 1.70 ～ 1.88 m、梁行が 1.68 m である。柱穴からは遺物は出土していないが、柱穴 SB020e は 9 ～ 10 世紀に比定される SK019 を切っていることから、建物の年代は 10 世紀以降に位置付けることができる。

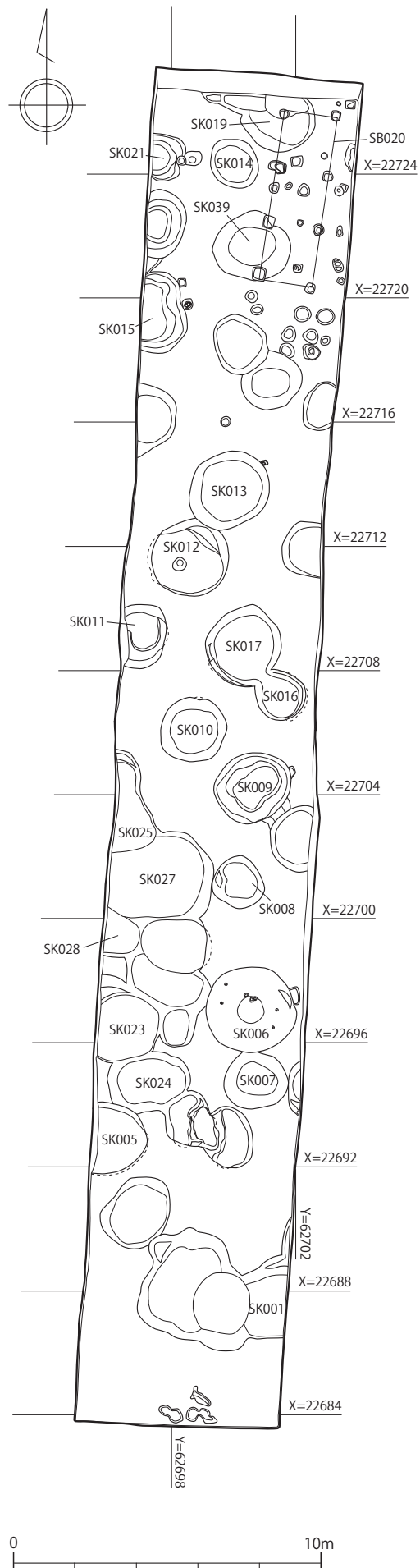
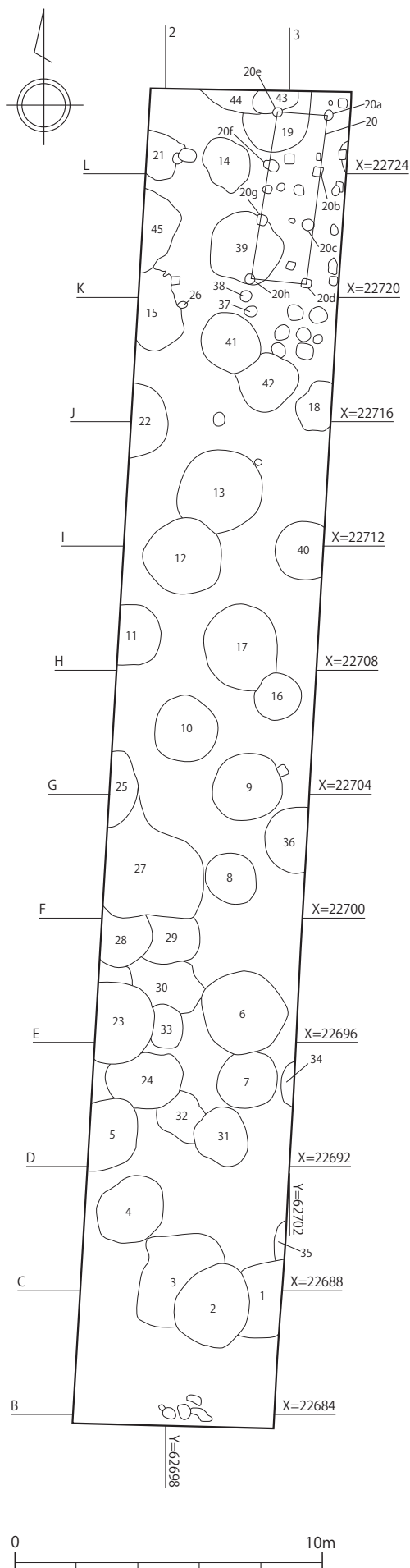
土坑

SK006(第 20 図)

調査区南側の E2 グリッドで検出した大型の土坑で、SK007 を切る。平面形状は円形を呈し、遺構の規模は長軸 3.12 m、短軸 2.75 m、検出面からの最大深度は 0.93 m を測る。断面形状は掘鉢状を呈し、東側の一部に 2 段のテラスを有する。底面からは杭跡と考えられる小穴が 7 基検出される。小穴の平面形状は円形を呈し、径 0.06



第 17 図 第 155 次調査区土層模式図



第 18 図 第 155 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)

～0.17 m、最大深度は0.15～0.2 mである。遺構埋土は黒色土を基調としており、第3層は粘性が非常に強い黒色土である。第2層の下面からは遺物や人頭大の円礫が散在した状況で出土しており、廃棄されたものと考えられる。遺構内からは、土師器坏Aや小皿A、土師質土器鉢、瓦質土器鉢または擂鉢の破片などが出土しており、遺構の埋没時期は15世紀代と考えられる。

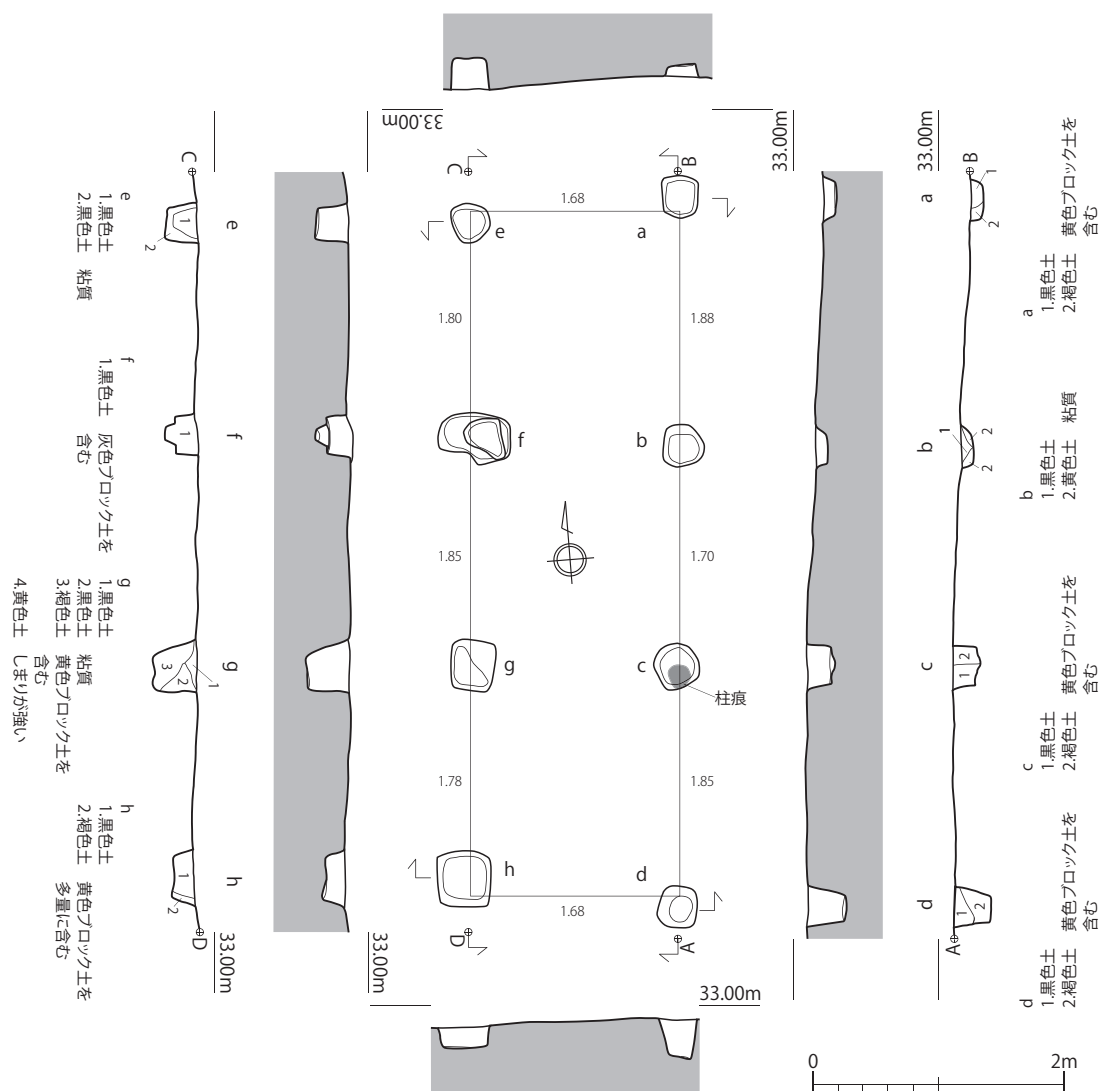
土壌のサンプル採取を行っており、分析結果は第IV章にて後述する。

SK007(第 20 図)

調査区南側の D2 グリッドで検出した土坑で、SK006 に切られる。平面形状は円形を呈し、遺構の規模は長軸 2.08 m、短軸 1.98 m、検出面からの最大深度は 0.42 m を測る。断面形状はやや丸みを帯びた逆台形を呈している。土層の観察から、第 3 層は黄色粘質ブロック土の混入が顕著であり、人為的に埋め戻したものと考えられる。第 1・2 層は黄色粘質ブロック土の混入が認められないことから、自然堆積により埋没したものと考えられる。遺物は出土していないが、SK006 との切り合い関係から 15 世紀以前の遺構であると考えられる。

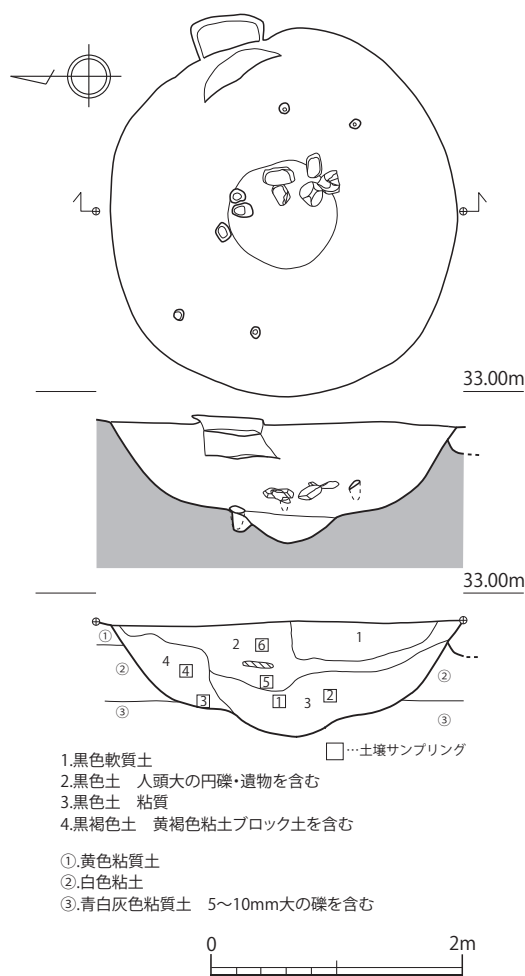
SK008(第 21 図)

調査区中央部の F2 グリッドで検出した小型の土坑である。平面形状はやや不整形な円形を呈し、遺構の規模は長軸 1.69 m、短軸 1.60 m、検出面からの最大深度は 0.54 m を測る。断面形状は舟底状を呈す。床面に凹凸の起伏が認められる。埋土は黒色土を基調とする軟質土である。下層の第 3 層は黄色粘質ブロック土や白色粘

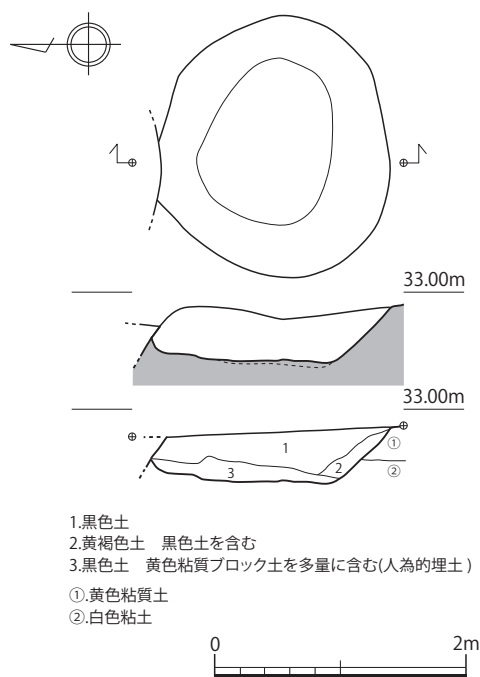


第 19 図 SB020 遺構実測図 (1/60)

SK006



SK007



第 20 図 SK006・SK007 遺構実測図 (1/60)

土ブロック土が混入する状態が認められ、人為的に埋め戻されたと考えられる。

SK009(第 21 図)

調査区中央部の F2 ～ G2 グリッドで検出した土坑で、SK008 の北側に位置している。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.46 m、短軸 2.2 m、検出面からの最大深度は 0.6 m を測る。断面形状は 2 段掘りになっており、遺構検出面から 0.44 m 地点で 1 段深く掘り込まれている。土層の観察から下層の第 3・4 層は黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土の混入が顕著であるため、人為的に埋め戻したものと考えられる。第 1・2 層については、自然堆積により埋没したものと考えられる。遺構内からは土師器の胴部片が出土したのみで、明確な遺構の時期は不明である。

SK010(第 21 図)

調査区中央部の G1 ～ G2 グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、遺構の規模は長軸 2.12 m、短軸 2.1 m、検出面からの最大深度は 0.56 m を測る。断面形状は逆台形状であるが、北側の壁面の一部がオーバーハングしている。土層の観察から第 4・5 層については、黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土が混入しており、人為的に埋め戻したものと考えられる。遺構内からは、10 世紀中頃に比定される土師器の坏片が出土している。

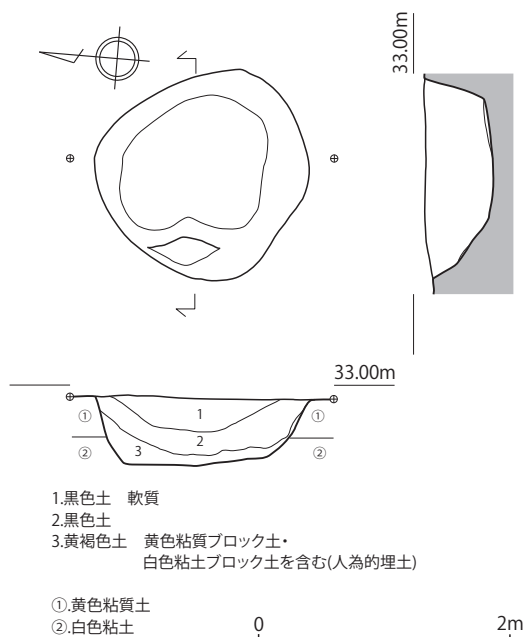
SK011(第 21 図)

調査区中央部の H1 グリッドで検出した土坑である。遺構の一部は調査区外に展開し、平面形状は円形を呈すると考えられる。遺構の規模は長軸 2.04 m、短軸 1.22+ α m、検出面からの最大深度は 0.59 m を測る。断面形状は 2 段掘りになっており、遺構検出面から 0.44 m 地点で 1 段深く掘り込まれ、東側壁面下部の一部がオーバーハングしている。土層の観察から下層の第 5 層は、黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土が多量に混入している状況が認められ、人為的に埋め戻されたと考えられる。

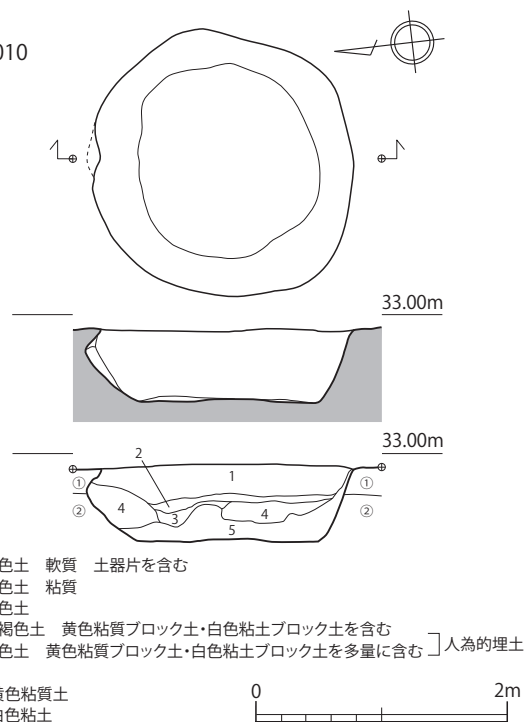
SK012(第 22 図)

調査区中央部の H1・2 ～ I1・2 グリッドで検出した大型土坑である。北側に隣接する SK013 を切っている。平面形状は円形を呈し、遺構の規模は長軸 2.55 m、短軸 2.38 m、検出面からの最大深度は 0.73 m を測る。断面形状は舟底状で、遺構の中央部が検出面から 0.54 m 地点で 1 段深く掘り込まれている。西側壁面下部の一部はオーバーハングしており、床面に凹凸の起伏が顕著に認められる。土層の観察から第 4 ～ 7 層は、黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土を含む混土層であり、人為的に埋め戻したものと考

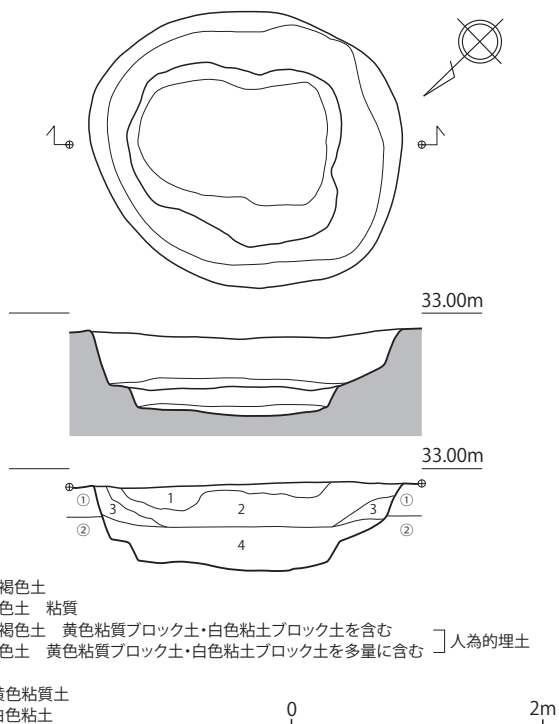
SK008



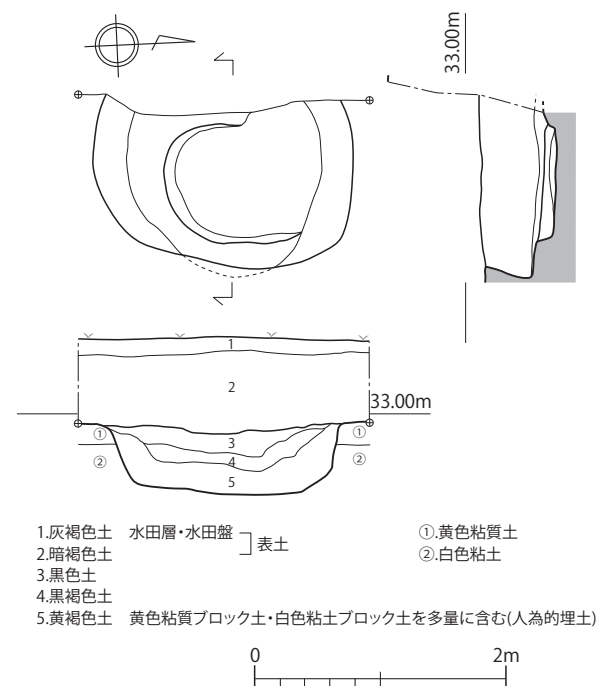
SK010



SK009



SK011

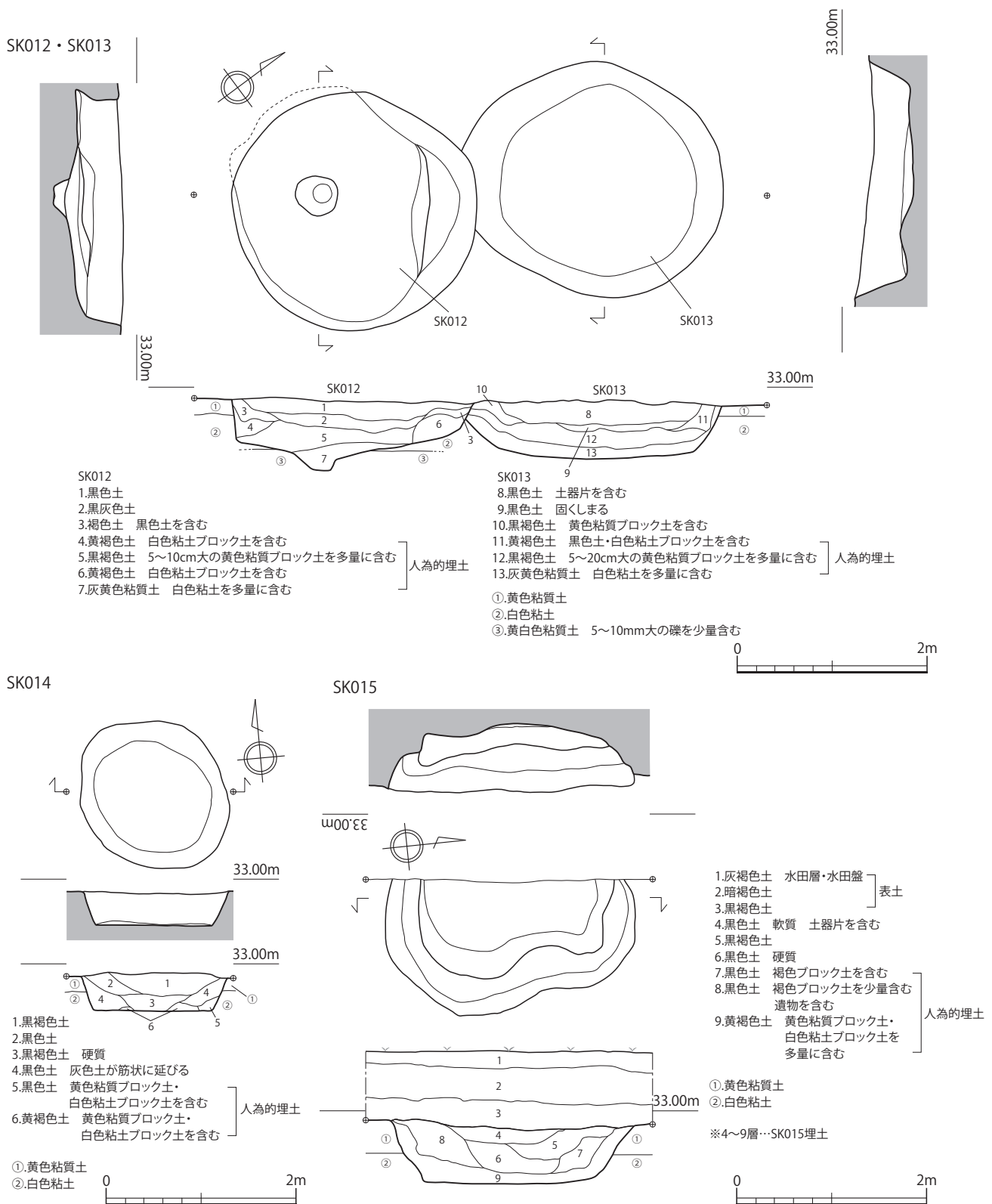


第 21 図 SK008・SK009・SK010・SK011 遺構実測図 (1/60)

られる。

SK013(第 22 図)

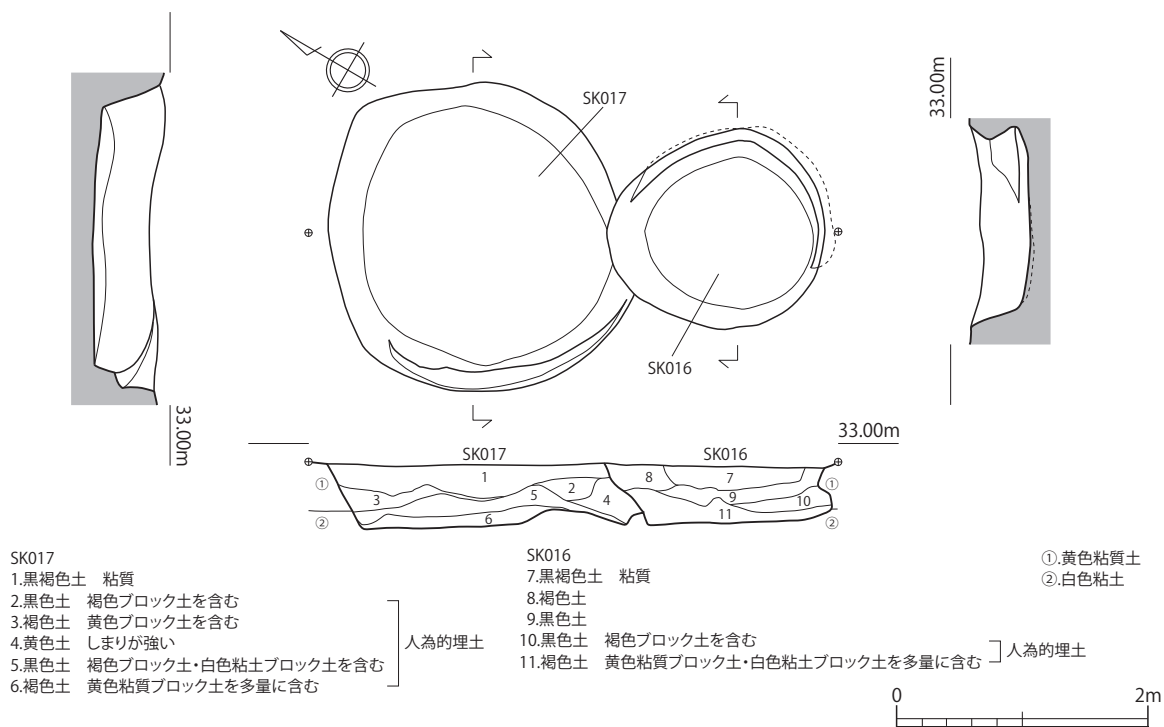
調査区中央部の I2 グリッドで検出した大型土坑である。切り合い関係は SK012 に切られている。平面形状は円形を呈し、遺構の規模は長軸 2.71 m、短軸 2.47 m、検出面からの最大深度は 0.5 m を測る。断面形状は逆台形状を呈す。床面に凹凸の起伏が認められ、土層の観察から第 11・13 層については、白色粘土ブロック土を多量に含み、第 12 層は黄色粘質ブロック土の混入が認められることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構内からは土師器の胴部片などが出土しているが、明確な時期は不明である。



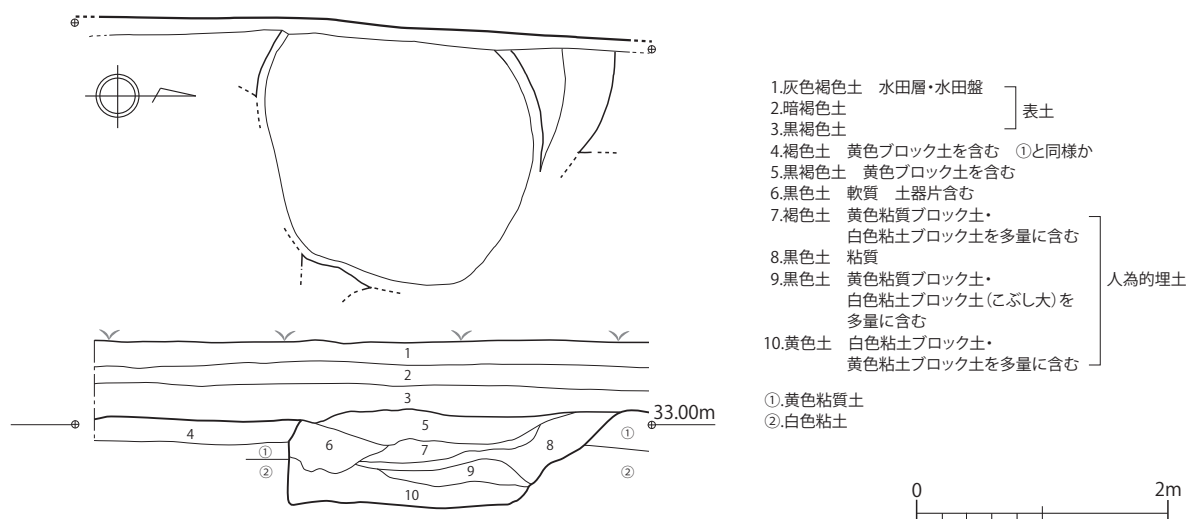
第22図 SK012・SK013・SK014・SK015 遺構実測図 (1/60)

SK014(第22図)

調査区北側のK2～L2グリッドで検出した小型の土坑である。平面形状は円形を呈している。遺構の規模は長軸1.55m、短軸1.54m、検出面からの最大深度は0.34mを測る。断面形状は逆台形状になっている。土層の観察から、下層の第5・6層は黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土を含む混土層であるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。第1～4層は黒色土を基調とし、黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土を含まないため、自然堆積したものと考えられる。遺構内から遺物は出土していない。



第 23 図 SK016・SK017 遺構実測図 (1/60)



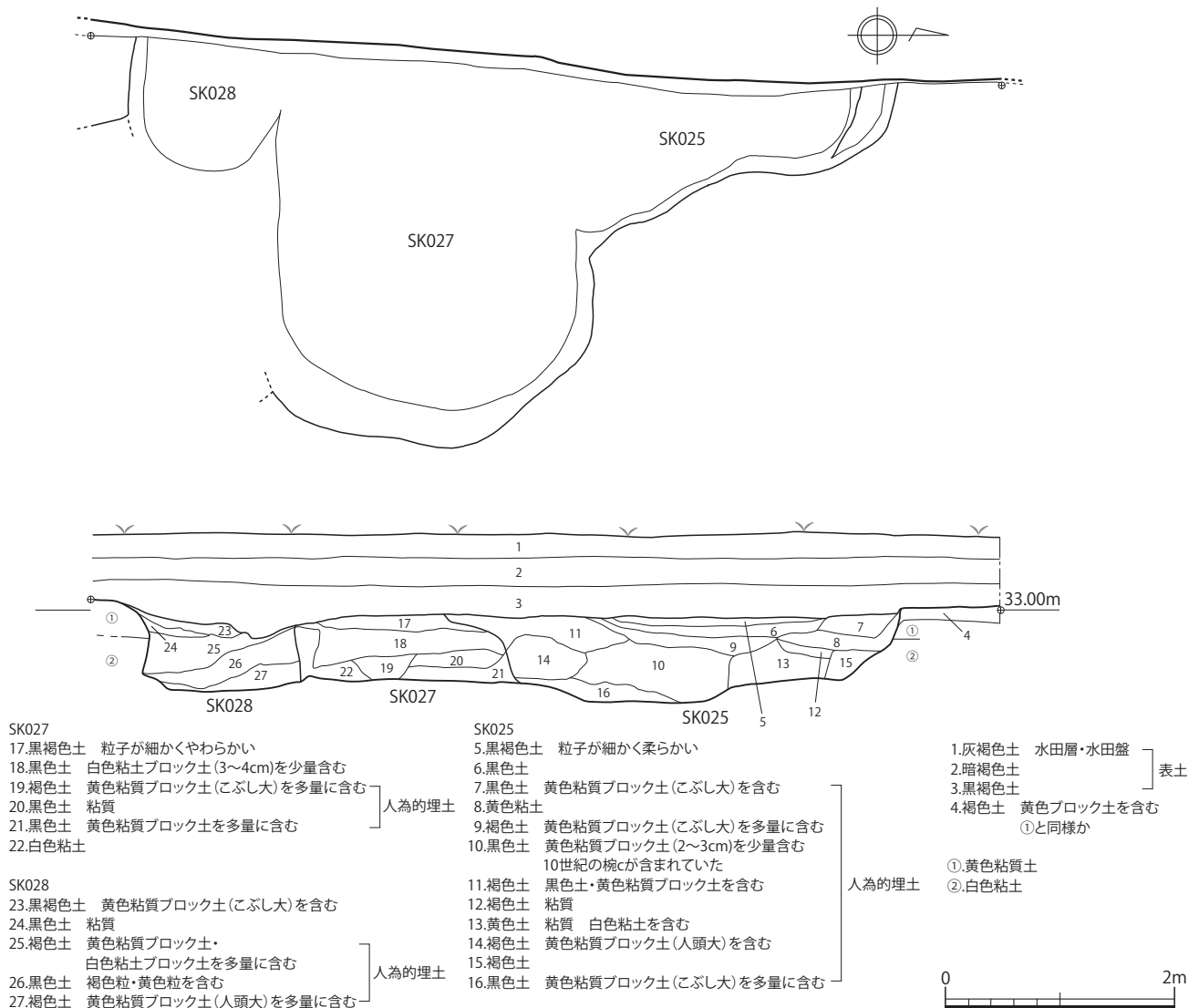
第 24 図 SK023 遺構実測図 (1/60)

SK015(第 22 図)

調査区の北側の J1・2 ～ K1・2 グリッドで検出した土坑である。遺構の一部は調査区外に展開しており、平面形状はやや不整円形を呈すると考えられる。遺構の規模は長軸 2.62 m、短軸 1.37+α m、検出面からの最大深度は 0.66 m を測る。断面形状は逆台形状を呈し、床面に凹凸の起伏が認められる。土層の観察から、上層の第 1 ～ 3 層は表土、第 4 ～ 6 層は黒色土を基調とした自然堆積、下層の第 7・8 層は褐色ブロック土、第 9 層は黄色粘質ブロック土や白色粘土ブロック土の混入が顕著であるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺構内からは、土師器杯 a が出土しており、時期は 10 世紀前半頃と考えられる。

SK016(第 23 図)

調査区中央部の G2 グリッドで検出した土坑で、SK017 を切っている。平面形状は、不整楕円形を呈し、長軸 1.75 m、短軸 1.6 m、検出面からの最大深度は 0.45 m を測る。断面形状は、やや丸みを帯びた逆台形状である。東側にテラスを 1 段有しており、東側壁面の一部がオーバーハングしている。土層の観察状況から下層の第 10・11 層は、褐色ブロック土や白色粘土ブロック土、黄色粘土ブロック土を含むため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第 25 図 SK025・SK027・SK028 遺構実測図 (1/60)

SK017(第 23 図)

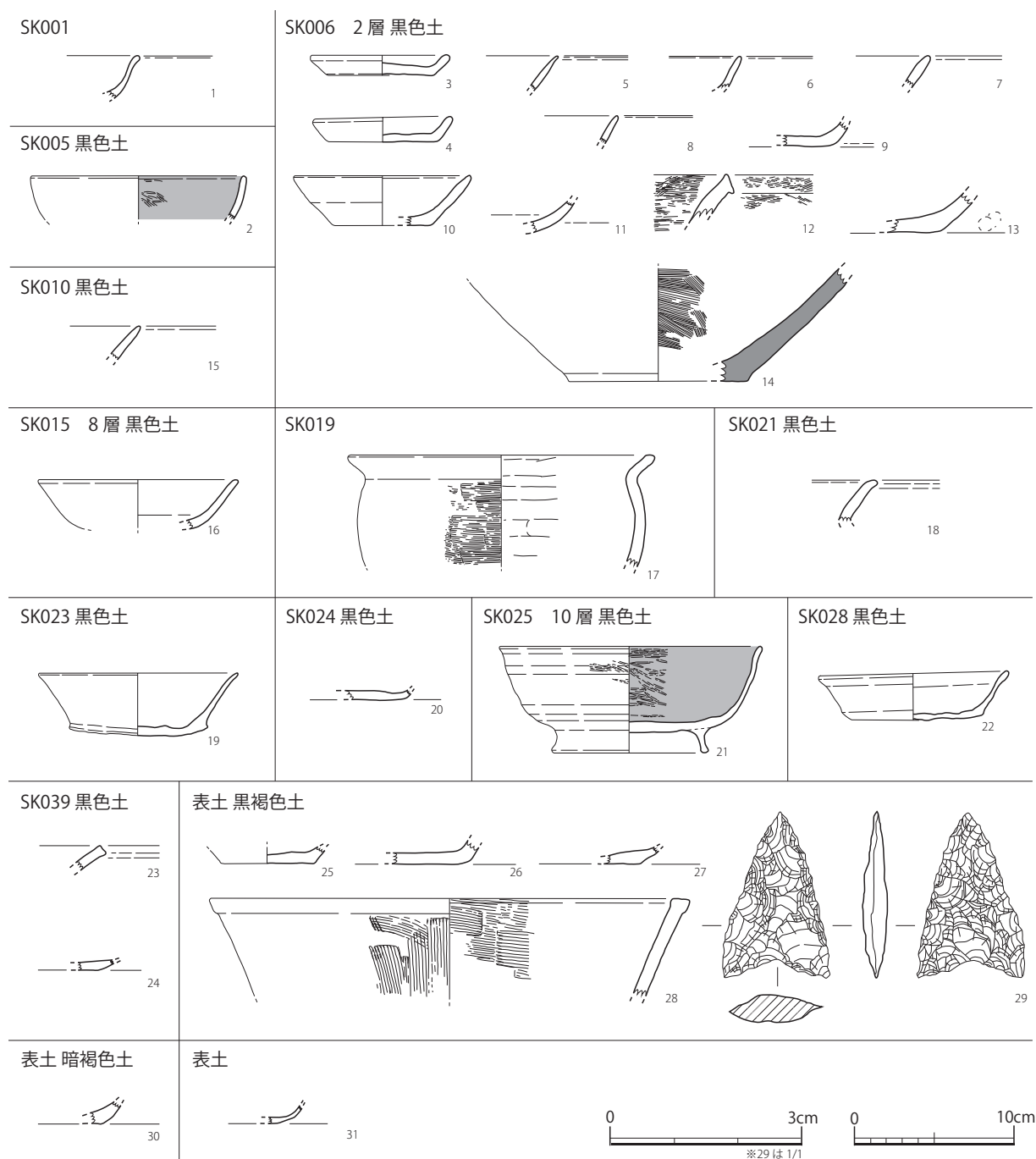
調査区中央部の H2 グリッドで検出した大型の土坑である。切り合い関係は、南側に隣接する SK016 に切られている。平面形状は大型の不整円形を呈し、長軸 2.45 m、短軸 2.4 m、検出面からの最大深度は 0.5 m を測る。断面形状は、逆台形状を呈し、床面の一部に凹凸の起伏が認められる。土層の観察状況から、第 2～6 層は、褐色ブロック土、黄色粘質ブロック土、白色粘土ブロック土が混入しており、粘土採掘後に人為的に埋め戻したと考えられる。第 1 層については、自然に堆積したものと考えられる。遺構内から遺物は出土していない。

SK023(第 24 図)

調査区南側の D1・E1 グリッドで検出した土坑で SK024 を切っている。西側の一部が調査区外に展開しており、平面形状は楕円形と考えられる。遺構の規模は長軸 $2.25 + \alpha$ m、短軸 $1.9 + \alpha$ m、検出面からの最大深度は 0.75 m を測る。断面形状は逆台形状を呈している。埋土は、黒色土を基調としている。土層の観察から第 7～10 層は、黄色粘質ブロック土・白色粘土ブロック土が多量に混入しており、人為的に埋め戻したものと考えられる。遺構内からは、9 世紀中頃～後半に比定される土師器の坏 e が出土している。

SK025・027・028(第 25 図)

調査区南側の E1・2～G1 グリッドで検出された土坑群である。検出時の切り合い関係は不明であったが、土層の観察から切り合い関係が判明した。



第 26 図 第 155 次調査区出土遺物実測図 (1/1・1/4)

SK025 は切り合った土坑群の一番北側に位置し、南側の SK027 を切る。西側の一部が調査区外に展開し、平面形状は不整楕円形と考えられる。遺構の規模は長軸 $2.4+\alpha$ m、短軸 $1.3+\alpha$ m、検出面からの最大深度は 0.74 m を測る。断面形状は逆台形を呈している。床面に凹凸の起伏が顕著に認められる。埋土は、黑色土を基調としている。土層の観察から、第 7～16 層は黄色粘質ブロック土が多量に混入しているため粘土採掘後に人為的に埋め戻したものと考えられ、掘り返しの痕跡も認められる。第 5・6 層は黄色粘質ブロック土、白色粘土ブロック土の混入が認められないことから自然に埋没した可能性も考えられる。遺構の東側下位から黑色土器 A 類碗 c が伏せた状態で出土し、遺構の時期は 10 世紀中頃から後半に比定される。

SK027 は第 155 次調査区の中で最大規模の土坑であり、SK025 に切られる。西側の一部が調査区外に展開し、平面形状は楕円形を呈すると考えられる。遺構の規模は長軸 $3.35+\alpha$ m、短軸 $2.8+\alpha$ m、検出面からの最大深

度は 0.55 m を測る。断面形状は逆台形を呈している。埋土は、黒色土を基調としている。土層の観察から第 19 ～ 21 層については、黄色粘質ブロック土が多量に混入しており、人為的に埋め戻したものと考えられる。遺構内からは、遺物は出土していないが、10 世紀前半から中頃に比定される SK025 に切られている状況から、遺構の時期は 10 世紀前半以前と考えられる。

SK028 は西側の一部が調査区外に展開し、SK027 に切られている。平面形状は楕円形を呈するものと考えられる。遺構の規模は長軸 $1.4 + \alpha$ m、短軸 $1.1 + \alpha$ m、検出面からの最大深度は 0.6 m を測る。断面形状は台形を呈する。埋土は、黒色土を基調としている。土層の観察から第 25 ～ 27 層は、白色粘土ブロック土が多量に混入しており人為的に埋め戻したものと考えられる。遺構内からは、9 世紀中頃～後半に比定される土師器坏 a が出土している。

4. 小結

今回の調査で注目される成果は、調査区全体から検出された土坑 41 基である。土坑の平面形状は、円形・楕円形などを呈す。規模は平面径 1.70 m ～ 2.76 m、深度は 0.32 m ～ 0.74 m を測り、大きさはさまざまである。断面形状は舟底形や逆台形を呈し、床面や壁面に凹凸の起伏が認められるものが多い。土坑内から出土する遺物の量が少ないため、遺構の時期が判別できるものは少ない。SK023・SK028 から 9 世紀中頃～後半の土師器坏 a、SK010・SK015 から 10 世紀代の土師器坏、SK025 から 10 世紀中頃の黒色土器 A 類碗 c が出土している。土坑群の特徴として白色粘土層を掘り込んでおり、遺構の断面形状では床面や壁面に凹凸の起伏が認められるものが多いことから、今回確認した土坑群は、古代の粘土採掘坑であると考えられる。出土遺物から時期差は認められるが、この地で継続して粘土採掘がおこなわれたものと考えられる。

(3) 横尾遺跡第 156 次調査

1. 調査概要

調査地は、大分市大字横尾字芝原に位置する。周辺地域は多武尾遺跡第 1～3 次調査地点があり、これまでの調査成果から本調査地点は弥生時代後期段階の環濠集落内に位置していることがわかっている。調査面積は、196.3 m²を測る。遺跡は台地の平坦地上に立地し、遺構検出面の標高は 30.80 m 前後である。発掘調査は、平成 28 年 9 月 23 日～同年 10 月 31 日の期間に実施している。西側には平成 10 年度に調査した第 70 次調査地点が隣接している。

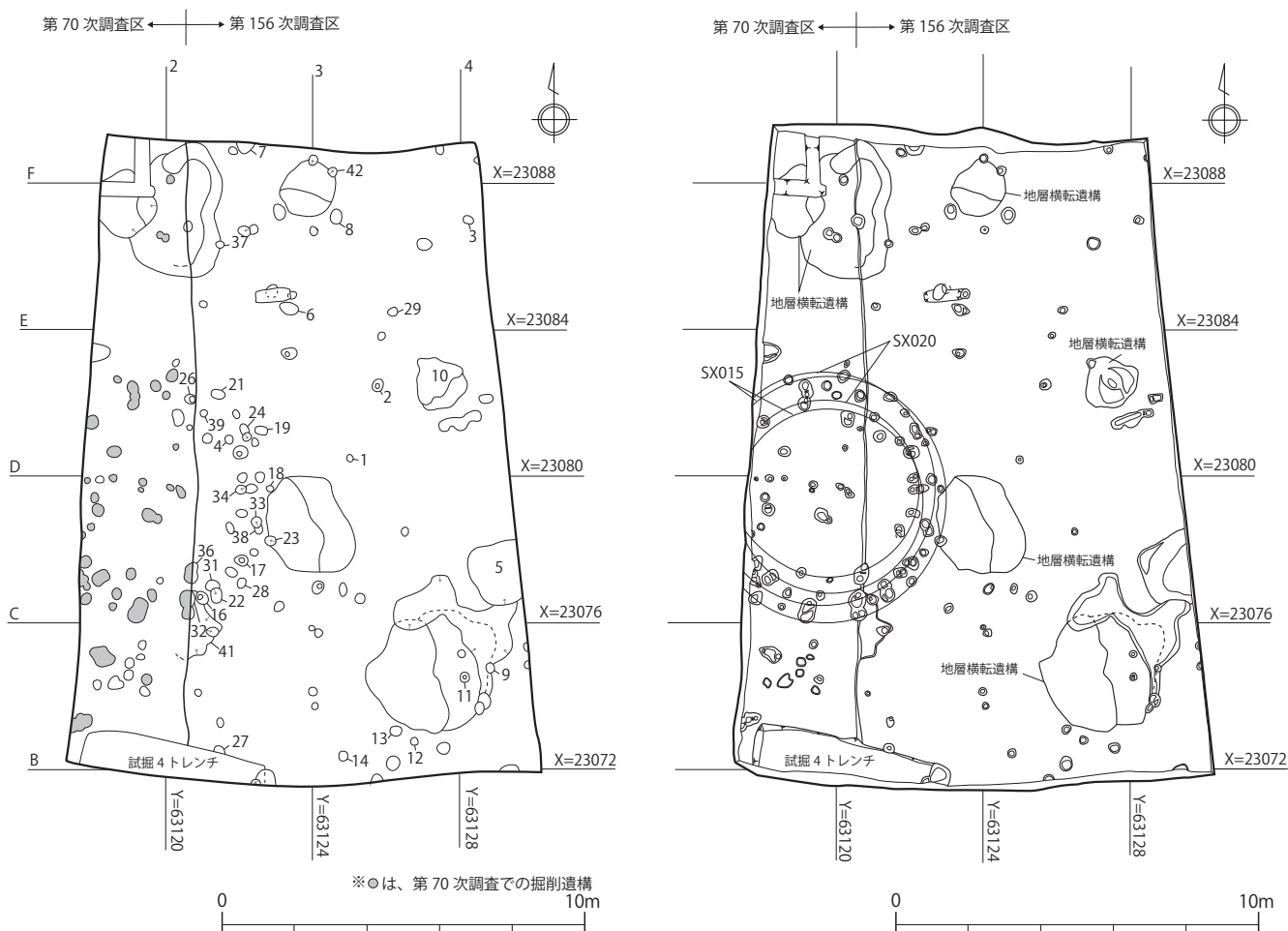
調査の結果、弥生時代後期段階と考えられる円形竪穴建物跡と弥生時代以前の地層横転遺構、時期不明の土坑を確認した。基本層序は、明灰褐色粘質土の水田層を除去すると遺構が検出できる。

2. 遺構

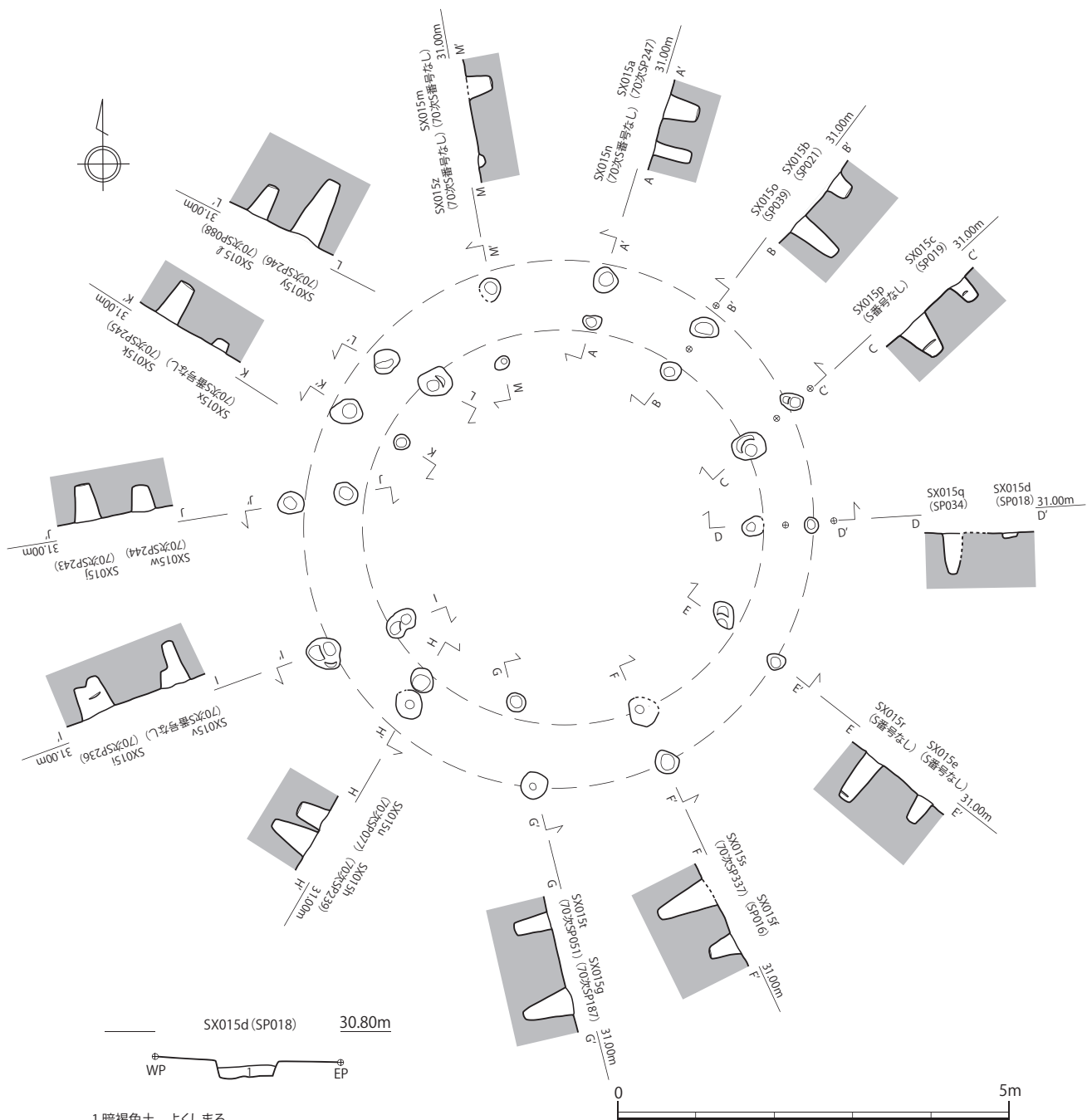
円形竪穴建物跡

SX015 (第 28 図)

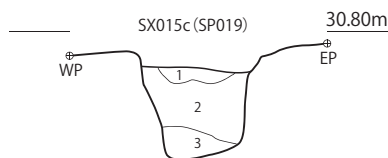
本調査地点と第 70 次調査地点の境界部分で検出した、2 棟の円形竪穴建物跡と想定される柱穴列の 1 つである。建物にともなう柱穴は計 26 基を確認している。柱穴の配列は、外周と内周の 2 重の円周上に配置されており、外周部の柱穴と内周部の柱穴は、それぞれ円形竪穴建物跡の中心部に向かって、ほぼ一直線上に一对となって並んで配置している状況が認められる。



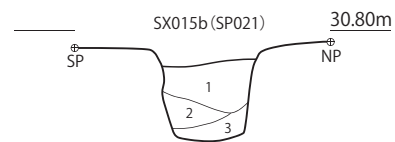
第 27 図 第 156 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)



1.暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色ブロック土(Φ5~30mm大)を含む



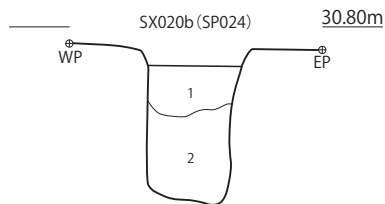
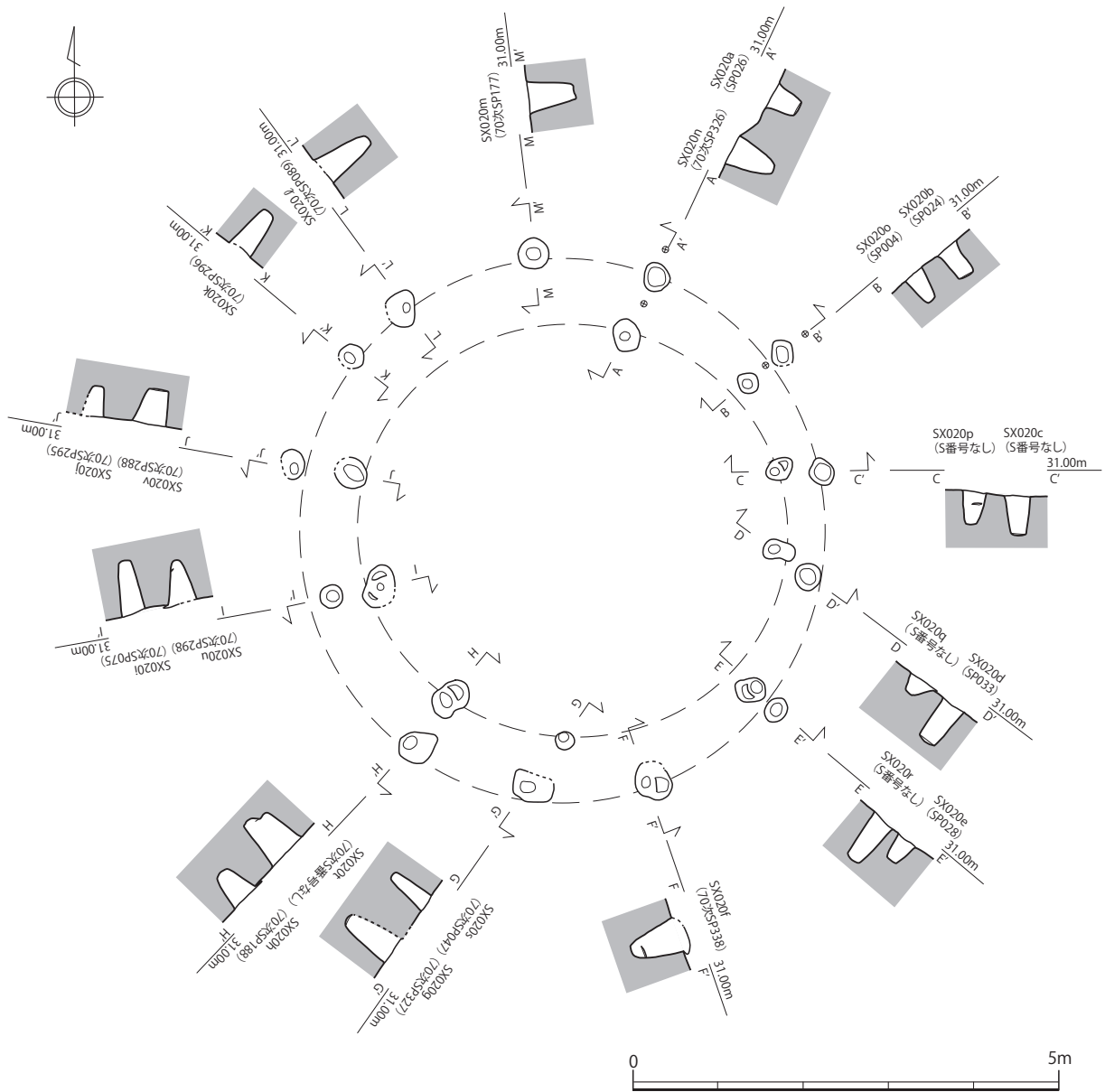
1.暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色土粒(Φ3~10mm大)を少量含む
2.暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色ブロック土(Φ5~10mm大)を多量に含む
3.黒褐色粘質土 よくしまる



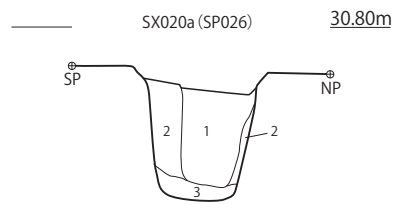
1.暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色土粒(Φ3~10mm大)を少量含む
2.暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色土粒(Φ3~10mm大)を多量に含む
3.黒褐色粘質土 よくしまる



第 28 図 SX015 遺構実測図 (1/80・1/20)



1. 暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色ブロック土 (Φ5~30mm大) を少量含む
2. 暗褐色土 よくしまる



1. 暗灰褐色土 しまる
にぶい褐色土粒 (Φ3~10mm大) を少量含む
2. 暗褐色土 よくしまる
にぶい褐色ブロック土 (Φ5~30mm大) を多量に含む
3. 黒褐色粘質土 よくしまる
にぶい褐色ブロック土 (Φ5~30mm大) を少量含む
- SX020aの
柱痕抜き取り痕
SX020aの埋土



第 29 図 SX020 遺構実測図 (1/80・1/20)

SX015 と SX020 の円形竪穴建物跡の柱穴は切り合い関係が認められ、第 70 次調査地点で SX015 の柱穴が SX020 の柱穴を切っている状況を 6 ヲ所確認した。柱穴の平面形状は不整楕円形や楕円形を呈し、径は 0.18 ～ 0.48 m、検出面からの深度は 0.07 m ～ 0.84 m を測る。第 156 次調査地点では、遺構検出時に柱穴 f(156 次 SP016) と柱穴 p(156 次 S 番号なし) から柱痕を確認している。また第 70 次調査地点では、遺構検出時に柱穴 a(70 次 SP247)、柱穴 g(70 次 SP187)、柱穴 h(70 次 SP239)、柱穴 i(70 次 SP236)、柱穴 j(70 次 SP243)、柱穴 k(70 次 SP245)、柱穴 w(70 次 SP244) から柱痕・柱抜き取り痕を確認している。円形の外周部分の柱穴 a(70 次 SP247) と柱穴 g(70 次 SP187) の柱痕間は南北約 6.5 m、柱穴 d(156 次 SP018) の中心と柱穴 j(70 次 SP243) の柱痕間で東西約 6.7 m を測る。柱穴列の外周部分の面積は約 34 m² を測る。

遺構の時期は、各柱穴からの遺物の出土量が少なく、柱穴 o(156 次 SP039) から弥生土器甕の小破片が出土しているが、明確な時期については不明である。SX020 の柱穴 e(156 次 SP028) から弥生時代後期後葉段階の丹塗り長頸壺の胴部片が出土していることや、SX015 と SX020 の建物の配置状況から、SX020 の建物廃絶直後に SX015 が建てられた可能性が考えられ、弥生時代後期後葉段階と想定される。

SX020(第 29 図)

円形竪穴建物跡と想定される柱穴列で、建物にともなう柱穴は計 22 基を確認している。柱穴の配列は、外周と内周の二重の円周上に配置されており、各柱穴間の配置は、外周部の柱穴と内周部の柱穴が、それぞれ円形竪穴建物跡の中心部に向かって、ほぼ一直線上に一対となって並んで配置している状況が認められる。円形の外周部分の柱穴 a(156 次 SP026) の抜き取り痕と柱穴 g(70 次 SP327) の柱痕間は南北約 6.2 m、柱穴 d(156 次 SP033) と柱穴 j(70 次 SP295) の中心間で東西約 6.2 m を測る。柱穴列の外周部分の面積は約 30 m² を測り、SX015 の外周部分の面積と比較するとやや小型である。

柱穴の平面形状は不整楕円形や楕円形を呈し、径は 0.22 ～ 0.56m、検出面からの深度は 0.22 ～ 0.6 m を測る。第 156 次調査地点では、遺構検出時に柱穴 a(156 次 SP026) から柱抜き取り痕を確認している。また、第 70 次調査地点では、遺構検出時に柱穴 h(70 次 SP188)、柱穴 i(70 次 SP075)、柱穴 m(70 次 SP177) から柱痕・柱抜き取り痕を確認している。

各柱穴から出土している遺物の量は少なく、SX020 の柱穴 e(70 次 SP028) から弥生時代後期後葉段階の丹塗り長頸壺の胴部片が出土している。

3. 小 結

今回の調査では、弥生時代後期後葉段階と考えられる円形竪穴建物跡 2 棟を確認した。2 棟の円形竪穴建物跡は、同じ場所に重複して立地しており、建替えの可能性が考えられる。これまでの横尾遺跡における調査から、現状では円形竪穴建物は環濠内部で独立した配置が見られる。

横尾遺跡においては、本調査地点の北側に位置する横尾遺跡第 70・72・77・78・143-7 次調査地点や、東側に位置する多武尾遺跡第 2 次調査地点からは、弥生時代後期段階の竪穴建物跡 7 棟がまとまって分布している。一方、本調査地点から南方向約 60 m 離れた第 62 次調査地点からは、同時期の方形周溝遺構 1 基や木棺墓 4 基が確認されており、その周辺から同時期の竪穴建物跡などの生活遺構は確認されていない。横尾遺跡の環濠集落内における居住空間と墓域・祭祀空間の中間地に、特殊な構造をもつ円形竪穴建物跡 SX015・020 が立地している点も注目される。円形建物跡の類例としては、滋賀県守山市の国指定史跡の下之郷遺跡^(註 23) で確認された円形建物跡があげられる。環濠を 3 重に巡らした環濠集落内から、弥生時代中期後葉段階の柱を円周上に配置した壁立式建物と考えられる建物跡が 4 棟確認されている。両遺跡ともに環濠集落内から確認されている点は注目できる。

第IV章 自然科学分析

横尾遺跡第 155 次発掘調査におけるトイレ遺構分析 (遺構堆積土分析)

環境考古研究会

1. はじめに

遺構の堆積物の遺体群集や性状を調べることによって、堆積環境や周辺の植生、利用植物、堆積物の生成の由来などが推定復原できる。便所遺構等では、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示し、その遺体群集から食べた食物を直接的に探ることができる。ここでは横尾遺跡の土坑から採取された堆積物において寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定、珪藻分析をおこない、検討を加える。

2. 試料

分析試料は、トイレ遺構と考えられる土坑 SK006 より採取された第 2 層 (サンプルNo.5)、第 3 層 (サンプルNo.1)、第 4 層 (サンプルNo.4) の 3 点である。

3. 寄生虫卵分析

(1) 原理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、便所遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができる。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探することもできる。現状では近年研究されはじめた研究であり分析例も少ない。

(2) 方法

微化石分析法を基本に以下のようにおこなう。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25%フッ化水素酸を加え 30 分静置 (2・3 度混和)
- 5) 水洗後サンプルを 2 つにわけ
- 6) サンプルの一方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍でおこなう

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2 分間の遠心分離をおこなった後、上澄みを捨てるといふ操作を 3 回繰り返しておこなう。

(3) 結果

土坑 SK006 の第 2 層 (サンプルNo.5)、第 3 層 (サンプルNo.1)、第 4 層 (サンプルNo.4) のいずれの試料からも寄生虫卵およびあきらかな消化残渣は検出されなかった。

4. 花粉分析

(1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査



においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

アセトリシス処理を施したサンプルの沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製、検鏡・計数をおこなう。

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍でおこなう。花粉の同定は、島倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比でおこなう。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示す。イネ属については、中村 (1974, 1977) を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

(3) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 20、樹木・草本花粉 4 点、草本花粉 21、シダ植物孢子 2 形態の計 47 である。これらの学名と和名および粒数を第 1 表に示し、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 1 図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、シキミ属、ブドウ属、グミ属、イスノキ属

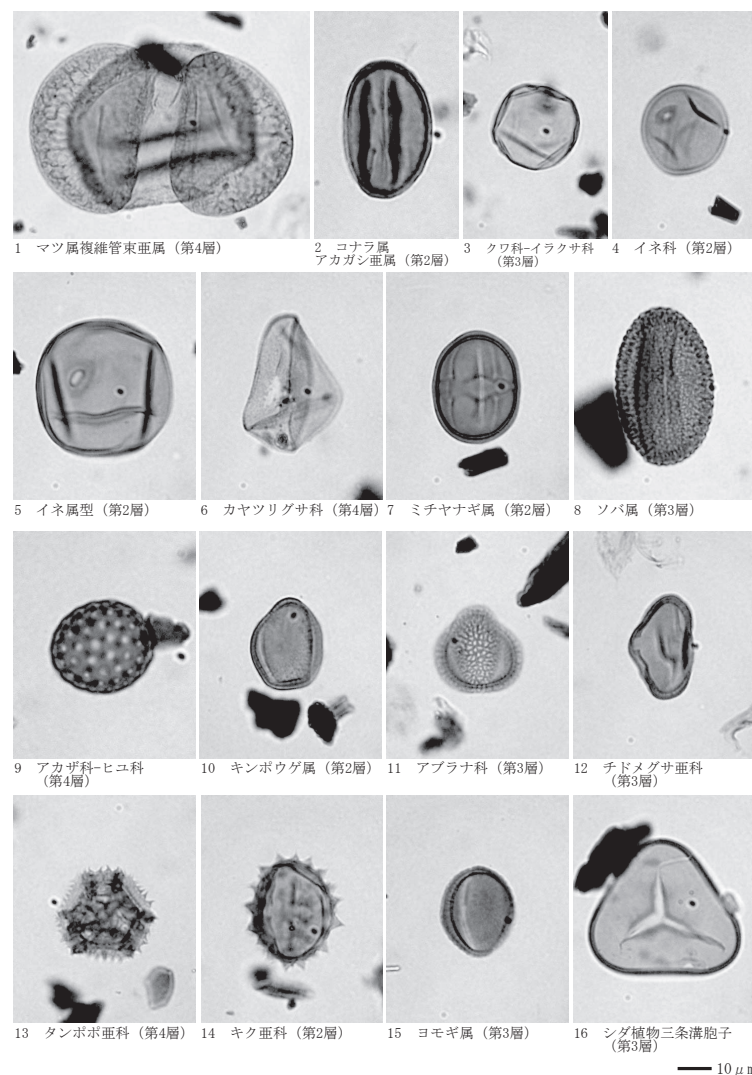
〔樹木・草本花粉〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、タデ科ミチヤナギ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

横尾遺跡第 155 次発掘調査 (SK006) の花粉・孢子



〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。(第1図)

下位の第4層(サンプルNo.4)では、樹木花粉が14%、草本花粉が81%を占める。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属の出現率が高く、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、キク亜科がともなわれる。樹木花粉では、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属がやや多く、コナラ属コナラ亜属、スギが低率に出現する。

第3層(サンプルNo.1)では、樹木花粉が19%、草本花粉が73%を占める。草本花粉では、下位の4層と比較すると、イネ科にはイネ属型がともなわれるようになり、ソバ属が出現する。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が増加し、マツ属複雑管束亜属、クリが微増する。樹木・草本花粉のクワ科ーイラクサ科の出現率がやや高くなる。

第2層(サンプルNo.5)では、樹木花粉が11%、草本花粉が82%を占めるようになる。第3層(サンプルNo.1)と大きな変化は認められないが、イネ科(イネ属型を含む)が増加する。

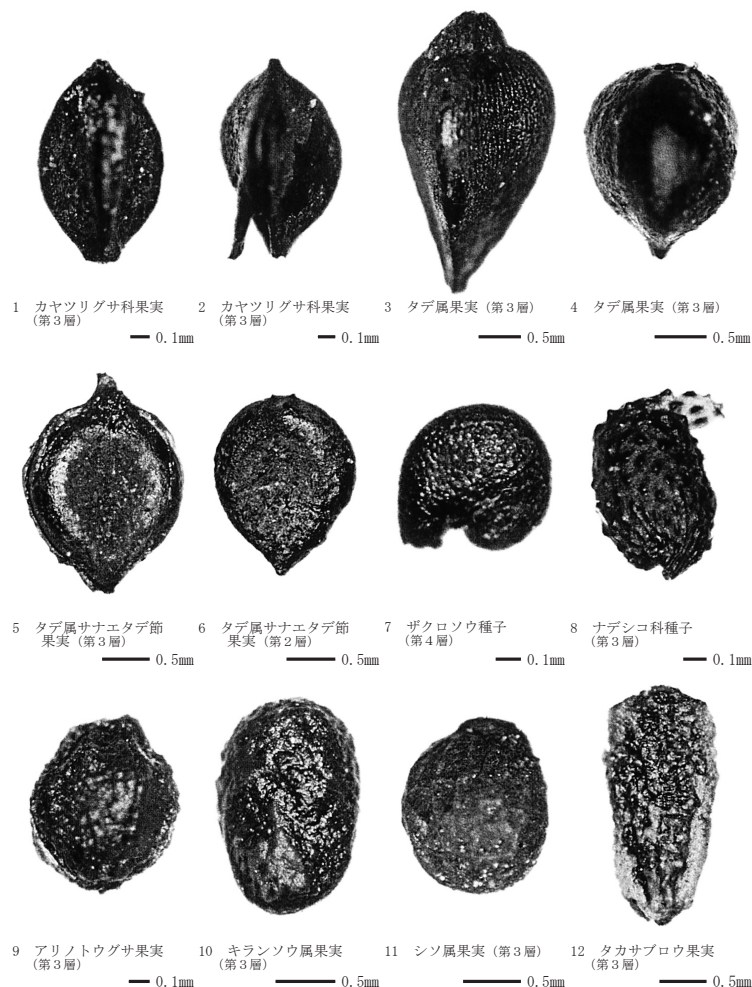
5. 種実同定

(1) 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成

や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素をあきらかにし古環境の推定をおこなうことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

横尾遺跡第155次発掘調査(SK006)の種実



(2) 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定をおこなう。

- 1) 試料 100 cm³ (全量) に水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定をおこなう。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(3) 結果

1) 分類群

草本9分類群が同定される。学名、和名および粒数を第2表に示し、主要な分類群

を写真に示す。200 cm³中の種実数をダイアグラムに示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔草本〕

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。サイズは長さ 1.04mm×幅 0.65mm、長さ 1.13mm×幅 0.69mm である。

タデ属 Polygonum 果実 タデ科

黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。サイズは長さ 1.85mm×幅 1.45mm である。

黒灰色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で、表面には微細な網目模様がある。サイズは長さ 3.29mm×幅 1.86mm である。

タデ属サナエタデ節 Polygonum sect. Persicaria 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。サイズは長さ 2.26mm×幅 1.66mm、長さ 1.85mm×幅 1.42mm である。

ザクロソウ Mollugo pentaphylla L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一カ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。サイズは長さ 0.58mm×幅 0.61mm である。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

アリノトウグサ Haloragis micrantha R. Br. 果実 アリノトウグサ科

淡褐色で卵形を呈す。表面には 6～7 本の縦方向の稜がはしる。サイズは長さ 0.85mm×幅 0.72mm である。

キランソウ属 Ajuga 果実 シソ科

卵形や狭卵形で側面は横狭卵形である。着点は広卵形や広楕円形、腹面の一端(卵の細い方)から中央までを占め、幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある。サイズは長さ 1.79mm×幅 1.21mm である。

シソ属 Perilla 果実 シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。サイズは長さ 1.49mm×幅 1.24mm である。

タカサブロウ Eclipta prostrata L. 果実 キク科

淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。上端は円形に突出し、下端は切形となる。表面中央部にいぼ状の突起がある。断面はひし形である。サイズは長さ 2.52mm×幅 1.28mm である。

2) 種実群集の特徴

第 2 層(サンプル No. 5)からは、草本種実のタデ属 2、タデ属サナエタデ節 2、キランソウ属 2 が検出された。いずれも人里周辺に生育する草本である。

第 3 層(サンプル No. 1)からは、草本種実のカヤツリグサ科 12、タデ属 4、タデ属サナエタデ節 6、ナデシコ科 1、アリノトウグサ 1、キランソウ属 1、シソ属 1、タカサブロウ 1 が検出された。人里に生育する草本がほとんどである。

第 4 層(サンプル No. 4)からは、草本種実のカヤツリグサ科 1、ザクロソウ 1、キランソウ属 2 が検出された。人里周辺に生育する草本である。

6. 珪藻分析

(1) はじめに

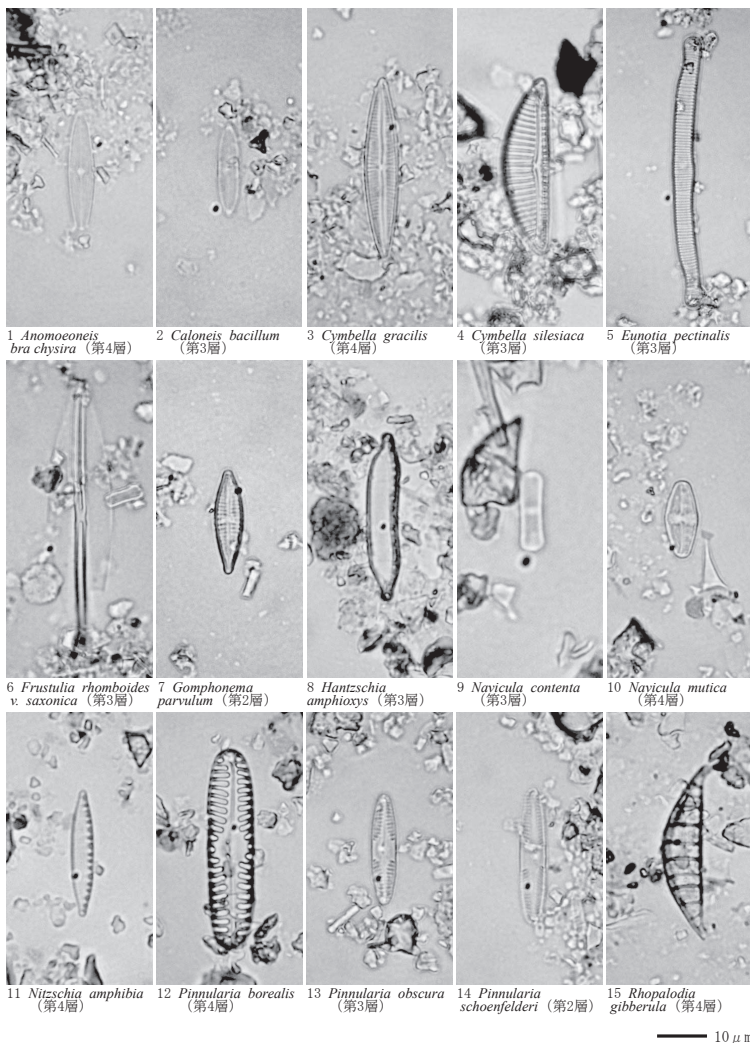
珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所をもっている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

(2) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定をおこなった。

- 1) 試料から 1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗 (5~6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 検鏡、計数

横尾遺跡第 155 次発掘調査 (SK006) の珪藻



検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍でおこなった。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまでおこない、少ない試料についてはプレパラート全面について精査をおこなった。

(3) 結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、中塩性種 (汽水生種) 1 分類群、貧塩性種 (淡水生種) 73 分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端 2 個につき 1 個と数えた。第 3 表に分析結果を示し、珪藻ダイアグラムを第 2 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes minutissima、Amphora montana、Anomoeoneis brachysira、Caloneis bacillum、Cymbella gracilis、

Cymbella silesiaca, *Eunotia minor*, *Eunotia paludosa-rhomboidea*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praerupta*, *Frustulia rhomboides v. saxonica*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula mutica*, *Navicula veneta*, *Neidium alpinum*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia interrupta*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia obscura*, *Pinnularia schoenfelderii*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia spp.*, *Rhopalodia gibberula*, *Surirella angusta*

2) 珪藻群集の特徴

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。(第2図)

下位の第4層(サンプルNo.4)では、陸生珪藻が42%、真・好止水性種が25%、流水不定性種が23%、真・好流水性種が10%を占める。陸生珪藻では、*Navicula mutica*を主に *Pinnularia borealis*, *Pinnularia schoenfelderii*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia subcapitata*, *Navicula contenta*, *Hantzschia amphioxys*が出現する。真・好止水性種では、*Frustulia rhomboides v. saxonica*, *Cymbella gracilis*, *Anomoeoneis brachysira*の出現率が高く、真・好流水性種では、*Gomphonema parvulum*が比較的多い。

第3層(サンプルNo.1)では、真・好止水性種が14%に減少し、真・好流水性種が24%を占めるようになり *Gomphonema parvulum*が増加する。他に沼沢湿地付着生種の *Eunotia pectinalis*, *Eunotia minor*, *Gomphonema gracile*, *Eunotia praerupta*がやや増加する。

第2層(サンプルNo.5)では、第3層(サンプルNo.1)と組成、構成ともほとんど変化しないが、陸生珪藻の割合がやや増加し47%を占めるようになる。

7. 考察

1) 遺構の環境と性格

土坑SK006では、第2層(サンプルNo.5)、第3層(サンプルNo.1)、第4層(サンプルNo.4)のいずれの試料からも寄生虫卵およびあきらかな消化残渣は検出されなかった。花粉分析では、いずれの試料もイネ科とヨモギ属を主とする風媒花の草本が優占する。種実ではカヤツリグサ科、タデ属などの人里周辺に生育する草本が検出された。以上から、検出された植物遺体では各層とも周辺の植生に由来する遺体群と考えられる。珪藻分析では、各層とも陸生珪藻が多く、湿った土壌の環境が優位であるが、第4層(サンプルNo.4)は止水性種、第2層(サンプルNo.5)と第3層(サンプルNo.1)は流水性種、沼沢湿地付着生種がやや多く、異なる環境が示唆される。

以上から、土坑SK006の各層は、周囲の植生の影響を受けつつそれらを反映した堆積物とみなされるが、第4層(サンプルNo.4)は湿った環境から池状の止水域、第2層(サンプルNo.5)と第3層(サンプルNo.1)は湿った環境から弱く流れる環境か流水の影響のある環境が示唆された。そのため土坑SK006の堆積物は、水の影響を受ける環境で堆積し、周囲の植生に由来する植物遺体とともに堆積した堆積物であることが示唆される。寄生虫卵や食用となる植物の優勢な出現はなく、糞便の堆積は含まれていない。しかし、便所遺構では、廃絶時に内容物を除去することも多く、遺構の用途を明確に示唆することはできない。

2) 周囲の環境

珪藻分析から、下位の第4層(サンプルNo.4)では *Navicula mutica*を主とする陸生珪藻が多く、真・好止水性種では、*Frustulia rhomboides v. saxonica*, *Cymbella gracilis*, *Anomoeoneis brachysira*の出現率が高いことから、湿った環境から止水性の水域が示唆される。第2層(サンプルNo.5)と第3層(サンプルNo.1)では、*Navicula mutica*を主とする陸生珪藻が多いが、*Gomphonema parvulum*の真・好流水性種が多く、湿った環境から流水域の環境が示唆される。以上から、下位の第4層(サンプルNo.4)の時期は湿った環境から池状の水域の環境であり、第2層(サンプルNo.5)と第3層(サンプルNo.1)は湿った環境から流水域ないしその影響を受ける環境であった。各層から推定される周囲の植生は、イネ科、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科、チドメグサ亜科、キク亜科の草本花粉が検出され、これら草本が分布するやや乾燥から湿った樹木のほとんど生育しない肌地が分布していた。

第 1 表 横尾遺跡第 155 次発掘調査 (SK006) における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		サンプ #Na.5 第2層	サンプ #Na.1 第3層	サンプ #Na.4 第4層
学名	和名			
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉			
Podocarpus	マキ属			1
Abies	モミ属		1	1
Tsuga	ツガ属	1	1	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複雑管束亜属	1	9	2
Cryptomeria japonica	スギ	1	3	4
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	1	
Platycarya strobilacea	ノグルミ		1	
Alnus	ハシノキ属	1		
Betula	カバノキ属			1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ			2
Castanea crenata	クリ	5	8	2
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	6	18	15
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属		2	5
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	18	28	10
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	1		1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ		1	
Illicium	シキミ属	1		
Vitis	ブドウ属	1	1	
Elaeagnus	グミ属	1		
Distylium	イスノキ属			1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	16	20	1
Rosaceae	バラ科	2		
Leguminosae	マメ科		1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属			1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	131	129	102
Oryza type	イネ属型	3	3	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	23	29	36
Polygonum	タデ属			1
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1	2	
Polygonum aviculare	タデ科ミチヤナギ属	8	5	
Fagopyrum	ソバ属		2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	3	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	1	
Ranunculus	キンボウグ属	4	2	2
Cruciferae	アブラナ科	3	8	5
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属		1	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	12	7	15
Apioidae	セリ亜科		2	1
Solanaceae	ナス科		1	
Plantago	オオバコ属	1	3	
Valerianaceae	オミナエシ科		1	
Lactucoideae	タンポポグ亜科	8	8	4
Asteroidae	キク亜科	4	3	10
Xanthium	オナモミ属	1		
Artemisia	ヨモギ属	77	78	94
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1	3
Trilate type spore	三条溝胞子	5	8	11
Arboreal pollen	樹木花粉	38	74	46
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	18	21	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	278	288	273
Total pollen	花粉総数	334	383	321
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	1.1 ×10 ⁻⁴	2.0 ×10 ⁻⁴	9.8 ×10 ⁻³
Unknown pollen	未同定花粉	6	8	5
Fern spore	シダ植物胞子	6	9	14
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体(Charcoal・woods fragments)	(×10 ⁵)			
未分解遺体片		0.5	1.9	0.5
分解質遺体片		13.6	21.1	15.5
炭化遺体片(微粒炭)				

第 2 表 横尾遺跡第 155 次発掘調査 (SK006) における種実分析結果

分類群		部位	サンプ #Na.5 第2層	サンプ #Na.1 第3層	サンプ #Na.4 第4層
学名	和名				
Herb	草本				
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		12	1
Polygonum	タデ属	果実	2	4	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	果実	2	6	
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子		1	
Haloragis micrantha R. Br.	アリノトウグサ	果実		1	
Ajuga	キランソウ属	果実	2	1	2
Perilla	シソ属	果実		1	
Eclipta prostrata L.	タカサブロウ	果実		1	
Total	合計		6	27	4

(100cm³中0.25mm篩)

第 3 表 横尾遺跡第 155 次発掘調査 (SK006) における珪藻分析結果

分類群	サンプ #Na.5 第2層	サンプ #Na.1 第3層	サンプ #Na.4 第4層
貧塩性種 (淡水生種)			
Achnanthes lanceolata		2	
Achnanthes minutissima	3	6	2
Amphora copulata	1		
Amphora montana	7	17	1
Anomoeoneis brachysira	3	3	12
Caloneis bacillum	8	2	6
Cocconeis placentula		1	
Cymbella gracilis	1	3	24
Cymbella silesiaca	10	7	10
Cymbella tumida		1	
Cymbella sp.			1
Diploneis elliptica		1	
Diploneis ovalis		2	
Eunotia bilunaris	1	1	3
Eunotia minor	7	5	1
Eunotia paludosa-rhomboida	3	3	2
Eunotia pectinalis	9	10	
Eunotia praeurupta	4	5	2
Fragilaria capucina	1		
Fragilaria exigua	2		
Frustulia rhomboides v. saxonica	4	9	26
Frustulia vulgaris	1	4	4
Gomphonema gracile	9	3	1
Gomphonema minutum		2	1
Gomphonema parvulum	57	52	30
Gomphonema spp.			1
Hantzschia amphioxys	26	13	8
Navicula atomus		1	
Navicula cohnii		2	
Navicula contenta	7	8	9
Navicula cryptotenella	1		1
Navicula cuspidata	1		
Navicula elginensis		5	
Navicula gallica		1	
Navicula goeppertiana	1		2
Navicula kotschyi		1	
Navicula laevisima	1	1	
Navicula mutica	23	21	36
Navicula pupula	1	1	
Navicula veneta	7	4	
Navicula spp.			6
Neidium affine	1		2
Neidium alpinum	4	2	2
Neidium ampliatum	1	4	
Nitzschia amphibia	3	2	2
Nitzschia clausii		2	1
Nitzschia debilis	3		
Nitzschia nana	1	1	2
Nitzschia palea	1	1	
Nitzschia spp.		1	
Pinnularia acrosphaeria	1	5	
Pinnularia aestuarii	1	1	
Pinnularia appendiculata	9	11	12
Pinnularia borealis	24	10	23
Pinnularia braunii			3
Pinnularia divergens	2		
Pinnularia gibba	1	3	1
Pinnularia gibba v. dissimilis			
Pinnularia hemiptera	1		
Pinnularia interrupta			8
Pinnularia lagerstedtii	2	1	1
Pinnularia microstauron	5	4	3
Pinnularia obscura	3	3	4
Pinnularia schoenfelderii	16	14	18
Pinnularia schroederii	9	5	
Pinnularia subcapitata	8		12
Pinnularia viridis	2	3	2
Pinnularia spp.	5	7	8
Rhopalodia gibberula	4	7	14
Stauroneis phoenicenteron		1	1
Surirella angusta		8	
Surirella ovata	1	2	1
Surirella tenera			1
中塩性種 (汽水生種)			
Navicula crucicula	1		
合 計	308	296	310
未同定	1	5	8
破片	243	209	591
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	7.7 ×10 ⁻⁴	3.2 ×10 ⁻⁵	6.4 ×10 ⁻⁴
完形殻保存率 (%)	56.0	59.0	35.0

下位の第 4 層 (サンプル No. 4) の時期は、シイ属－マテバシイ属が多く、シイ属を主とする照葉樹が分布していた。第 2 層 (サンプル No. 5) と第 3 層 (サンプル No. 1) の時期は、イネ属型、ソバ属の草本花粉、クワ科－イラクサ科、コナラ属アカガシ亜属とクリの樹木花粉がやや増加し、人為性の増加、水田と畑地の増加、アラカシやクリの二次林の分布が示唆される。

8. まとめ

土坑 SK006 は、各層から寄生虫卵や食用となる植物は検出されず、糞便堆積は含まれず、周囲から堆積した堆積物であるとみなされる。遺構に内容される遺体からは便所遺構とする蓋然性はない。下位の第 4 層 (サンプル No. 4) では湿った環境から止水性水域で堆積し、周囲にはイネ科、ヨモギ属を主に、カヤツリグサ科が優勢な草本が分布し、周辺地域にはシイ属－マテバシイ属が多く、シイ属を主とする照葉樹が分布していた。第 2 層 (サンプル No. 5) と第 3 層 (サンプル No. 1) は湿った環境から流水域ないしその影響を受ける堆積環境で、人為性が増加し、水田と畑地の分布、アラカシやクリの二次林の分布が示唆された。

【参考文献】

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231 - 245.
金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9 - 55.
金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構－藤原京 7 条 1 坊－, 奈良国立文化財研究所, p.14 - 15.
金原正明(1999)寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151 - 158.
中村純(1967)花粉分析. 古今書院, p.82 - 102.
金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本 第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248 - 262.
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13,p.187 - 193.
中村純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21 - 30.
中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p. 金原正明・金原正子(1993)石棺内の花粉分析および消化管内残渣の分析. 斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書, 奈良県立橿原考古学研究所, p.18 - 26.
金原正明・金原正子・松井章(2012)寛永寺徳川將軍親族遺体に由来する環境考古学的分析. 東叡山寛永寺徳川將軍家御裏方霊廟第三分冊, 寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編, 吉川弘文館, p.428 - 440.
南木睦彦(1992)低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.18 - 22.
Hustedt,F.(1937 - 1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol.Suppl.15,p.131 - 506.
Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986 - 1991) Bacillariophyceae・1 - 4.
Asai,K.&Watanabe,I.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35 - 47.
安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73 - 88.
伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6,p.23 - 45.
小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 第 1 号, 植生史研究会, p.29 - 44.
小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1 - 20.
渡辺仁治(2005)淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAipo, pH 耐性能. 内田老鶴圃, 666p.

第V章 総括

平成3年度から実施してきた156地点におよぶ横尾遺跡の調査では、8世紀後半から10世紀後半の数多くの粘土採掘坑、区画された掘立柱建物跡群や道路状遺構、火葬墓と考えられる方形周溝遺構などを確認し、あわせて官衙通有の遺物の出土が認められている。こうした状況から、これまでの内容より当該地は官衙に関連する生産遺跡として位置付けられている。横尾遺跡での報告は今回の発掘調査報告書刊行をもって一旦終了する。こうした状況を踏まえ、これまでの調査における横尾遺跡の古代の様相について再整理をおこない、本報告書の総括とし、今後の遺跡検討の一助としたい。

第1節 横尾遺跡の古代の様相(第30図)

(1) 古代の主要遺構と出土遺物

横尾遺跡は開析谷を挟んで中位段丘面上に広がり、弥生時代から集落が営まれ、古代も同様に中位段丘面で土地利用をおこなっている状況をこれまでの調査成果は示している。さらに、中位段丘面は、谷によって以下の段丘面に三分され谷底は乙津川へとつながる。ここでは、古代の遺構について以下に示す各段丘面の土地利用状況とあわせて概観する。

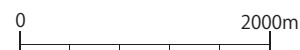
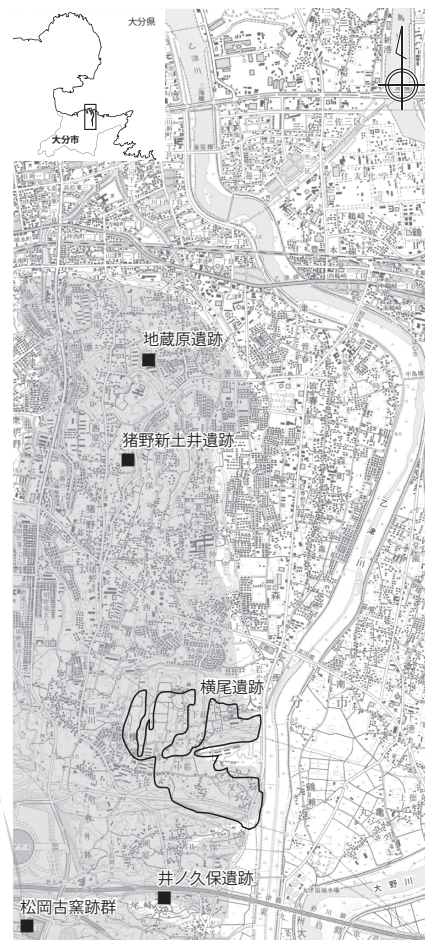
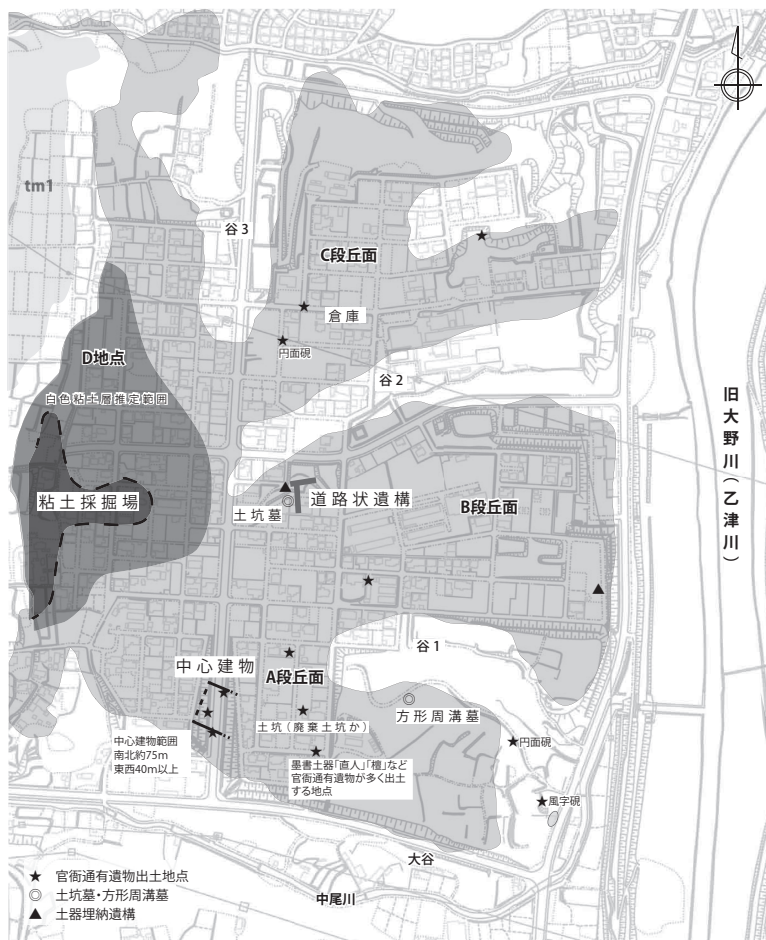
- A 段丘面…粘土採掘坑より南東に位置し「谷1」以南の中位段丘面
- B 段丘面…粘土採掘坑より東に位置し「谷1」「谷2」に挟まれた中位段丘面
- C 段丘面…粘土採掘坑より北東に位置し「谷2」「谷3」に挟まれた中位段丘面
- D 地点…横尾遺跡の西側の山裾 白色粘土層が広がる地点

①粘土採掘坑(D地点)

当該地の西側には白色粘土層が広がり、粘土採掘が長期間おこなわれ、調査での検出総数は350基を超える。これまでの調査では粘土採掘の北限と東限の範囲が判明しており、さらに今回報告する第155次調査により、南限を確認することができた。検出遺構数に対し出土遺物はわずかであるが、粘土採掘坑総数の約1割において、土師器を人為的に埋置した粘土採掘坑が確認されており、遺物の年代から8世紀後半から10世紀後半までの時期に帰属することが判明している。8世紀後半から9世紀代の遺物には、主に土師器坏・甕・鉢・蓋が見られるが、10世紀代になると遺物の主体が黒色土器A類碗cに変わる。埋置された土師器は坏や蓋・碗などの供膳具が主体であり、煮炊具などの生活用具が少ないことも特徴である。この点については製作した器種の偏りか、器種を限定したものか、消費地を含めた検討が必要である。埋置された遺物には、9世紀代のものが多く見られる。この点は、粘土を採掘し、土器を生産した時期の盛期を示している可能性がある。残念ながら粘土採掘坑は数多く検出されているが、調査地周辺において土器生産に直接関わるような焼成遺構や、同時期の建物跡などは確認できていない。

②掘立柱建物跡群

当該地においてもっとも南側に位置するA段丘面では、8世紀後半から9世紀代にかけての掘立柱建物跡が13棟確認され、そのうち11棟は、南北約75m、東西40m以上の「コ」の字状を呈する区画溝の内側に配置される。建物の配置状況から大きく3期に分けることができる。建物の方位にははっきりとした規則性は認められないが、比較的南北棟の建物が多く、建替えがおこなわれた状況もうかがえる。建物の身舎面積は22.0～42.0㎡であり大きさはさまざまである。区画内からは柵列も確認されている。このことから、区画内には柵による仕切りがあり、その内部に複数の建物が建ち並ぶという、官衙施設に見られるような特徴をもつ。また、建物の東側には土坑が多く存在し、「直人」「檀」「本」「檀主」などと書かれた墨書土器や刻書土器・緑釉陶器などの官衙に関



横尾遺跡 9世紀中頃～後半頃の様相 (1/10000)

鶴崎台地上の官衙関連遺跡分布図 (1/60000)

遺跡名		8世紀	9世紀	10世紀
横尾遺跡	粘土採掘坑			
	掘立柱建物跡			
	土坑群			
	道路状遺構			
	墳墓・方形周溝墓		 方形周溝墓 (9世紀代)	 木棺墓
地蔵原遺跡			 区画された掘立柱建物跡	 火葬墓 (蔵骨器埋納遺構)
猪野新土井遺跡		 道路状遺構	 掘立柱建物跡	
井ノ久保遺跡			 掘立柱建物跡	
			 土器焼成遺構	

古代官衙関連遺跡の盛衰図

第30図 鶴崎台地上に位置する官衙関連遺跡

連する遺物が出土している。これらの土坑は廃棄土坑と考えられる。

B 段丘面で確認できた掘立柱建物跡は 2 棟である。うち 1 棟は A 段丘面と同時期の 9 世紀代のもので、身舎面積 58.2 m²以上、南側に庇をもつ大型の掘立柱建物跡である。南側に位置する谷 1 を挟んだ対面には、9 世紀代の火葬墓と考えられる方形周溝遺構が位置する。もう 1 棟は、10 世紀代に建てられた身舎面積 35.6 m²の掘立柱建物跡である。C 段丘面では、掘立柱建物跡が 13 棟確認されている。そのうち 2 棟は A 段丘面と比較すると建物の規模は小さく、総柱の建物構造から倉庫跡と考えられる。倉庫以外の建物周辺では、9 世紀の土師器坏・甕・鉢などが廃棄された状態を示す土坑が確認され、居住空間として利用されていたようである。出土遺物量はあきらかに少量であるが、B 段丘面では緑釉陶器、C 段丘面では墨書土器・越州窯系青磁碗・円面硯が出土している。

これらの出土遺物すべてが必ずしも官衙的要素をもつとはいえないが、重要視すべき地点であることは間違いない。その中でも A 段丘面に位置する区画溝に区切られた建物群は、施設の中心的な役割を担っていたものと考えられる。

③道路状遺構

B 段丘面の北側で東西方向に道路状遺構が延びている。検出された道路は中央付近で南に分岐し「T」字状に延びる。道路の構造は、柱穴がほぼ平行して 2 列に構築されたもので、柱穴列の幅は約 3 m を測り、南に延びるにつれ幅 4 m と広がりを見せ、さらに南側に分岐することが想定される。中央の分岐点からは、意図的に土師器を埋置したピットを 2 基検出し、分岐点での祭祀の可能性が示唆される。道路の配置状況を見ると直線的に造られ、西側延長線上は粘土採掘場に向かい、東側は丘陵東端部から谷 2 を下り乙津川周辺部につながると考えられる。また南に延びる道路は、A 段丘面の建物群のある方向に延びることが想定され、主要施設を結ぶ道路として機能していた可能性が高い。なお、道路状遺構の周辺では同時期の遺構は皆無で、空閑地だったことが考えられる。

④墳墓・方形周溝遺構

A 段丘面では、「谷 1」につながる傾斜面において 1 辺が 5 m の周溝が方形にめぐる方形周溝遺構を検出している。大分県内では大分市城南遺跡と中津市相原の山首遺跡において認められ、すでに火葬墓の可能性が指摘されており、横尾遺跡の方形周溝遺構も同様に火葬墓の可能性が考えられる。土師器坏 c の底部破片の出土から、9 世紀代に比定される。火葬墓の被葬者については、「中央との関係を維持した郡司及びその一族と位置付けられ、律令官人として地方に君臨する郡司達にとって、中央との関係を象徴する極めて重要な行為として火葬もしくは火葬墓の造営が受容された可能性が指摘されている^(註 24)」ことを踏まえれば、当該遺構は郡司およびその一族の埋葬が想定できる。B 段丘面の一角では 9 世紀後半になると土壙墓や木棺墓がつくられるが、周辺での古代の遺構が希薄であるため、墓域としての利用も考えられる。

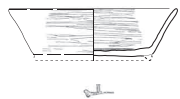
⑤官衙遺跡通有の出土遺物 (第 31 図)

当該地の土坑や溝からは官衙遺跡通有の遺物が出土しており、これらは官衙と関連したことを示す遺物である。A 段丘面からの出土がもっとも多く、区画された建物群の東側に集中している。その中でも「直人」と判読できる墨書土器は、「郡司に仕える人々」^(註 25)であることが文献資料から判明しており、直人として郡司に仕えた人物の存在を示唆する資料である。B・C 段丘面からも官衙通有の遺物がわずかに出土している。その他、A 段丘面東側斜面地では、中世の遺物と共に古代や縄文時代に比定される遺物が大量に含まれる堆積層が検出できた。この堆積層に含まれた遺物の中には、円面硯・風字硯・刻書土器など官衙的な性格の強い遺物が見られる。堆積状況から、台地上から流れ込んだものと考えられる。このことから、台地上の A 段丘面にはやはり官衙関連の中心施設の存在が想定されるとともに、役人が滞在する施設などの存在も示唆される。

《A 段丘面》

墨書土器

92 次 SK088
底面に「山」



118 次 SX012
外面に墨書



133-3 次 SX001
底面に「直人」



底面に墨書



刻書土器

133-2 次 表土
内面に刻書



125 次 SK002

底面に墨書



底面に墨書



底面に「兵」か



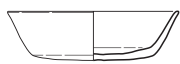
緑釉陶器

127 次 SB010



136 次 SK026

底面に墨書



136 次 SK015

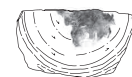
底面に「禮主（禮+善）」



底面に「禮」



底面に墨書



底面に墨書

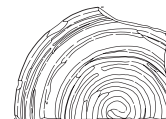


底面に墨書



136 次 SK010

底面「本（大+下）」



《B 段丘面》

緑釉陶器

98 次 SP012



淡茶色土



《C 段丘面》

墨書土器

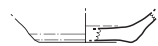
67 次 SK062

外面に墨書



越州窯系青磁

139-1 次 SD001



横尾 69 次 SD001



円面硯

68 次 SD008①

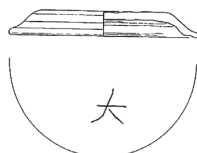


《A 段丘面 東側斜面地》

刻書土器

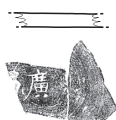
87 次 SX003

内面に「大」



96 次 SX020

底面に「廣」



緑釉陶器

96 次-2 SX020



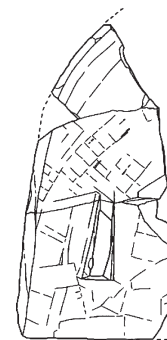
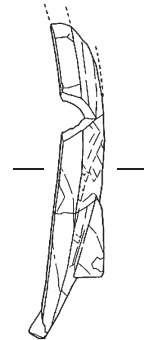
円面硯

96 次-2 SX020



風字硯

87 次 SX003



0 20cm

第 31 図 横尾遺跡出土の官衙遺跡通有遺物 (1/6)

(2) 乙津川流域の遺跡動向

これまで述べたように、横尾遺跡では、8世紀後半から徐々に粘土採掘が開始され、9世紀になると急速に粘土採掘坑と官衙の特徴をもつ遺構が増加する。横尾遺跡が位置する鶴崎台地上では、古代の横尾と似た様相を示す遺跡が所在している。

横尾遺跡の北方3.5km地点に位置する地蔵原遺跡は、80棟あまりの掘立柱建物跡が検出された。建物群は、南北48+ α m、東西36mの「コ」の字状にめぐる溝状遺構に囲まれ整然とした建物配置で展開するものと、その西側に空閑地を挟んで分布するものが見られ、大きく4時期に分けられる。これらの建物跡の時期は、出土遺物の土器や瓦などから、8世紀後半に建てられ、9世紀後半には廃絶する。両者ともに総柱建物は少なく、前者では溝状遺構から大量の瓦が出土した。そのため溝状遺構の内部には、瓦葺の建物で有力者の居館や仏教施設があり、その西側には郡衙に勤める官人や関係する有力農民の住宅など郡衙的な機能を果たした施設^(註26)の存在が示唆される。建物群廃絶後の遺構としては火葬墓のみである。横尾遺跡と比較すると、8世紀後半から9世紀後半に区画をもつ建物群が展開し、9世紀後半以降になると遺構はほぼ見られなくなり火葬墓(蔵骨器埋納遺構)のみとなる点は非常によく似ている。しかし、建物が整然と配置されることや大量の瓦の出土は横尾遺跡では見られず、同じ時期に存在する官衙遺跡でも様相が異なる。

地蔵原遺跡から0.6km南に位置する猪野新土井遺跡は、7世紀後半から8世紀前半頃にかけて都城系土師器が出土する竪穴建物跡が1棟確認され、一旦継続することなく8世紀後半から末にかけ再び形成される。その後、8世紀末から9世紀前半頃に遺跡の様相が急変し、約20棟の掘立柱建物跡群や、越州窯系青磁碗、緑釉陶器皿、「豊」と判読できる墨書土器など、官衙に関連する遺物が出土するようになる。遺跡の南側からは、9世紀初頭に比定される竪穴建物跡が検出され、様相が急変する時期には掘立柱建物群と竪穴建物が併存していたようである。また建物群の南には、8世紀中頃に造られたとする東西方向の道路状遺構が走る^(註27)。横尾遺跡とは時期や構造が異なるものの、道路周辺に官衙の可能性が考えられる遺構が展開する点においては類似する。

一方、鶴崎台地の南側に転じると、横尾遺跡の1km南側、乙津川の支流である挟間川によって開析された扇状地上に井ノ久保遺跡が位置する。8世紀後半もしくは末頃から9世紀中頃に掘立柱建物跡や柵列、土器焼成遺構や廃棄土坑が形成される。その中でも土器焼成遺構が特筆され、窯内に廃棄された土師器により8世紀末から9世紀初頭に位置付けられる。出土する土師器は、蓋と坏に限定され、当該時期に土師器供膳具の生産地であったことが判明している。その他に、フイゴの羽口や鉄滓など、鑄造工房の存在を裏付ける遺物も出土する。井ノ久保遺跡は、8世紀末から9世紀代の様々な種類の土師器とともに、円面硯や風字硯、区画硯、灰釉陶器などの遺物も見られ、官衙的要素がうかがえる生産拠点と考えられる。そして、乙津川と挟間川の合流部に近いという立地から、生産品の運搬には水運を利用し、製品の集積地としての機能もあわせもっていた^(註28)。他の遺跡と比べ横尾遺跡と近接しており、時期は異なるが生産遺跡という上では性格がもっとも近い遺跡である。

以上のことから、鶴崎台地上には8世紀後半から9世紀後半の時期に別府湾や乙津川、陸路などの流通網を重視したうえで、官衙に関連する施設が置かれていたことが分かる。『類聚三代格』の天平18年(746)の官符によると、「このころ、官人・百姓・商旅の徒が、調綿などの国物を豊後国草津津や豊後国埴津、同坂門津から積み出しほしいままに往還していた」とあり、政府はこれを厳しく禁止している。しかし、「上件の三津尚奸徒多し」という状況で、三津からの私物等の積み出しという不法行為がやむことはなく、結果的に豊前・豊後の三津における公私の船の往来を許すことになる。このような状況で、河口部に位置し、川を介して後背する豊後国などの諸郡とつながり、物資を集散させることが可能となる場所が鶴崎台地上であったと想定される。その中でも、台地北端に位置する地蔵原遺跡は郡司層に相当する有力百姓や商旅の徒が構築した拠点基地であることが考えられ、ここで公私の物資の集散と京への搬送が盛んにおこなわれたとする見解が提示されている^(註29)。これらのことから、乙津川が物資の集散や搬送の媒介となり、水上輸送と陸上輸送のどちらにも適した立地をもつ鶴崎台地上において古代に遺跡が発展していったことがうかがえる。

その後、鶴崎台地上には、横尾遺跡をはじめ猪野新土井遺跡や猪野中原遺跡など大友家臣団の屋敷と推定され

る半町四方規模の方形館が築かれ、古代から中世まで重要な地点として認識されていたことが想定できる。

(3) まとめ

横尾遺跡は、8世紀後半より粘土採掘が開始され、9世紀前半から後半には粘土採掘坑の増加や建物、道路の建設がおこなわれ遺跡が急速に展開するなど官衙色が強くなる。この背景には、盛んに採掘される良質な粘土を管理するために、郡司などの役人の存在が不可欠になった為と考えられる。それを裏付ける区画された建物施設や火葬墓の存在、墨書土器や越州窯系青磁碗などの出土から、当該地が鶴崎台地上の中で生産遺跡として井ノ久保遺跡に類する官衙に関連した遺跡であると考えてよいであろう。しかし、井ノ久保遺跡のような土器焼成遺構や、土器作成のための粘土集積場、工房などの建物跡は周辺の調査では未確認である。そのため、生産地点である粘土採掘場と実際に土器を製作する地点は近くにはない。さらに、8世紀後半の粘土採掘開始と10世紀代の終焉の時期と一致する建物などの遺構は皆無であり、当該時期にはどのように粘土採掘坑の管理がおこなわれていたのか、また土器焼成などはどこでおこなっていたのか今後検討が必要である。

このように横尾遺跡や南側に位置する井ノ久保遺跡、須恵器を焼成した松岡古窯跡群など、この地域が古代における土師器や須恵器の生産拠点の役割を果たしていたものと考えられる。生産にあたっては、発見された遺構や遺物から、官衙的な施設を設置するとともに、そこで生産調整や管理などが、官衙に属していた役人によっておこなわれていたと考えられよう。こうした場所において官衙や寺院で使用される土師器や須恵器の生産がおこなわれた背景としては、燃料となる木の資源、良質な原材料となる粘土、供給地に運ぶため河川の水を利用した水運、官道を利用した陸路などの交通網などが備わったことに起因していたと考えられる。

【註】

- 註1 豊田寛三 1977「大野川下流域町・村の構造と舟運」『大野川』大分大学教育学部編・発行
- 註2 竹村恵二 2008「横尾貝塚周辺の地質と地形、および横尾貝塚立地との関連」『横尾貝塚』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集
- 註3 大分県教育委員会 1999『スポーツ公園内遺跡発掘調査報告書（第4分冊）』大分県文化財調査報告書第103輯
- 註4 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2012『横尾貝塚—県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第59集
- 註5 大分市教育委員会 2008『横尾貝塚—大分県大分市大字横尾所在の横尾貝塚範囲確認調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集
- 註6 大分県教育委員会 2002『尾崎遺跡 清水遺跡 新田遺跡 川野遺跡 久木小野遺跡 平岩遺跡』東九州自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 註7 大分市教育委員会 1982『大分市多武尾遺跡調査概報』
- 註8 大分市教育委員会 2015『横尾遺跡9—大分市横尾土地区画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第135集
- 註9 大分市教育委員会 2014『猪野遺跡第6次調査』『大分市埋蔵文化財調査概要報告』2014 平成25年度
- 註10 大分市教育委員会 2016『横尾遺跡10—大分市横尾土地区画事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第140集
- 註11 大分県教育委員会 2002『毛井遺跡B地区—国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書—』大分県文化財調査報告書第135輯
- 註12 大分市史編さん委員会 1987『地蔵原遺跡は語る』『大分市史 上巻』
- 註13 大分市教育委員会 1996「猪野新土井遺跡第1・2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度
- 註14 大分市教育委員会 1997「猪野新土井遺跡（第3次調査）」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
- 註15 大分市教育委員会 2014『横尾遺跡7—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第124集
- 註16 大分市教育委員会 2000「松岡古窯跡群」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度
- 註17 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書—東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—第1分冊—本文編—』
- 註18 大分県教育委員会 2001『二目川遺跡—県道松岡日岡線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分県文化財調査報告書第122輯
- 註19 大分市教育委員会 2014『横尾遺跡8—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第131集
- 註20 大分市教育委員会 2013『横尾遺跡6 第144・145・146・147・148次調査—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第123集
- 註21 大分市教育委員会 1997「猪野・中原遺跡」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
- 註22 大分市史編さん委員会 1987『大分市史 中巻』
- 註23 滋賀県守山市教育委員会 2007『下之郷遺跡確認調査報告書IV—第44・45次調査報告書—』
- 註24 狭川真一 1998「古代火葬墓の造営とその背景」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会
- 註25 『大分県史 中世篇I』に大友頼泰の書状に国衙の下につかえる「直人（じきにん）」の記載があり、これらの役職が古代から存在していたと考えられる。
- 註26 後藤宗俊 1987『地蔵原は語る』『大分市史』上巻
- 註27 田中裕介 1999「大分平野の古代道路遺構と「海部道」の復元」『大分県地方史』第173号
- 註28 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』第1分冊—本文編—
- 註29 塩地潤一 2006「豊後国における8・9世紀の遺跡動向—乙津川流域を中心として—」『第8回 西海道古代官衙研究会資料集』西海道古代官衙研究

第2表 第154次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚	孔径/ 重量(g)			内面	外面			
第16図-1	SB030a 暗褐色土	弥生土器	壺	—	$4.0+\alpha$	—	—	(内)灰褐色 (外)黒褐色	長石・白色粒子	ナデ	ナデ・丁寧なナデ			R001
第16図-2	SB030c 暗褐色土	弥生土器	壺	—	$2.2+\alpha$	(6.0)	—	(内)黒褐色 (外)茶褐色	長石・角閃石	ナデ	ナデ後ヘラミガキ			R001
第16図-3	SI005 暗褐色土	土師器	小型 丸底壺	—	$3.6+\alpha$	—	—	(内)暗褐色 (外)橙色	長石・角閃石	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R001
第16図-4	SI005 暗褐色土	土師器	小型 丸底壺	—	$3.2+\alpha$	—	—	にぶい橙色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ナデ	ナデ			R002
第16図-5	SI005 暗褐色土	土師器	小型 丸底壺	—	$1.7+\alpha$	—	—	暗茶褐色	長石・角閃石・赤色粒 子	ナデ	ナデ			R003
第16図-6	SI005 暗褐色土	土師器	小型 丸底壺	—	$2.3+\alpha$	—	—	明褐色	角閃石・石英・赤色粒 子	ナデ・ハケ目・ 不定方向のハケ目	ナメ方向のナデ・ 不定方向の丁寧なナデ			R004
第16図-7	SI005 暗褐色土	土師器	小型 丸底壺	—	$4.0+\alpha$	—	—	暗褐色	石英・長石	指オサエ後不定方向のナデ	不定方向のナデ			R005
第16図-8	SI005 P-1	土師器	壺	—	$4.5+\alpha$	—	—	暗橙色	石英・角閃石	ナデ	ナデ・刻目突帯			R001
第16図-9	SI005 掘方明褐色土	土師器	高坏	—	$1.9+\alpha$	—	—	淡黄褐色	石英・金雲母	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R001
第16図-10	SI005 掘方明褐色土	土師器	甕	—	$4.4+\alpha$	—	—	淡橙色 ～暗橙茶色	石英・長石	指オサエ後 不定方向のナデ	工具ナデ後ヨコナデ			R002
第16図-11	SI010 暗褐色土	土師器	鉢	—	$3.5+\alpha$	—	—	黄褐色	角閃石	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			R005
第16図-12	SI010 暗褐色土	土師器	鉢	—	$4.1+\alpha$	—	—	黄褐色	角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ			R006
第16図-13	SI010 暗褐色土	土師器	鉢	—	$3.5+\alpha$	—	—	にぶい黄褐色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ナデ・爪痕・工具痕	ナデ			R007
第16図-14	SI010 暗褐色土	須恵器	蓋	—	$1.8+\alpha$	—	—	灰褐色	白色粒子	回転ヨコナデ	回転ヘラズリ・ 回転ヨコナデ			R002
第16図-15	SI010 暗褐色土	須恵器	坏	—	$1.7+\alpha$	—	—	灰黄色	角閃石	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ		6世紀	R001
第16図-16	SI010 暗褐色土 P-3	土師器	甕	(20.1)	$6.6+\alpha$	—	—	黄褐色	角閃石・長石	摩滅のため調整不明瞭・ ハケ目	ナデ・ハケ目後ナデ			R001
第16図-17	SI010 明黄褐色土 床直 P-1	土師器	鉢	—	$7.0+\alpha$	—	—	(内)淡黄色 (外)にぶい 黄褐色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ナデ	ナデ			R001
第16図-18	SI010 掘方明黄褐色土	土師器	甕	(18.4)	$4.8+\alpha$	—	—	灰黄色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ナデ	ナデ・ヨコナデ			R001
第16図-19	SI010sk001 黄褐色土 P-2	土師器	甕	—	$3.3+\alpha$	—	—	橙色	角閃石・長石	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R001
第16図-20	SI010 カマド 暗褐色焼土 P-4	土師器	甕	(14.1)	$6.7+\alpha$	—	—	赤茶色	長石・石英・白色粒子	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ			R001
第16図-21	SI010 カマド 暗褐色焼土 P-4	土師器	甕	(15.1)	$6.6+\alpha$	—	—	赤茶色	長石・角閃石・ 白色粒子・砂粒	ナデ	摩滅のため調整不明瞭			R002
第16図-22	SI010 カマド 暗褐色土 P-5	土師器	甕	—	$2.7+\alpha$	—	—	にぶい黄褐色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ヨコナデ・ナデ	ナデ			R001
第16図-23	SI010 カマド 暗褐色土 P-5	土師器	甕×壺	—	$16.5+\alpha$	—	—	にぶい黄褐色	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ・棒状工具痕	支脚転用か		R002
第16図-24	SK001	土師器	碗	—	$2.0+\alpha$	—	—	淡黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・回転ナデ			R002
第16図-25	SK001	弥生土器	甕	—	$4.0+\alpha$	—	—	淡黄白色	石英・角閃石	工具ナデ	不定方向のナデ・ナデ			R001
第16図-26	SD015	国産磁器	碗	—	$4.0+\alpha$	—	—	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R001
第16図-27	SD025 暗褐色土	瓦質土器	火鉢 脚部	—	$4.2+\alpha$	—	—	淡灰茶色	石英・長石・金雲母	ナデ	ナデ		中世か	R001
第16図-28	SD025 暗褐色土	国産陶器	碗	—	$2.7+\alpha$	(5.2)	—	淡緑灰色	精緻	露胎	施釉・露胎	貫入あり 陶胎染付 火入	近世	R002
第16図-29	SP012 暗褐色土	石製品	敲石	長13.1	幅11.3	厚6.8	1094.9g	—	—	—	—	安山岩		R001
第16図-30	SP013 黒褐色土	弥生土器	壺	(24.0)	$5.5+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・赤色粒子	タテ方向のハケ目後ナデ	タテ方向のハケ目後ナデ		弥生後期	R001

第3表 第155次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/ 最大長	器高/ 最大幅	底径/ 最大厚	孔径/ 重量(g)			内面	外面			
第26図-1	SK001	土師器	坏	—	$2.7+\alpha$	—	—	(内)暗茶色 (外)暗橙色	角閃石・石英	回転ナデ	回転ナデ		10・Ⅳ期	R003
第26図-2	SK005 黒色土	黒色土器	碗	(13.5)	$2.7+\alpha$	—	—	(内)黒色 (外)淡黄白色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ナデ・ミガキ	碗(A類)	10・Ⅲ期	R001
第26図-3	SK006 2層 黒色土	土師器	小皿	8.6	1.2	6.5	—	(内)白黄色 (外)淡褐色	長石・赤色粒子	回転ヨコナデ後指ナデ上げ	回転ヨコナデ・ 回転糸切り離し	小皿A	15世紀代	R008
第26図-4	SK006 2層 黒色土	土師器	小皿	8.7	1.5	6.7	—	橙色	角閃石	ナデ	ナデ・糸切り痕	小皿A	15世紀代	R001
第26図-5	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$2.2+\alpha$	—	—	淡橙色	石英・角閃石・赤色粒 子	回転ナデ	回転ナデ		15世紀代	R002
第26図-6	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$1.9+\alpha$	—	—	淡灰色	石英・長石	回転ナデ	回転ナデ			R003
第26図-7	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$2.0+\alpha$	—	—	淡黄褐色	石英・角閃石	回転ナデ	回転ナデ			R004
第26図-8	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$1.7+\alpha$	—	—	淡褐色	赤色粒子・白色粒子	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R010
第26図-9	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$1.5+\alpha$	—	—	淡黄褐色	石英・角閃石	回転ナデ	回転ナデ			R009
第26図-10	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	(11.1)	3.1	(6.1)	—	淡暗褐色	石英・長石・角閃石	回転ナデ	回転ナデ	坏A		R005
第26図-11	SK006 2層 黒色土	土師器	坏	—	$1.9+\alpha$	—	—	淡黄褐色	長石・角閃石	回転ナデ	回転ナデ			R006
第26図-12	SK006 2層 黒色土	土師器	鉢	—	$3.0+\alpha$	—	—	淡暗黄褐色	赤色粒子・白色粒子	ハケ目	ハケ目後ナデ			R007
第26図-13	SK006 2層 黒色土	土師質土器	鉢	—	$2.4+\alpha$	—	—	黒茶色	長石・赤色粒子	回転ナデ・ 摩滅のため調整不明瞭	回転ナデ・指オサエ後ナデ			R011
第26図-14	SK006 2層 黒色土	瓦質土器	鉢× 描鉢	—	$7.1+\alpha$	(11.0)	—	灰黄色	石英	ハケ目・ナデ	ナデ			R012
第26図-15	SK010 黒色土	土師器	坏	—	$2.1+\alpha$	—	—	橙色	角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ		10・Ⅲ期	R001
第26図-16	SK015 8層 黒色土	土師器	坏	(12.4)	3.1	—	—	(内)暗灰色 (外)淡赤褐色	長石・赤色粒子・ 白色粒子	摩滅・ナデ	ヨコナデ	坏a	10・Ⅰ期	R001
第26図-17	SK019	土師器	甕	(19.0)	$7.0+\alpha$	—	—	暗茶褐色	石英・長石・角閃石	ヨコナデ	ハケ目		9～10世紀	R001
第26図-18	SK021 黒色土	土師器	甕	—	$2.5+\alpha$	—	—	暗橙褐色	赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ			R001
第26図-19	SK023 黒色土	土師器	坏	(12.5)	3.9	(8.6)	—	黄褐色	石英・長石・角閃石・ 赤色粒子	回転ヨコナデ	摩滅のため調整不明瞭・ 回転ヨコナデ・ 回転ヘラ切り離し	坏e	9・Ⅲ期	R001
第26図-20	SK024 黒色土	土師器	坏	—	$0.6+\alpha$	—	—	淡褐色	長石・角閃石・赤色粒 子	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭		9・Ⅲ期 以降	R001
第26図-21	SK025 10層 黒色土	黒色土器	碗	16.4	6.6	9.8	—	淡灰茶色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ミガキ(左方向のズリ)	碗c(A類)	10・Ⅲ期	R001
第26図-22	SK028 黒色土	土師器	坏	11.9	2.9	8.2	—	淡茶褐色	石英・長石・角閃石	回転ナデ	回転ナデ	坏a	9・Ⅲ期	R001
第26図-23	SK039 黒色土	土師器	甕	—	$1.5+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・長石	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭		古代	R001
第26図-24	SK039 黒色土	土師器	坏	—	$0.6+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・角閃石	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R002
第26図-25	表土 黒褐色土	土師器	小皿	—	$1.0+\alpha$	(5.8)	—	淡白褐色	石英・長石・角閃石	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り離し			R006
第26図-26	表土 黒褐色土	土師器	坏×盤	—	$1.5+\alpha$	—	—	にぶい白褐色	石英・角閃石	摩滅のため調整不明瞭	摩滅のため調整不明瞭			R005
第26図-27	表土 黒褐色土	土師器	坏	—	$1.0+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・角閃石	摩滅のため調整不明瞭	ナデ			R004
第26図-28	表土 黒褐色土	土師質土器	鉢	(30.0)	$6.1+\alpha$	—	—	暗橙褐色	石英・長石・角閃石	ヨコ方向のハケ目	不定方向のハケ目			R002
第26図-29	表土 黒褐色土	石製品	石鏝	長2.6	幅1.6	厚0.4	12g	—	—	—	—	姫島産黒曜石		R001
第26図-30	表土 暗褐色土	土師器	小皿	—	$1.3+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・赤色粒子	ナデ	摩滅のため調整不明瞭			R001
第26図-31	表土	土師器	坏	—	$1.1+\alpha$	—	—	淡茶褐色	石英・角閃石	ナデ	ナデ		9・Ⅲ～Ⅳ 期	R004

第4表 第154次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	時期	地区
1	SK001	土坑	暗褐色土	土師器:碗 弥生土器:甕	1→5		I9
2	SP002	ピット	暗褐色土	縄文土器:条痕文土器片(早期末)・胴部片 弥生土器:胴部片			I13
3	SP003	ピット	黒褐色土	その他:口縁部片か			I7
4	SP004	ピット	黒褐色土	弥生土器:胴部片			I6
5	SI005	竪穴建物跡	暗褐色土	土師器:小型丸底壺・高坏片・甕口縁部	5→1	5世紀代	I8・I9・J8・J9
			暗褐色土(P-1)	土師器:壺頸部(突帯あり)			
			暗褐色土(P-2)	土師器:胴部片			
			堀方 明褐色土	土師器:高坏・甕			
6	SP006	ピット	黒褐色土	弥生土器:甕底部片		弥生後期	J3
7	SP007	ピット	暗褐色土				H4
8	SP008	ピット	黒褐色土	その他:土器片			E2
9	SP009	ピット	黒褐色土	その他:礫のはがれたもの			D2
10	SI010	竪穴建物跡	暗褐色土	土師器:鉢・甕胴部片 須恵器(古墳):蓋 須恵器(古代):坏 弥生土器:甕・複合口縁壺・甕×鉢・底部(平底)・高坏片		6世紀末～ 7世紀初頭	D1・D2・E1・E2
			暗黄褐色土(壁溝)	土師器:口縁部・胴部片			
			明黄褐色土 床面直上(P-1)	土師器:鉢か			
			SI010sk001 黄褐色土(P-2)	土師器:甕口縁部			
			暗褐色土(P-3)	土師器:甕口縁部～頸部			
			明黄褐色土	土師器:甕口縁部・甕胴部			
			b 暗褐色土	土師器:胴部片			
			e 暗黄褐色土	土師器:胴部片			
			カマド 黄褐色埋土	石製品:カマドの礎石			
			カマド 赤褐色土(P-4の上)	土師器:胴部片			
			カマド 赤橙色焼土(P-1)	土師器:胴部片			
			カマド 暗褐色土(P-2)	土師器:胴部片			
			暗赤褐色土	土師器:胴部片(穿孔)			
			カマド 暗赤褐色土	土師器:胴部片			
			カマド 暗赤褐色土(P-3)	土師器:胴部片			
			カマド 暗橙色焼土(P-4)	土師器:甕口縁部・胴部片・底部片			
			カマド 暗褐色土(P-5)	土師器:甕口縁部・甕×壺胴部片			
11	SP011	ピット	暗褐色土	弥生土器:甕口縁部片～胴部・底部片(平底)・壺(外面赤色)		弥生以降	C1
12	SP012	ピット	暗褐色土	石製品:敲石		弥生	I15
13	SP013	ピット	黒褐色土	弥生土器:壺口縁部片・胴部片		弥生後期	H2
14	SP014	ピット	暗褐色土	その他:土器片			D3
15	SD015	溝状遺構		土師質土器:大甕(便所) 国産陶器(近世):陶器片 国産磁器:碗片(肥前系)		19世紀以降	I2～H10
			灰褐色土	土師質土器:大甕			
16	SP016	ピット	暗褐色土	国産陶器(近世):皿(刷毛目唐津) その他:土器片		近世	H3
17	SP017	ピット	黒褐色土	弥生土器:底部片(平底)		弥生	H2
20	SB020	掘立柱建物跡	a 暗褐色土	弥生土器:土器片			I15
			b 黒褐色土	弥生土器:口縁部・土器片			I16
			c 黒褐色土	弥生土器:土器片			I16
			d 黒褐色土				H15
			e 暗褐色土	弥生土器:高坏(坏部分)・土器片			H15
			f 黒褐色土				h16
25	SD025	溝状遺構	暗褐色土	瓦質土器:浅形火鉢(16C後～末) 国産陶器(近世):碗底部片	35→25	近世	G1・G2・G3・H1・ H2・H3
			黒褐色土				
30	SB030	掘立柱建物跡	a 暗褐色土	弥生土器:壺底部(丸底)			B2・B3
			b 暗褐色土	弥生土器:土器片			B2
			c 褐色土	弥生土器:壺底部(平底)			C2
			d 暗褐色土				B1
35	SD035	溝状遺構	暗黄褐色土		35→25	近世以前	
36	SP036	ピット	黒褐色土				
			黒色土	弥生土器:胴部片			
			表土	弥生土器:胴部片			
			カクラン	須恵器:坏 土師質土器:甕片 弥生土器:甕底部片			
				瓦類:平瓦 国産磁器:碗(肥前系)			

第5表 第155次調査区遺構番号一覧表①

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	時期	地区
1	SK001	粘土探掘坑		土師器:坏(10-IV期) 弥生土器:甕(底部) 石器:剥片	2→1→35	10世紀後半か	B2・C2
			黒色土	須恵器(古墳):甕胴部片			
2	SK002	粘土探掘坑	黒色土		2→1・3		B2・C2
3	SK003	粘土探掘坑	黒色土		2→3		B1・B2・C1・C2
4	SK004	粘土探掘坑	黒色土				C1
5	SK005	粘土探掘坑	黒色土	土師器:碗口縁部片(10-III期) その他:土器片	5→24	10世紀中頃	D1

第6表 第155次調査区遺構番号一覧表②

S番号	遺構番号	種別	土色	出土遺物	切り合い	時期	地区
6	SK006	土坑	2層 黒色土	土師器: 坏A・小皿A(Ⅰ)・坏 土師質土器: 鍋(14~15C)・鉢底部片(14~15C)・壺 瓦質土器: 鉢×擂鉢(摩滅) 国産陶器(中世): 焼締陶器(備前か)	6→7	15世紀代	E2
7	SK007	粘土採掘坑	黒色土		6→7		D2
8	SK008	粘土採掘坑	黒色土				F2
9	SK009	粘土採掘坑	1層 黒褐色土	弥生土器: 甕口縁部片 土師器: 胴部片(薄手)			F2・G2
10	SK010	粘土採掘坑	黒色土	弥生土器: 土器片 土師器: 坏(10-Ⅲ期)・口縁部片・底部片 弥生土器: 土器片		10世紀中頃	G2
11	SK011	粘土採掘坑	黒色土				H1
12	SK012	粘土採掘坑	黒色土	須恵器: 甕片 土師質土器: 胴部片 瓦質土器: 土器片	12→13		H2・I2
13	SK013	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 胴部片・甕片(煮炊類・供膳具類)・底部片	12→13		I2
14	SK014	粘土採掘坑	黒褐色土				L2
15	SK015	粘土採掘坑	4層 黒色土 8層 黒色土(褐色ブロック土少量含む)	土師器: 胴部片(穿孔か) 土師器: 坏a(10-Ⅰ期)・胴部片か	45→15	10世紀前半	J1・K1
16	SK016	粘土採掘坑	黒褐色土		16→17		G2
17	SK017	粘土採掘坑	黒褐色土		16→17		H2
18	SK018	粘土採掘坑	黒色土	弥生土器: 胴部片			J3
19	SK019	粘土採掘坑	黒色土(ブロック土あり)	土師器: 甕口縁部片(9~10C) 須恵器: 胴部片 弥生土器: 土器片	20→43→44→19	9~10世紀	L2
20	SB020	掘立柱建物跡	a 黒色土 b 黒色土 c 黒色土 d 黒色土 e 黒色土 f 黒色土 g 黒色土 h 黒色土		20a→19 20g→39 20h→39		L3 L3 K3 K3 L2 L2 K2 K2
21	SK021	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 鉢口縁部片・甕口縁部片 弥生土器: 胴部片・底部片(摩滅)		古代	L12
22	SK022	粘土採掘坑	黒色土	その他: 土器胴部片			I1・J1
23	SK023	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 坏e(9-Ⅲ期)・坏口縁部片(完形品より褐色が強い) 弥生土器: 胴部片	23→24・33→30	9世紀中頃～後半	D1・E1
24	SK024	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 坏底部片(イト)(9-Ⅱ期・9-Ⅲ期以降か) 縄文土器: 胴部片(摩滅)	5・23→24→32	9世紀中頃	D1・D2
25	SK025	粘土採掘坑	2層 黒色土 10層 黒色土	その他: 土器胴部片 土師器: 碗c(10-Ⅲ期)	25→27	10世紀前半～中頃	F1・G1
26	SK026	粘土採掘坑	黒褐色土				J2
27	SK027	粘土採掘坑	黒褐色土		25→27→28→29		F1・F2
28	SK028	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 坏a(9-Ⅲ期)・胴部片・底部片	27→28→29→30	9世紀中頃	E1
29	SK029	粘土採掘坑	黒色土		27→28→29→31		E1・E2
30	SK030	粘土採掘坑	黒色土		23・28・29・33→30		E1・E2
31	SK031	粘土採掘坑	黒褐色土		31→32		D2
32	SK032	粘土採掘坑	黒褐色土		31→32		D2
33	SK033	粘土採掘坑	黒色土		23→33→30		E1・E2
34	SK034	粘土採掘坑	黒褐色土				D3
35	SK035	粘土採掘坑	黒色土		1→35		C2
36	SK036	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 坏口縁部片・坏底部片(イト)(9-Ⅱ期以降)		9世紀代か	F2・F3
37	SP037	ピット	黒色土	土師器: 胴部片			J2
38	SP038	ピット	黒色土	土師器(古代か): 坏口縁部片 須恵質土器: 胴部片 瓦質土器: 底部片(中世か)			K2
39	SK039	粘土採掘坑	黒色土	土師器: 坏・壺	20→39	古代	K2
40	SK040	粘土採掘坑	黒褐色土				H3・I3
41	SK041	粘土採掘坑	黒色土		41→42		J2
42	SK042	粘土採掘坑	黒色土		41→42		J2
43	SK043	粘土採掘坑	黒色土		43→44→19		L2
44	SK044	粘土採掘坑	黒色土		43→44→19		L2
45	SK045	粘土採掘坑	黒色土		45→15		K1・K2
			表土	土師器: 坏(9-Ⅲ~Ⅳ期)・壺 須恵器: 甕 弥生土器: 底部片			
			表土 暗褐色土	土師器: 底部片(イト)・小皿・胴部片(外面ケズリ・褐色) 縄文土器: 条痕文土器片 弥生土器: 胴部片 国産陶器(近世): 胴部片 鉄製品: 鉄釘片			
			表土 黒褐色土	土師器: 坏(9-Ⅲ期)・小皿(摩滅)・底部片(イト)・坏a(イト)(10-Ⅰ~Ⅱ期) 土師器(古代): 坏×盤 土師質土器: 鉢口縁部片(16C) 石器: 石鏃(姫島産黒曜石)			



1 第 154 次 調査区遠景 (西より)



2 第 154 次 調査区全景 (上が北)



1 第 155 次 調査区遠景 (南より)



2 第 155 次 調査区全景 (上が西)



1 第156次 調査区遠景(南西より)



2 第156次 調査区全景(上が南)

写真図版 4



1 第154次 SB020 完掘状況(東より)



2 第154次 SB030 完掘状況(南より)



3 第154次 SI005 貼床検出状況(南より)



4 第154次 SI005 完掘状況(南より)



5 第154次 SI010 貼床検出状況(南より)



6 第154次 SI010 完掘状況(南より)



7 第154次 SI010 カマド焼土遺物出土状況(南より)



8 第154次 SI010 カマド火床面土層(東より)



1 第154次 SI010 カマド完掘状況(南より)



2 第154次 SD015 検出状況(西より)



3 第154次 SD025・SD035 完掘状況(東より)



4 第155次 SB020 完掘状況(北より)



5 第155次 SK006 遺物出土状況(西より)



6 第155次 SK006 完掘状況(西より)



7 第155次 SK007 土層(西より)



8 第155次 SK009 土層(北西より)

写真図版 6



1 第155次 SK010土層(西より)



2 第155次 SK011完掘状況(東より)



3 第155次 SK014完掘状況(南より)



4 第155次 SK016土層(南より)



5 第155次 SK025遺物出土状況(西より)



6 第155次 SK025・SK027・SK028完掘状況(北より)



7 第156次 SX015・SX020検出状況(東より)



8 第156次 SX015・SX020完掘状況(上が西)



第 16 図 -8



第 16 図 -16



第 16 図 -18



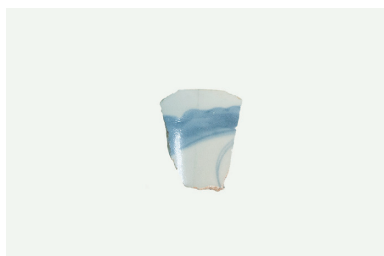
第 16 図 -20



第 16 図 -21



第 16 図 -23



第 16 図 -26



第 16 図 -27



第 16 図 -29



第 16 図 -30



第 26 図 -3



第 26 図 -4



第 26 図 -12 内面



第 26 図 -12 外面



第 26 図 -17



第 26 図 -19



第 26 図 -21



第 26 図 -22

報 告 書 抄 録

ふりがな	よこいせき							
書名	横尾遺跡11							
副書名	大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第146集							
編著者名	小野綾夏 永井美香(株式会社九州文化財総合研究所)							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111 FAX(097)536-0435							
発行年月日	西暦2017年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
よこいせき 横尾遺跡 第154次	おおいたしおおあぎよこ 大分市大字横尾	44201	201158	33° 13′ 07″	131° 37′ 44″	20151116～20160115	808.0	区画整理事業
よこいせき 横尾遺跡 第155次	おおいたしおおあぎよこ 大分市大字横尾	44201	201158	33° 12′ 25″	131° 40′ 13″	20151116～20151228	279.5	区画整理事業
よこいせき 横尾遺跡 第156次	おおいたしおおあぎよこ 大分市大字横尾	44201	201158	33° 12′ 34″	131° 40′ 29″	20160923～20161031	196.3	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
横尾遺跡 第154次	集落	古墳・近世	堅穴建物跡・カマド・掘立柱建物跡・溝状遺構		土師器・須恵器・国産陶磁器類			古墳時代の堅穴建物跡
横尾遺跡 第155次	集落	古代・中世	粘土採掘坑・掘立柱建物跡		土師器・国産陶器			古代の粘土採掘坑跡
横尾遺跡 第156次	集落	弥生	円形堅穴建物跡・土坑		弥生土器片			弥生時代の円形堅穴建物跡
要約	調査地点である横尾遺跡は、大分川と大野川に挟まれた下流域に広がる鶴崎台地上に位置する。平成27年度には、第154・155次の2地点、平成28年度には第156次調査地点において発掘調査を実施した。 第154次調査地点は、横尾遺跡の最北端に位置し、当該地区の周辺で平成22年から23年度におこなっている調査では古墳時代前期～中後期にかけての堅穴建物跡が複数見つかっている。調査の結果、古墳時代中期の堅穴建物跡(SI005)、一辺が7mでカマドをもつ古墳時代後期の方形堅穴建物跡(SI010)を検出した。今回の調査地点も含めて横尾遺跡の最北端には古墳時代中期～後期にかけて集落が広がっていることがいえる。 第155次調査地点は、横尾遺跡の西南隅に位置している。調査の結果、粘土採掘坑と考えられる土坑を41基、性格は不明であるが15世紀代の土坑(SK006)1基を検出した。粘土採掘坑から出土した遺物は、坏や碗があり9世紀中頃～10世紀中頃までに帰属しており、それ以前に粘土の採掘を行ったことが推定される。周辺の調査成果でも同時期の粘土採掘坑が複数検出されており、155次調査地点が粘土採掘場の南限になることがわかった。 第156次調査地点は、横尾遺跡東側に位置し、弥生時代後期の堅穴建物跡が確認できる多武尾遺跡に隣接している。調査の結果、以前西隣で調査をおこなった第70次調査のビットも含めて弥生時代後期の円形堅穴建物跡が2棟確認できた。円形堅穴建物跡は、環濠集落内の居住空間と祭祀空間の中間地点に位置するため、特殊な構造をもつ遺構であることが考えられる。							

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第146集

横尾遺跡11

— 大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2017年3月10日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31

